

俵 田 遺 跡

第2次発掘調査報告書

1984

山 形 県
山形県教育委員会

たわら だ
俵 田 遺 跡
第2次発掘調査報告書

昭和59年3月

山 形 県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和58年度に実施した八幡町俵田遺跡第2次発掘調査の成果をまとめたものであります。

北に出羽富士「鳥海山」を望み、肥沃な庄内平野を舞台とする酒田市東部から八幡町にかけての水田地帯は、古くから文化遺産に恵まれ、豊かな自然環境とともに価値ある歴史環境をかたちづくってまいりました。国指定の史跡となっている、平安時代出羽国の国府に擬定される「城輪柵跡」、古代の建築部材を埋設している「堂の前遺跡」は、最近の調査によって明らかにされた所産であります。

城輪柵跡の南東に位置する俵田遺跡からも、今回の発掘調査で、ほぼ4m四方の範囲から絵壺、人形木製品、刀形木製品、馬形木製品、蕭串など約130点が、祭場として配置されたかたちで出土しました。時期は平安時代の初めに属し、陰陽師による厄払いの儀式を復元しうる好資料であります。自分の体に汚れや災いがふりかかったときの身代りが「ひとがた」であり、薄板を人間の形に切り取り、顔を書きこみ、これで身体をなでまわし、汚れや災いを移したといわれております。俵田遺跡の水辺の祭祀場は、難事に際して俗信や信仰に心の支えを求める昔もかわらぬ人々の思いを呼び起こさせてくれます。本書が埋蔵文化財に対する御理解もかねて、皆さまの一助となれば幸いと存じます。

最後に、調査にあたって多くの御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に、心から感謝を申し上げます。

昭和59年3月

山形県教育委員会

教育長 大竹正治

例　　言

1. 本書は、山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受け昭和58年度に実施した、農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）に係わる、依田遺跡（山形県遺跡地図番号 2264）の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和58年4月11日から同年6月3日までの延34日間行なった。
3. 調査体制は下記の通りである。

調査主体	山形県教育委員会		
調査担当	山形県埋蔵文化財緊急調査団		
調査担当者	主任調査員	佐藤庄一（庄内教育事務所 埋蔵文化財調査係長）	
	現場主任	安部 実（庄内教育事務所 技師）	
	調査員	野尻 侃（庄内教育事務所 技師）	
事務所	庄内事務所長	池田泰正（庄内教育事務所 所長）	
	所長補佐		
	総務担当	藤塚真一（庄内教育事務所 次長）	
		山田 登（庄内教育事務所 次長）	
	庶務担当	金内光彦（庄内教育事務所 総務課長）	
	業務担当	成田恒夫（庄内教育事務所 社会教育課長）	
	事務局員	藤原正俊（庄内教育事務所 総務主査）	

4. 調査にあたっては、山形県庄内支庁経済部最上川右岸土地改良事務所、日向川土地改良区、八幡町教育委員会、地元岡島田・大島田部落など関係諸機関の協力が得られた。
5. 本遺跡は、今次調査に先だち昭和53年4月17日から同年6月9日まで、今年度調査区の道路を挟んだ東側をやはり農村基盤総合整備パイロット事業に係わり緊急発掘調査を行なっている。調査報告は「山形県埋蔵文化財調査報告書第64集『農林事業関係遺跡(2)発掘調査報告書』1983年」に1次調査概報として載せられている。なお本書では、遺構、遺物の詳細について報告した。
6. 本書の作成は、佐藤庄一、安部実が担当執筆した。遺物写真撮影は安部実、測図・トレース・拓本等の作成は、庄司功、吉村加代子、小池敏美、小野真由美、佐藤玲子、坪池悦子、菅原郁子、水落みち子がこれにあたった。編集は野尻侃、全体を佐藤庄一が総括した。
7. 木製祭祀遺物の墨描解明に際しては、東北歴史資料館の赤外線テレビセッタを使用させていただく事が出来た。ここに記して感謝申し上げる。

凡　　例

1. 本書で使用した遺構の分類記号は次のとおりである。

S A	柱列・柵	S B	建物	S D	溝	S G'	河川
S K	土壤	S M	祭祀	S T	竪穴住居	S J	畦畔状遺構
S X	その他	E B	柱穴（建物を構成する因子）				
2. 遺構番号は、2次調査のものを1~200番、1次調査のものを201番以降として表記した。
3. 報告書執筆の基準は次のとおりである。
 - (1) 実測図中の方位記号は真北を示している。なおグリッドのY軸線は磁北であり真北より8度9分西へ傾く。
 - (2) 遺構実測図は原則として $\frac{1}{100}$ ・ $\frac{1}{50}$ ・ $\frac{1}{20}$ 縮尺で採録し、各々にスケールを付した。
 - (3) 遺物実測図は原則として $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{5}$ で採録し各々にスケールを付した。
 - (4) 土器実測図および拓影図の断面は、白ヌキが土師器・赤焼土器、黒ベタが須恵器を現わしている。土器内面又は外面に網点が施されているものは、炭素吸着又は施釉陶器を現わしている。
 - (5) 遺物観察表中にある、計測値（　）内の数値は図上復元による推定値である。表中「底部切り離し」の回糸は回転糸切り離しを、ヘラ切は回転ヘラ切り離しを現わす略記である。祭祀遺物観察表中にある、計測値＜　＞内の数値は残長である。
 - (6) 遺物写真は、遺物実測図に合うように $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{5}$ を原則としたが、外れるものは各々縮尺を註記した。
 - (7) 遺物実測図・遺物写真・遺物観察表にある遺物番号は共通のものである。

目 次

I 遺跡の立地と環境	
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
II 調査経過	
1. 調査に至る経過	4
2. 2次調査の経過	6
III 2次調査結果	
1. 調査概要	11
2. 層序	11
3. A区検出遺構	13
4. B区検出遺構	17
5. C区検出遺構	17
6. 出土遺物	19
7. SM60祭祀遺構	32
IV 1次調査結果	
1. 調査の概要	49
2. 北区検出遺構	49
3. 西区検出遺構	49
4. 中央区検出遺構	52
5. 南区検出遺構	53
6. 出土遺物	56
V まとめ	
1. 遺構の変遷	66
2. SM60祭祀遺構について	66

挿 図

図 版

- 第1図 道路位置図
 第2図 地形分類図
 第3図 第1・2次調査グリッド配図
 第4図 A区平面図
 第5図 A区35~50G土層断面図
 第6図 A区土層図
 第7図 SB40建物跡
 第8図 SK29・58土壤
 第9図 B区平面図
 第10図 SX1木棺
 第11図 C区平面図
 第12図 建物跡・土壤出土遺物
 第13図 溝状遺構・SX39落ち込み出土遺物
 第14図 土壙・A区 包含層出土遺物(1)
 第15図 SX26整地層出土遺物(1)
 第16図 SX26整地層出土遺物(2)
 第17図 A区 包含層出土遺物(2)
 第18図 A区 包含層出土遺物(3)
 第19図 A区 包含層出土遺物(4)
 第20図 C区出土遺物
 第21図 SM60木製祭祀遺物分類図
 第22図 SM60出土遺物(1)
 第23図 SM60出土遺物(2)
 第24図 SM60出土遺物(3)
 第25図 SM60出土遺物(4)
 第26図 SM60出土遺物(5)
 第27図 SM60出土遺物(6)
 第28図 SM60出土遺物(7)
 第29図 SM60出土遺物(8)
 第30図 SM60出土遺物(9)
 第31図 SM60出土遺物(10)
 第32図 SM60祭祀遺構平面図
 第33図 北区平面図
 第34図 西区平面図
 第35図 中央区平面図
 第36図 南区平面図
 第37図 ST201竪穴住居跡
 第38図 ST201出土遺物
 第39図 建物跡出土遺物
 第40図 溝状遺構出土遺物
 第41図 中央区出土遺物(1)
 第42図 中央区出土遺物(2)
 第43図 中央区出土遺物(3)
 第44図 包含層出土遺物
 第45図 SM60祭祀遺構復元図
- 図版1 供田遺跡航空写真 1966年、道路近景
 図版2 S B40建物跡、SX26整地層周辺
 図版3 S B2建物跡、SB100建物跡
 図版4 SK58・29土壤、SK29土壤建物出土状況
 図版5 SG61・116溝状遺構
 図版6 SG61溝状遺構上層、SG116溝状遺構上層
 図版7 SA120 119・123板列、SA120・119板列
 図版8 SA120板列、同土層
 図版9 SA123板列土層、EB121柱根
 図版10 SX26整地層、SX26整地土層
 図版11 SM60祭祀遺構近景
 図版12 人面墨描土器98出土状況・人面墨描土器内部烹煮
 図版13 人形(145・146・147・148)馬形(167)壺串(182-
 183・189・184・188・185・186・190・196)出土
 状況、人形(144・157・158)刀形(141)出土状況
 図版14 人形(左より147・146・148・145)出土状況、
 人形(143)出土状況
 図版15 壺(132)・人形(133)・壺串出土状況、
 馬形(167)出土状況
 図版16 SM60祭祀遺構掘り下げ状況、
 SM60祭祀遺構東西土層
 図版17 A区調査状況、B区SX1木棺出土状況
 図版18 C区遺物検出状況、SB90建物跡
 図版19 ST201住居跡検出状況、同金環
 図版20 SD202溝状遺構、中央区IV層検出遺構
 図版21 2次調査A区出土遺物(1)
 図版22 2次調査A区出土遺物(2)
 図版23 2次調査A区出土遺物(3)
 図版24 2次調査A区出土遺物(4)
 図版25 2次調査A区出土遺物(5)
 図版26 2次調査A区出土遺物(6)
 図版27 2次調査C区出土遺物
 図版28 SM60出土遺物(1)人面墨描土器
 図版29 SM60出土遺物(2)人面墨描土器(98)内斎串
 図版30 SM60出土遺物(3)須恵器底、火切臼
 図版31 SM60出土遺物(4)刀形、人形
 図版32 SM60出土遺物(5)人形
 図版33 SM60出土遺物(6)人形
 図版34 SM60出土遺物(7)馬形
 図版35 SM60出土遺物(8)馬形
 図版36 SM60出土遺物(9)壺串
 図版37 SM60出土遺物(10)壺串、他
 図版38 1次調査出土遺物(1)
 図版39 1次調査出土遺物(2)
 図版40 1次調査出土遺物(3)
 図版41 1次調査出土遺物(4)
 図版42 1次調査出土遺物(5)
 図版43 1次調査出土遺物(6)

I 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

俵田遺跡は、県北西部の庄内平野の北半部中央（いわゆる飽海平野）に位置する。酒田市街より北東約7km、飽海郡八幡町大字岡島田字俵田を中心とした水田中にあり、標高は約10mを測る。

庄内平野は県内最大の平坦地で、南北約50km、東西約6~16km、面積は約530km²（砂丘部除く）を測る。日本海と接する西縁には日本海側有数の庄内砂丘があり、北端は吹浦川河口から南端は湯野浜付近まで約34kmに渡って延びている。標高は中央部で約64mを測る。

平野の中央を最上川（県最南端から中央部を経て日本海に注ぐ延長224kmの一級河川）が貫流し、庄内平野で広い氾濫源を形成しながら諸川と合流し日本海に入る。

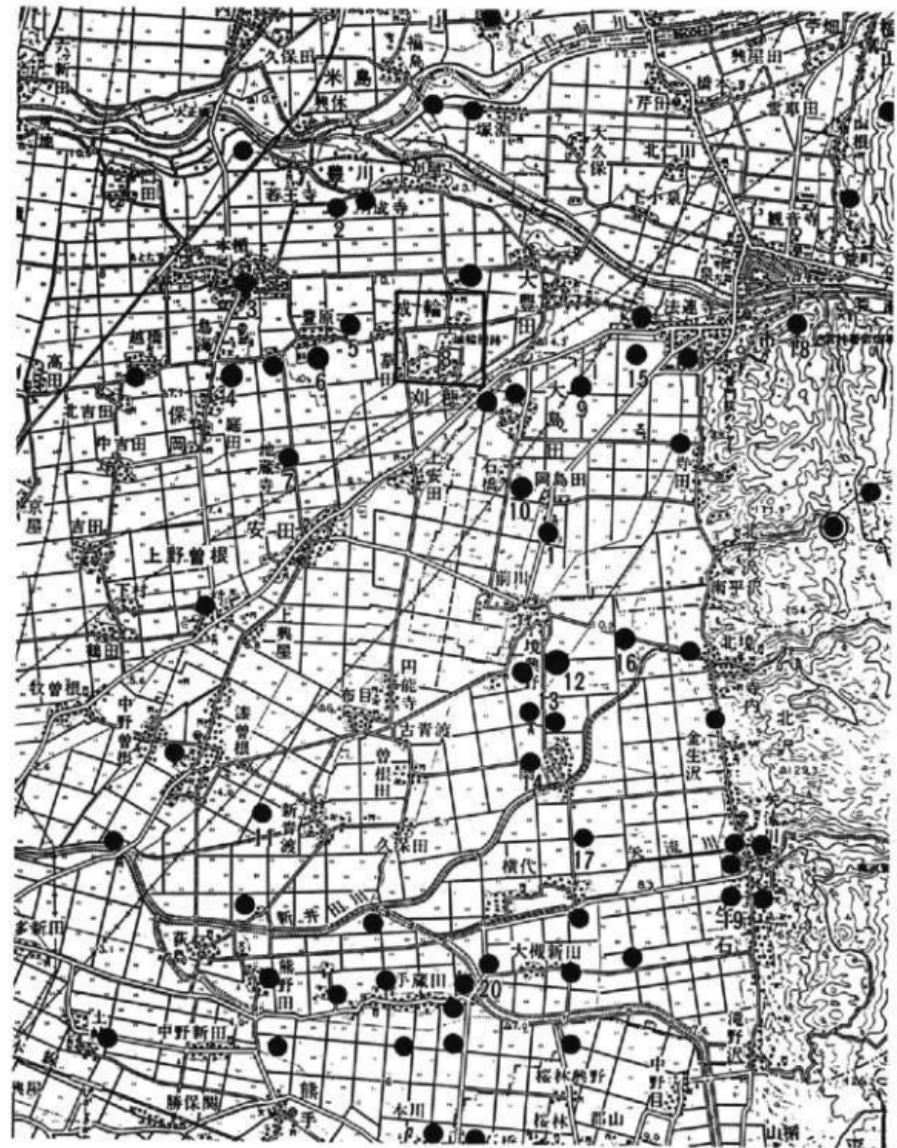
遺跡の立地する飽海地方の地形は、東側の出羽丘陵地域と西側の庄内北部平野地域に区分される。平野部は東から庄内北部河間低地、酒田北部三角洲、庄内北部砂丘の3つにさらに細分されている。河間低地には、自然堤防・後背湿地・狭義の河間低地を含んでいる。自然堤防は日向川・荒瀬川沿いにみられるほか、安田・漆曾根・布目などにあり、觀音寺から南西に放射状に存在する。これらは高度があまりなく、不明瞭な場合が多い。^{註-1}

第2図は、地形分類図に古代の遺跡を註記したものである。これを観るに、俵田遺跡を含めた古代の遺跡の大半は狭義の河間低地上に立地している事が理解される。自然堤防上には、城輪柵跡と大概新田遺跡の二箇所が確認されるが、この他にも未発見の遺跡が存在する可能性が考えられる。三角洲や後背湿地に遺跡が確認されていないことは、当時においては湿地状態で居住には不適当であったことが伺われる。平安期における古代集落・官衙の存在は出羽丘陵に沿う河間低地上に集中していたものと考えられる。

2. 歴史的環境

俵田遺跡の北西には、平安期の出羽国府と擬定されている国指定史跡「城輪柵跡」がある。^{註-2} 城輪柵跡は昭和6年に発見され、近年に至る発掘調査によりその姿が明らかにされてきている。一辺約720m方形の築地で囲まれた外郭部と、その中心部には一辺約120m方形の内郭部（政庁域）が確認されている。政庁域は四辺中央に門が開いており、外郭の東西および南北にある八脚門と、幅6~9mの道路状遺構で結ばれている。ここには、正殿・東西脇殿他の主要殿舎が整然と「匂」字形に配置された形で確認されており、3時期（9世紀前半~11世紀）に区別されている。

城輪柵跡・俵田遺跡の位置する、北を日向川、南を最上川によって区切られた平野部で

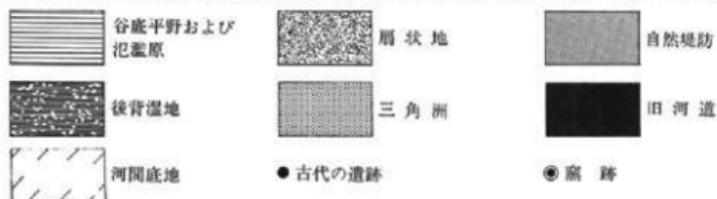
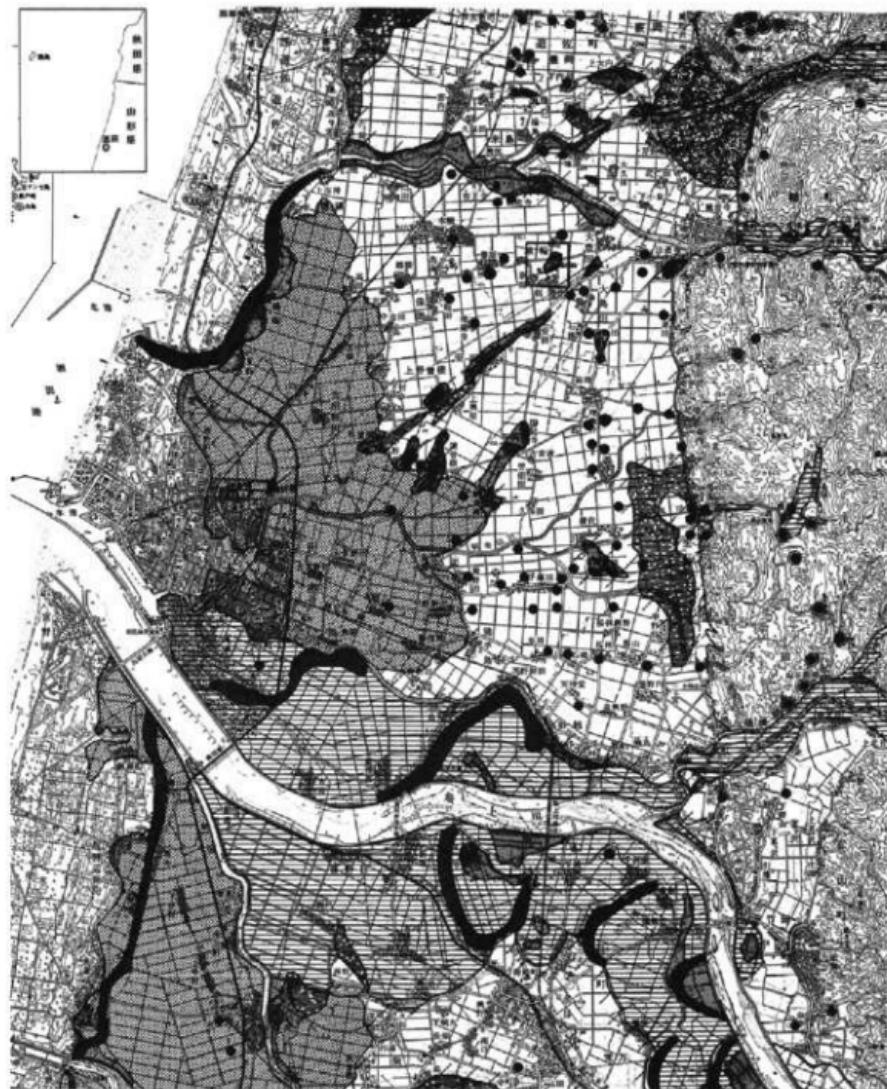


第1図 遺跡位置図

1:50,000 酒田

1500m 6 1000 2000 3000

- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-----------|--------------|
| 1. 俵田遺跡 | 2. 新田目B遺跡 | 3. 新田目城跡 | 4. 庭田遺跡 | 5. 豊原遺跡 |
| 6. 豊原B遺跡 | 7. 安田遺跡 | 8. 史跡・城輪櫛跡 | 9. 後田遺跡 | 10. 沼田遺跡 |
| 11. 新青渡遺跡 | 12. 境興野遺跡 | 13. 北田遺跡 | 14. 関B遺跡 | 15. 史跡・堂の前遺跡 |
| 16. 上ノ田遺跡 | 17. 高阿弥田遺跡 | 18. 八森遺跡 | 19. 生石2遺跡 | 20. 手麻田12遺跡 |



第2図 地形分類図（土地分類基本調査 酒田 1979年による）

は、約50箇所ほどの古代遺跡が確認されているが、これらは9世紀以降の所産と考えられ、7、8世紀代の遺跡、遺物の出土例はほとんど無かった。文献上にある出羽国開拓時の様子は非常に不鮮明な状態であった。しかし近年、この地域においては場整備事業に係る緊急発掘調査が増加しており、9世紀前後の内容が除々に解明されつつある。

このうち、国指定史跡「堂の前遺跡」は、約240m方形の区画の中に、礎石建物跡、八脚門、長押・肘木・斗などの古建築部材を埋設した築地業などが検出されており、「出羽國^{註-3}分寺」の可能性を考えられている。

城輪柵東方3kmの段丘上にある八森遺跡は、一辺90m方形の囲み施設の中に礎石建物や八脚門など、城輪柵跡政序域の建物配置と酷似した遺構が検出されており、「三代実録^{註-4}仁和三年条（887年）にある「国府移転先高敞之地」と推測されている。

これら官衙・寺院と考えられる他に、律令体制下に置かれていた村落の発掘例も増加している。墨書き器が多量に出土した、上ノ田・北田・沼田遺跡、祭祀にまつわる土器留め遺構を検出した後田・境興野遺跡、古墳時代前期の古式土師器が採集された関B遺跡、製鉄遺構を検出した豊原遺跡など特徴ある遺跡がある。

集落跡は城輪柵跡を中心に東西、南北に直線上に並ぶ傾向が観られ、国府創建とともに^{註-12}集落の地割配置が想定もされている。

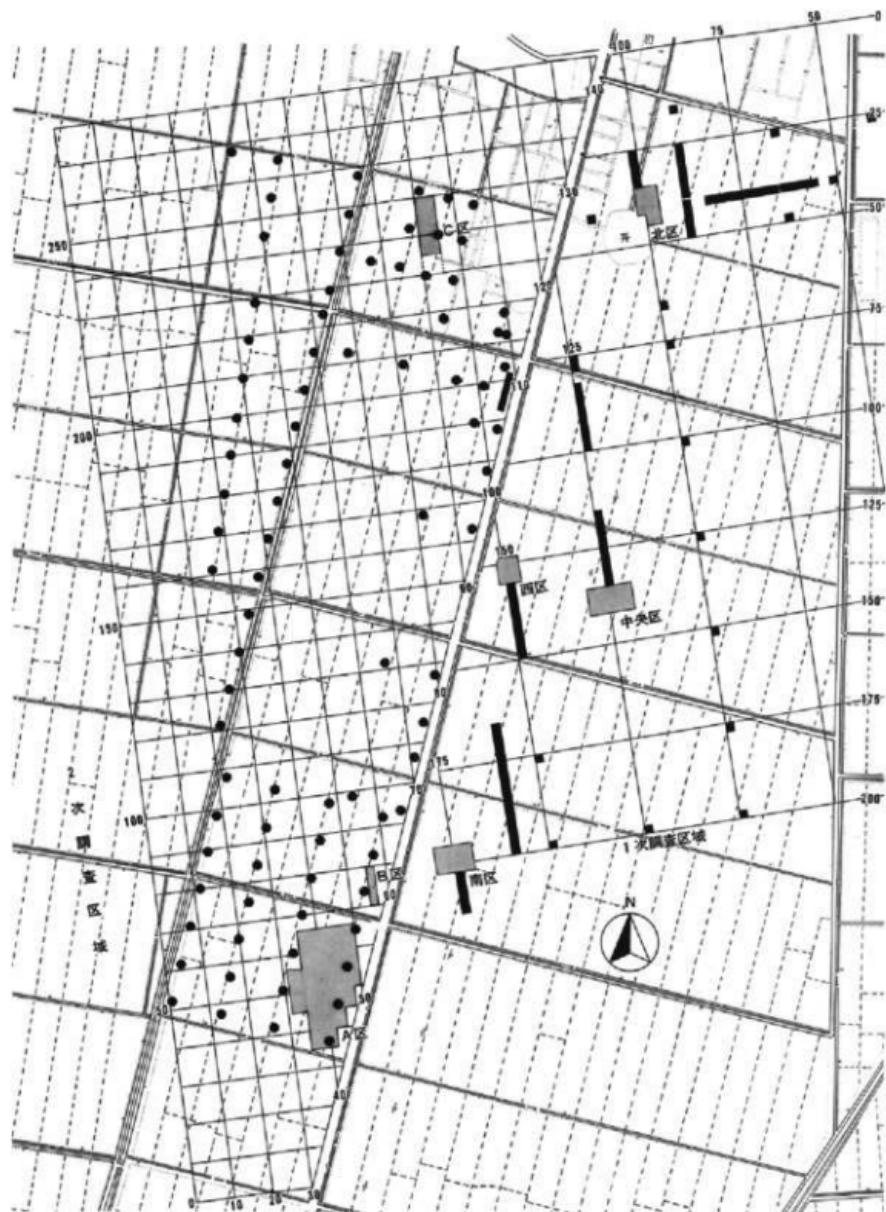
II 調査経過

1. 調査に至る経過

俵田遺跡は「山形県遺跡地図（昭和53年3月）」に奈良～平安時代の集落跡として記載されている。以前には、水田耕作中に遺物が出土した事が知られており、遺跡の存在が知られていた。

本遺跡が、県営農村基盤総合整備パイロット事業（庄内地区）の、昭和58年度は場整備施工予定区域に含まれる事になり、破壊される恐れが生じてきた。県教育委員会では前年度より県農林部、日向川土地改良区、八幡町教育委員会の関係機関と協議を持ち、調整を図ってきた。

庄内教育事務所埋蔵文化財分室では、57年10月に現地において遺跡範囲、保存状況を確認するため遺跡詳細分布調査を実施した。踏査、試掘を行なったところ、遺構・遺物の遺存が良好な状態で認められ、平安時代の集落跡であることが推定された。この調査結果に基づいて、再度関係諸機関と協議を行なったところ、県教育委員会が主体となって緊急発掘調査を実施することとなった。調査は、庄内教育事務所埋蔵文化財分室が担当することと



第3図 第1・2次調査グリッド配置図 ($S=1/3000$)

A horizontal number line starting at 0 and ending at 100. There is a tick mark in the middle of the line, which corresponds to the value 50.

なり、破壊の恐れがある事業区内に限定して実施することとなった。

なお、この調査に先だつ昭和53年に遺跡の東側を緊急発掘調査しており、平安時代の建物跡、竪穴住居跡など各種遺構が検出されており、西側部分についても遺跡の広がりが推測されていた。^{注-13}

2. 2次調査の経過

調査は、昭和58年4月11日に始まり、同年6月3日までの実質34日間行なった。初めに調査対象地域に1区画を2mとするグリッド（第1象限）を設定するための杭打ちを行なった。南北にY軸を設定し、これは1次調査と同じ磁北を向く。1グリッドの呼称は、北東隅の杭を代表とした。この後 1×2 m方形の試掘トレンチを87箇所設けて、遺構・遺物の集中域を求めた。（第3図第1・2次調査グリッド配置図の黒点がこの試掘箇所である。）この結果、集中域は大きく北と南に分かれている事がわかり、A区（東西36m南北62m、 $1,632\text{m}^2$ ）とB区（東西4m、南北20m、 80m^2 ）とC区（東西10m、南北30m、 300m^2 ）の3箇所の精査区を設けた。調査の経過は以下の通りである。

4月11日(月)～15日(金)。調査開始。器材の搬入と現場事務所内整備。地区割り設定作業。遺構集中域を探る試掘トレンチ掘り下げ。重機械（バックホー）を使用して精査区の表土除去作業。A・B区面整理。S X 1、柱穴等検出。遺跡遠景写真撮影。

4月18日(月)～22日(金)。A区面整理、遺構検出作業。A区検出遺構概略図を平板にて実測。精査区内グリッド釘打ち。A区西側を追加拡張。重機械を使用して表土除去。

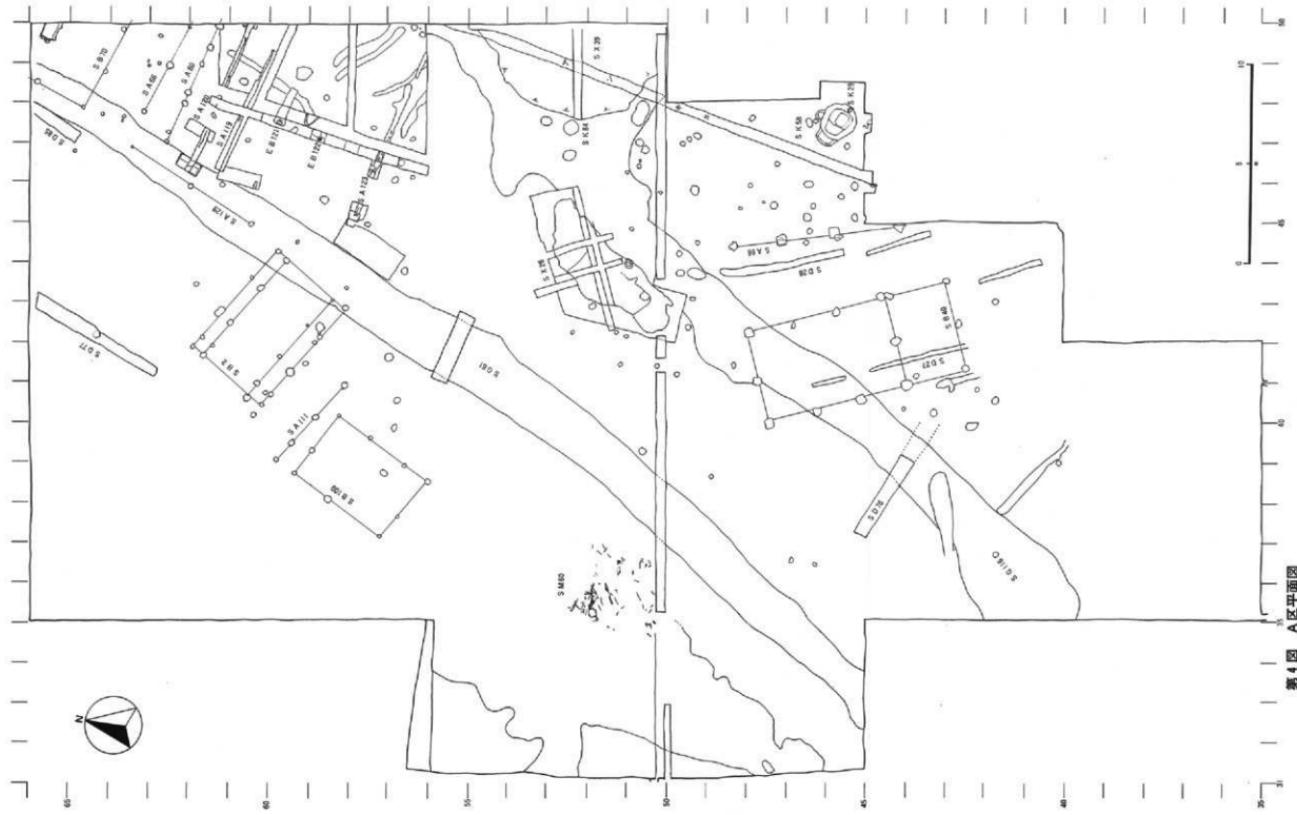
4月25日(月)～28日(木)。A区拡張区面整理。精査区面グリッド釘打ち。平板実測。掘立柱建物跡（S B 2・40・110）各柱穴掘り下げ。S X 26整地層掘り下げ。C区面整理作業。

5月9日(月)～13日(金)。A区掘立柱建物跡柱穴掘り下げ。溝状遺構、S X 39落ち込み、S G 61掘り下げ。S X 26・S G 61掘り下げにより、現遺構検出面の下層に、これ以前の遺構が存在する事が判明。A区西壁の排水溝掘り下げ時に、人面墨描土器出土。

5月16日(月)～21日(土)。雨天続きプレハブ内で遺物洗浄作業。A区中央に東西の土層断面観察用のトレンチ設定、掘り下げ、実測。S M60祭祀遺構、甕を中心として拡張掘り下げる。A区平面図実測作業。S A 120板列周辺掘り下げ。19日に現地説明会開催。

5月23日(月)～27日(金)。S A 120板列周辺掘り下げ、面整理、平面図作成。S M60祭祀遺構の西側の拡がりを見るため西へ6m、南北12m拡張する。続いて面整理。

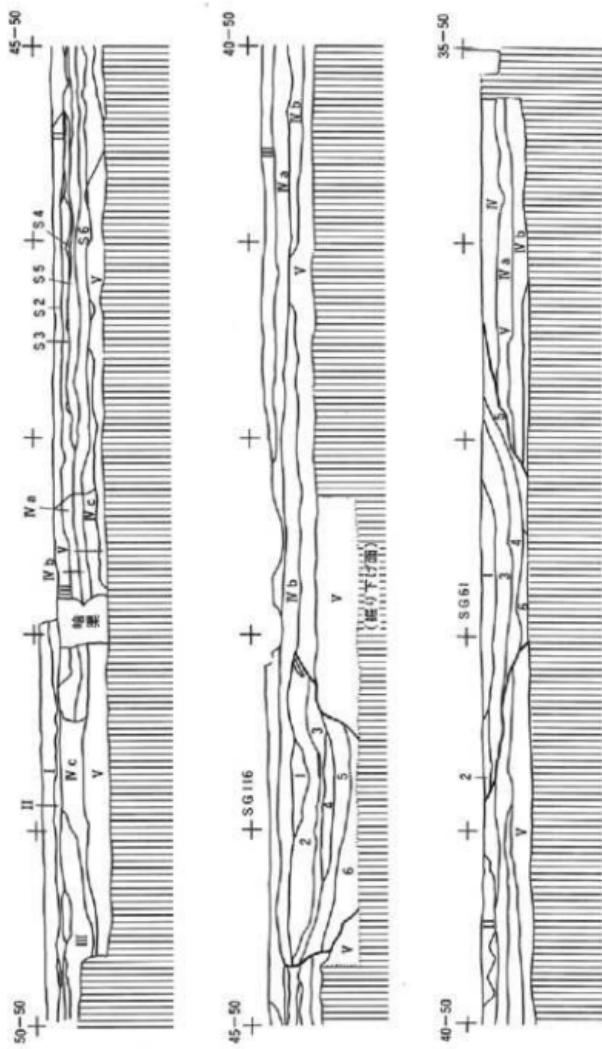
5月30日(月)～6月3日(金)。S A 120板列周辺平面図実測。S G 116検出、東西セクション再線引き。S M60祭祀遺構平面図実測。調査区域内外の環境整備を行ない調査を終了する。器材撤収。

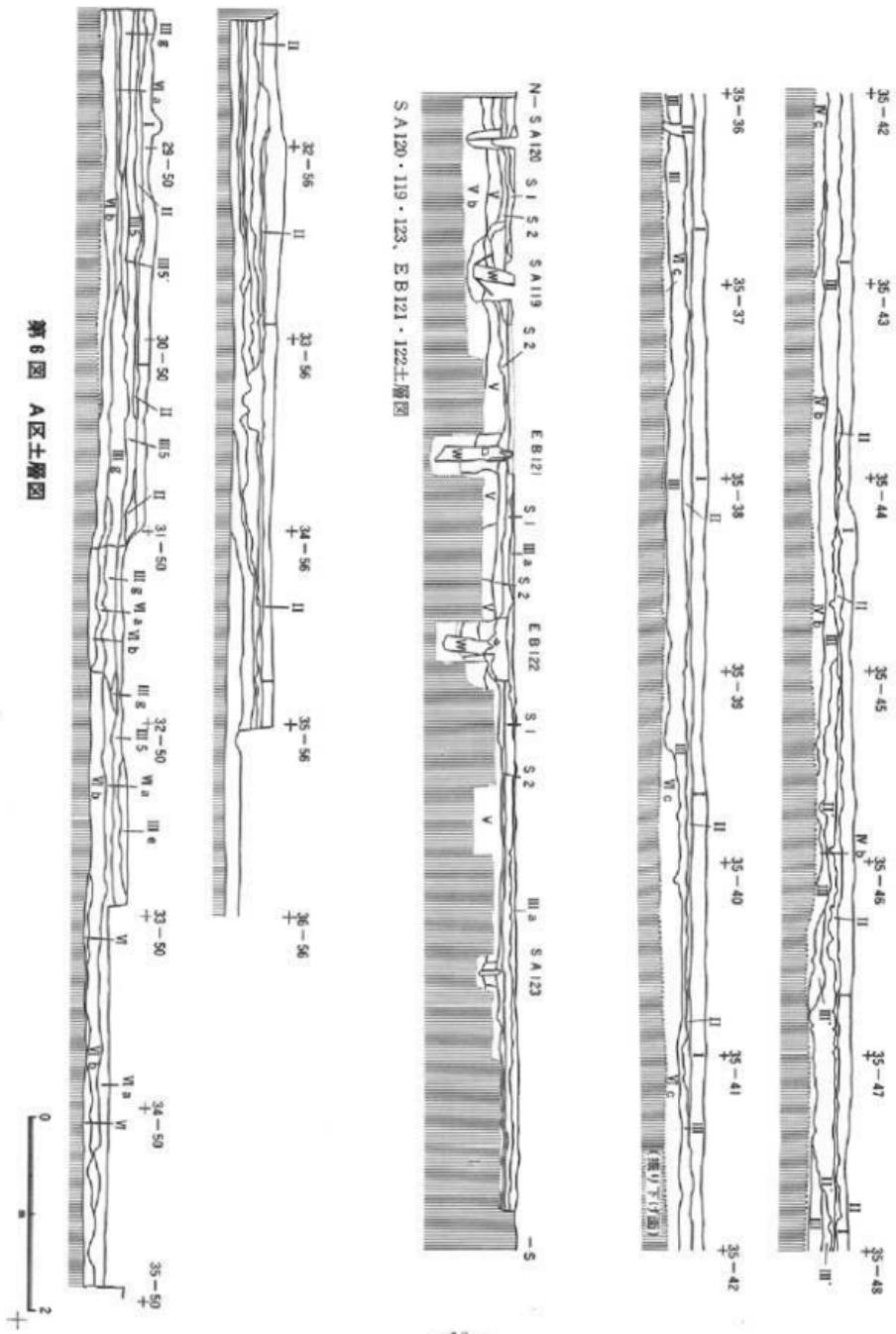


第4圖 A區平面圖



第五圖 A區35~50G土層斷面圖





III 2次調査結果

1. 調査概要

今次調査で検出された遺構には、掘立柱建物跡5棟、柱列6条、板列2条、土壙5基、溝状遺構10、旧河川2、落ち込み遺構、整地跡、祭祀遺構などがある。

遺構の群集度から観るに、A・B区とC区の二つに分ける事ができる。A・B区には、掘立柱建物跡、柱列、板列、土壙、溝状遺構、旧河川、落ち込み遺構、整地跡、祭祀遺構があり、遺構の重複関係から5時期ほどにまとめられる。遺構はもっと東側へ広がっている様相を呈しているが、東側が道路のため拡張することが出来なかつたが、1次調査の南区との関連性が伺がわれる。A・B区と南区の遺構が一つの集落としてのまとまりがあつたのではないかと考えられる。

C区では、掘立柱建物跡が1棟の他に土壙、溝状遺構が観られる。精査区の南半は軟弱な地質で遺構の検出は無かった。C区も東側への遺構の広がりがうかがわれ、1次調査の北区との関連性がうかがえる。

このように1次調査の精査区と、2次調査の精査区の両者を観た場合、遺構の存する東西の位置関係において、集落としての関連性が考えられる。

2. 層序(第5・6図)

本調査地区A区での層序は基本的には6層に分かれ、さらにこれを細分することができた。当初III a層上面で各種遺構を検出していたが、SG61土層観察用トレンチ及びA区東西土層観察用トレンチの下層V層より須恵器が出土し、III a層より古い文化層の存在が知られた。なお、1次調査の中央区と南区でもIII層より古い文化層としてIV層が確認されていた。

I層 暗褐色微砂質土。耕作土である。

II層 暗灰褐色粘質土。水田の基盤土でしまっている。I・II層で約25cmの厚さである。

III a層 黄褐色細砂質土。上面検出遺構の生活面と考えられる。無遺物層である。

III b層 明褐色粗砂質土。炭化粒子を微量含む。以下III g層までSM60周辺で観察される。

III c層 實褐色粗砂。10cmほどの厚さを持ちA区西辺で観られる。東側へはのびてない。

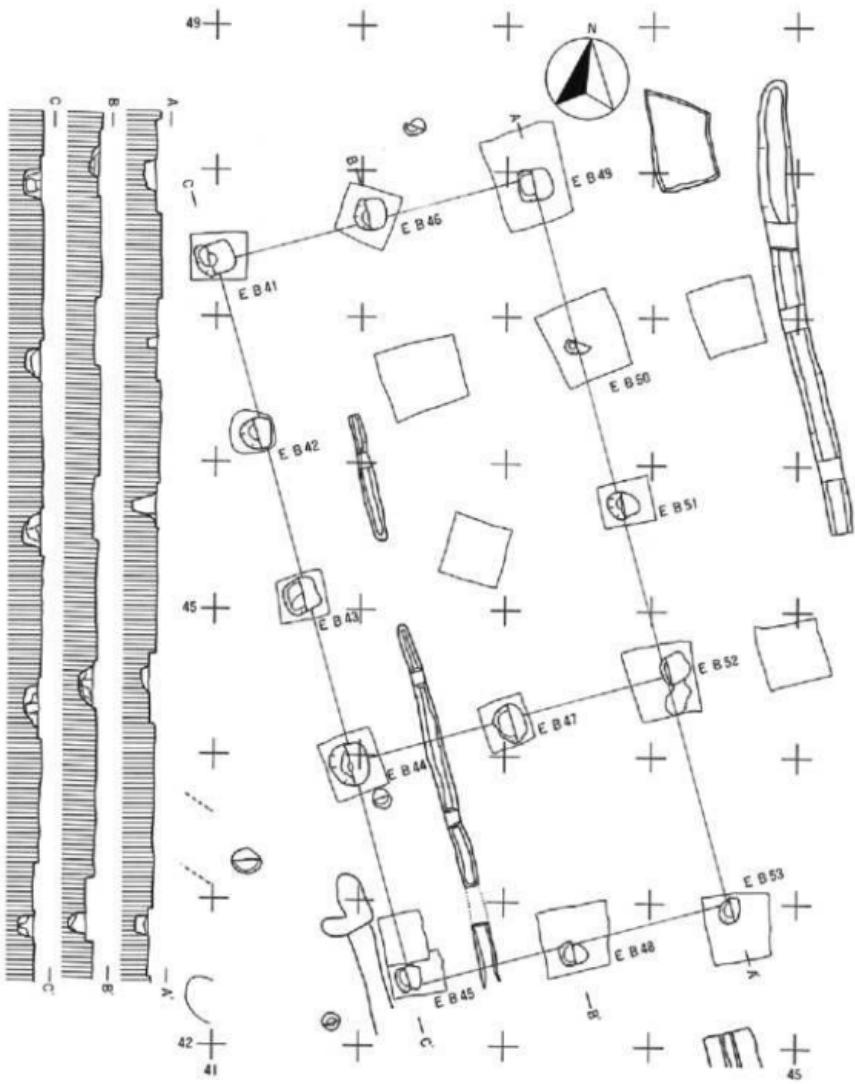
III d層 暗茶褐色有機物層。厚さ2cmと薄く、部分的にしか観られない。

III e層 灰褐色砂層。厚さ4cmで全域に堆積している。

III f層 明褐色粗砂質土。炭化粒子を微量含む。

III g層 灰褐色砂層。所により黄褐色砂や明褐色粗砂を含む。

IV a層 暗黄褐色砂層。厚さ15cmでわりと平坦な堆積状況である。



第7図 SB 40建物跡



- IV b 層 濁灰褐色粗砂。厚さ25cmほどで東西に広範囲に堆積している。
- IV c 層 暗青灰色砂。グライ化されて炭化粒子を霜降り状に含む。遺物が少量出土した。
- V a 層 灰黒色粘質土。炭化粒子を含む。遺物を多く含む下層の文化層。
- V b 層 暗黄褐色粘質土。厚さ20cmほどで、炭化粒子と遺物を少量含む。
- VI 層 暗青灰色粘質土。グライ化されており無遺物層である。

3. A区検出遺構

(1) SB70建物跡

北東隅III a 層上面で検出された、東西2間、南北1間の掘立柱建物跡である。北側と東側が未掘のため全体の規模は不明である。検出区域内での柱間寸法は、東西が西から2.1m +2.3mとなり、南北が2.6mを測る。南北柱列の方向は、N-21°20'-Eを測る。柱の掘り方は梢円形で長径18~26cmを測り、深さは各柱穴とも10cmほどである。

西辺柱列がSG61溝状遺構を掘り込んでおり、これよりも新しい時期の所産である。

(2) SA66柱列

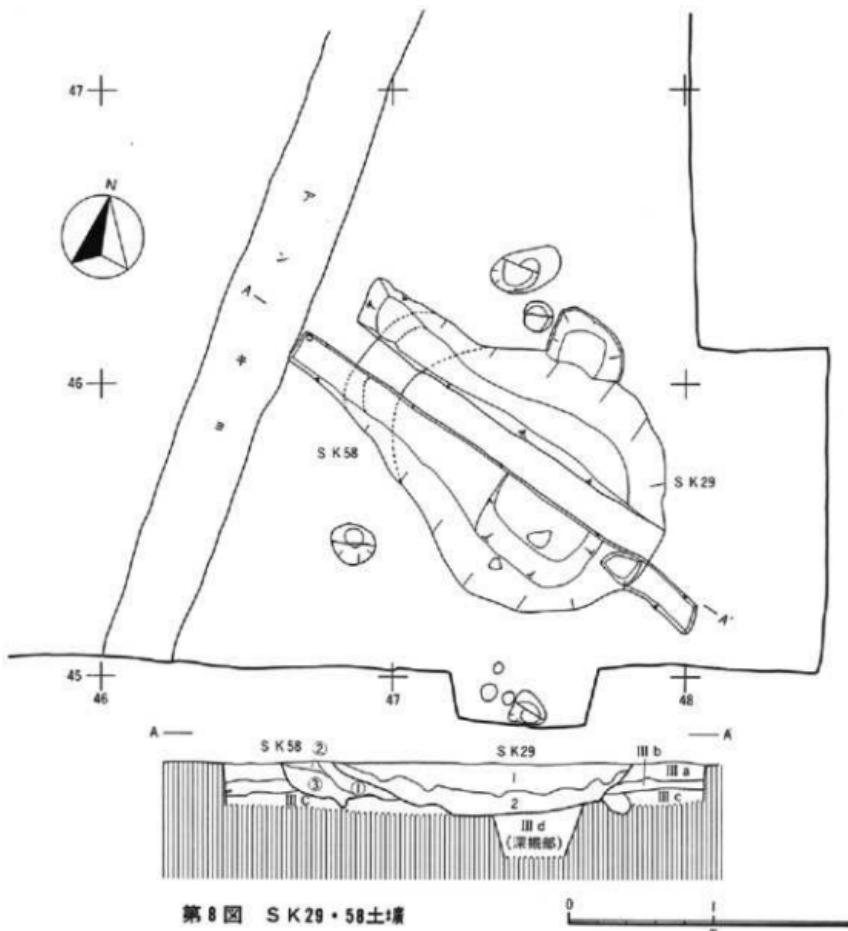
北東隅III a 層上面で検出された、東西に並ぶ三本の柱列である。東側は未掘のため不明である。検出区域内での柱間寸法は、西から2.7m +2.2mを測る。東西方向はN-70°-Wを測る。柱は残在しておらず、掘り方は不整の円形を呈し径8~26cmを測り、深さは8~26cmある。以下に記すSA80柱列とは平行関係にある。

(3) SA80柱列

北東隅III a 層上面で検出された東西に並ぶ柱列である。柱根の残在は無い。二本ずつの柱が対をなすように狭い間隔で配置されている。東側は未掘のためどの程度延びているか不明である。柱間寸法は西から、0.5m +1.65m +0.55m +1.6m +0.95m +1.2m = 6.45mを測る。柱列方向は、N-74°-WでSA80柱列と並列しており、1.4~1.6mの間隔を持っている。柱の掘り方は20~30cmの不整梢円形を呈し、深さは11~22cmある。柱痕は10~20cmの梢円形を呈している。

(4) SA129柱列

北東隅SG61上面で検出された南北方向の三本柱列である。SG61を掘り込んでおり、これよりも新しい時期の所産である。柱間寸法は北から3.5m +3.5m = 7mを測る。柱列方向は、N-26°30'-Eで、SA66・SA80柱列と直交するように遺存している。柱の掘り方は12~30cmの梢円形を呈し、深さは4~8cmで上面がかなり削られてしまった様である。柱痕は10cmの円形を呈している。



第8図 SK28・58土壤

(5) SB2建物跡

北辺中央Ⅲa層上面・SG61上面で検出された桁行3間梁行1間の三方に縁東風の柱が伴なう掘立柱建物跡である。南東辺の柱がSG61を掘り込んでおり、これよりも新しい時期の所産である。桁行方行は西へ傾むいておりN-57°-Wを測る。身舎桁行長は南面が北から $1.8m + 2.05m + 1.75m + 0.9m = 6.5m$ 、北面が $1.85m + 2.3m + 1.45m + 0.65m = 6.25m$ を測り南面と北面で若干の差がある。梁行は東面が3m、北面が3.1mを測る。縁東は南面で0.9m、北面で0.65m、西面で0.65m身舎より離れている。又梁行南面に0.9m離れて柱が二本あり、本建物跡に関連するものと考えられる。柱の掘り方は15~45cmの円・稍円形を呈している。身舎中央部が広く両辺が若干小さく造られている変った構築の建物である。

(6) S B 110建物跡

北方西辺III a層上面で検出された桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。桁行方向は東へN-28°30'-E傾むき、隣接するS B 2建物跡棟方向に直交する形で遺存している。S B 2との間にはS A111柱列が本建物跡の北東面を囲むようにして存る。桁行長は東面で北東から $1.95m + 2.2m + 1.4m = 5.55m$ 、梁行長は北面で西から $1.4m + 2.1m = 3.5m$ を測る。

(7) S A 111柱列

S B 110に付属すると考えられる柱列で、北東面を鉤形に囲っており、90cmの間隔で存る。北面の柱間寸法は西から $1.1m + 1.6m + 2.2m = 4.9m$ 、東面は2.7mを測る。

(8) S B 40建物跡(第7図)

南辺中央III a層上面・S G116上面で検出された桁行4間、梁行2間の掘立柱建物跡である。柱穴周辺部のみを10cm程掘り下げている。北西辺の柱がS G61を掘り込んでおり、これより新しい時期の所産である。桁行方向は西へN-24°-W傾むき、S D 27・28溝状遺構がこれと重複・並行している。桁行長は東側柱列EB 49~53間で $2.3m + 2.3m + 2.3m + 3.3m = 10.2m$ 、梁行長は北側柱列EB 41~49間で $2.3m + 2.3m = 4.6m$ を測る。身舎中央を約10cmほど掘り下げたが柱跡の遺存は無かった。桁行最南端の1間は3.3mと他より1m長く、増築の可能性がある。柱の掘り方は30~60cmの隅丸方形又は梢円形を呈している。掘り込みの深さは10~30cmを測る。EB 41・44で径30cm程の柱根が確認されている。

(9) S A 86柱列

南東辺で検出されたS B 40東脇にある4本の柱列である。柱列方向はN-16°-Wである。柱間寸法は北から $2.6m + 2.8m + 3.2m = 8.6m$ を測る。柱の掘り方は径50cm程の隅丸方形で規模が大きい所から建物跡を想定して関連柱穴を探査したが検出されなかった。

(10) S K29・58土壙(第8図)

東辺隅で検出され、土層観察の結果二つの土壙が重複している事が判明した。SK58堆積後にSK29がこれを掘り込んでおり、SK29が新しい時期の所産である。土層観察の際に少々深掘りを行なった所、III d層中より土器・木製品など下層の文化層の遺物が出土した。

SK29は $1.6m \times 2m$ の梢円形を呈しており深さは34cmで底は平坦である。埋積土は2層に分れる自然堆積である。1層は黒色の有機物層で、2層は灰褐色粘質土である。

SK58の規模はSK29に掘り込まれているため不明であるが残存幅は1mほどある。

(11) S X39落ち込み

東辺中央で検出されたもので精査区の関係で東側は未掘である。埋積土は3層に分かれ、自然堆積層で、深さは25~30cmを測り底は平坦である。少量の土器、木片が出土している。中央を近代の所産である暗渠によって掘り込まれている。

(12) SG61・116溝状遺構

精査区中央を南北に平行して貫ぬく溝で、SB2・70・40建物跡、SX26整地層などと重複している。SG61とSG116の間隔は7~8mある。流水方向は真北から東へ20°ほど傾むいている。SG61は面整理当初より検出されたが、SG116は調査終了際の降雨後に検出する事が出来た。

SG61は幅2~3.5m、深さ50cmである。埋積土はレンズ状の自然堆積で上層は砂質、下層はグライ化の進んだ粘質土である。下層で土器が出土している。

SG116は幅約3m程で、深さは90cmまで確認できた。埋積土はSG61と同じ自然堆積状況を示している。

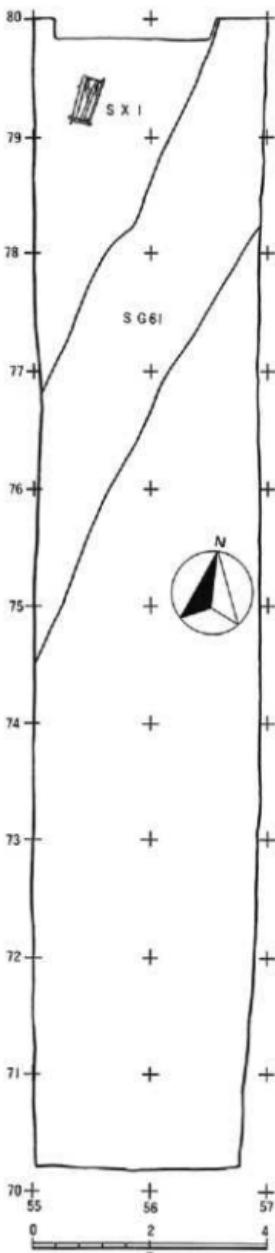
SG61とSG116の新旧関係は未詳であるが、同時に併存したものとした場合、両溝に狭まれた部分は道路と考えられないだろうか。

(13) SX26整地層

精査区中央で検出され、当初土壤と考えて掘り下げたが、上面でおさえた範囲より広がり、土層観察の結果整地跡であることが判明した。降雨後の滲透状況及びA区東西セクションから観るにSB40建物北半までの範囲が整地跡と推察される。整地層の上にはIII b・c層が部分的に堆積している。整地層は約50cmほどあり8層に分けられた。上層は薄く硬くしまっており炭化粒子、遺物を包含している。下層は軟弱化しており遺物を少量含んでいる。

(14) SA120・123板列・SA119柱列群

北東辺で検出された板列群である。柱穴掘り下げ過程で明らかになったものでIIIa層下に整地層1・2層がある。SA120・123・EB121は整地層下に存る。SA120は検出長7.4m、方位はN-70°30'Wである。幅20cm深さ36cmに布掘りし中間に板材を横一列に隙



第9図 B区平面図

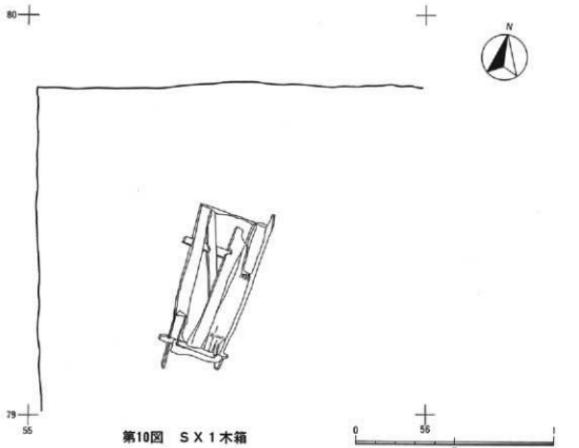
無く埋め込んでいる。西端とこれより東へ4.5m離れて縦に幅10~16cmの板が削り込まれている。S A123は検出長9m、方位はS A120と同じくN=70°30'~Wである。幅26cm深さ20cmに右掘りしS A120同様板材を横一列に埋め込んでいる。縦板は幅14~20cmで西端と東へ2.4mの所にある。S A119は4本あり西から3m+1m+1.4m=5.4mである。西から2本目の板は幅14cm厚さ4cm長さ44cmあり、底面にU字状に折られた板が施設されている。全体の遺構構造は未詳であるが、E B121・122柱跡の存在から建物跡に隣接する遺構群と考えられる。

4. B区検出遺構（第9・10図）

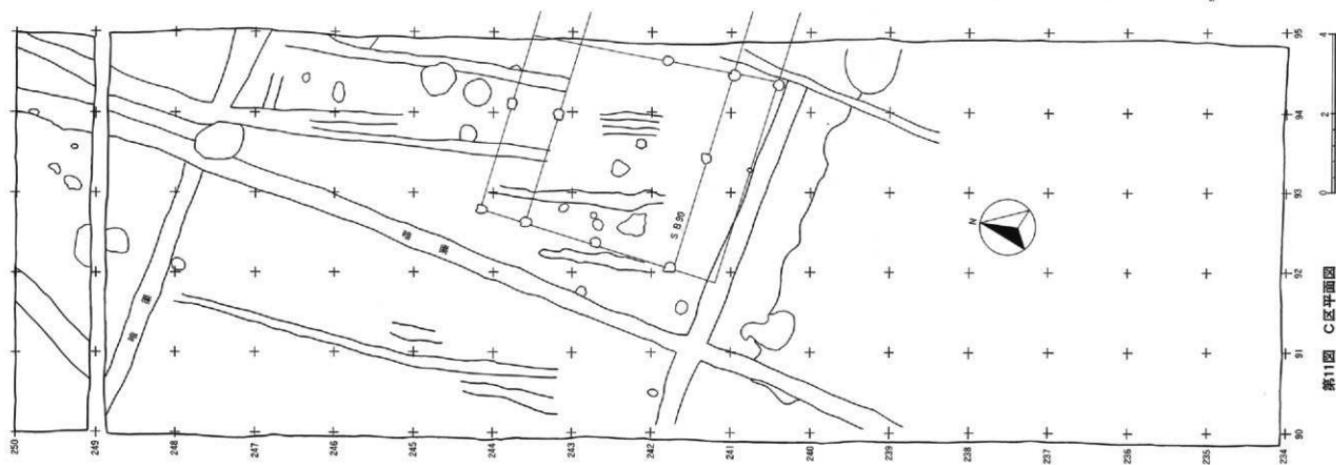
A区より続くS G61とS X 1木箱がある。S X 1は内々で幅30cm長さ70cmで、両端に横板が入り、底に二本の横木が組み込まれている。

5. C区検出遺構（第11図）

S B90孤立建物跡があり、東側は未詳である。桁2間(2.7m+2.2.2m=4.9m)、梁行2間(1.8m+1.8m=3.6m)の純柱で南北に1.2m離れて各2本の柱が立る。扇の可能性がある。



第10図 S X 1木箱



第11図 C区平面図

6. 出土遺物（第12図～第20図、表1～表4、図版21～27）

2次調査で出土した土器は、整理箱にして約25箱分である。このほかにSM60祭祀遺構の遺物や鍬・柱根などの木製品、土鍤や紡錘車などの土製品、砾石などの石製品も出土している。本節では遺構内出土の土器およびA区包含層出土の遺物を中心に記述し、SM60祭祀遺物については後節で詳述する。

A区では掘立柱建物跡4棟と掘立柱列5列、板列3列、C区では掘立柱建物跡1棟が検出されている。このうちA区北西隅III層上面にあたるSB2建物跡とSA111柱列の柱穴からは、遺物が微量出土している。赤焼土器環（第12図2）・同窯・同塙（同図3）、須恵器窯（同図1）などの器種がある。細片が多いがへら切りの須恵器環（第17図68）などもあり、10世紀代頃の時期が推定される。SB100建物跡柱穴からは遺物の出土がみられない。

A区南東隅整地層上面にあたるSB40建物跡とSA86柱列の柱穴からは、内面が黒色化処理されている土師器環（4）、須恵器壺（5）、赤焼土器環（7）・同窯（6）・同塙などが出土している。土師器環は低い台部が付くもので、このほかに高台の付く赤焼土器環も出土していることから、11世紀代の時期が推定される。C区のSB90建物跡の各柱穴からも遺物が微量出土している。すべて赤焼土器の細片で11世紀代の時期が推定される。

表一 A区遺物観察表(1)

神号	遺物番号	器種	計測値(%)		色調	胎土	焼成	底部切削	調査方法・備考	出土地点・層位
			口径	底径						
第12回	1	須恵器 窯			灰 色	粗砂泥	良		外面削り、内面背面泥文	EB4 (SB2)
	2	赤焼土器 窯	(113)		明茶褐色	粗砂・小粒混	#	へら切		EB5 (SB2)
	3	赤焼土器 窯	(400)		褐 色	粗砂泥	#		内外面ハケ目	EB11 (SB2)
	4	土師器 内墨土器		(77)	明茶褐色	石英粗砂泥	#	不明	内面ミガキ、炭素吸着	EB45 (SB40)
	5	須恵器 壺	(110)		暗灰色	鐵色・石英砂混	#			EB55 (SA86)
	6	赤焼土器 壺			明褐色	石英砂混	#		外面ナデ	EB56 (SA86)
第13回	7	赤焼土器 窯	(124)		明茶褐色	石英砂混	#			EB57 (SA86)
	8	土師器 壺			褐 色	粗砂泥	#		外面削位のハケ目、内面背面のハケ目	SK29 F2
	9	赤焼土器 壺	(210)		褐 色	粗砂・小粒混	#			F2
	10	赤焼土器 壺	(99)		白灰色	石英砂・小粒混	#	圓余	外面丸付壺	F1
	11	赤焼土器 壺	(388)		褐 色	鐵砂泥	#		外面丸付壺	F2
	12	須恵器 窯	(96)		暗灰色	小粒・粗砂混	#			SK58 F1
第14回	13	赤焼土器 壺	(130)		深褐色	粗砂泥	#		断面に2次焼成	
	14	須恵器 壺			暗灰色	小粒・粗砂混	#		外面削り	SD27
	15	赤焼土器 壺			赤褐色	粗砂泥	#		外面削り、内面アラブ	SD27
	16	土師器 壺	94		黒 色	鐵砂泥	#		内面ミガキ、炭素吸着	
	17	壺			暗灰色	鐵砂泥	#	へら切		
	18	須恵器 壺	(143) (158)		西岐原色 外面茶褐色	鐵砂泥	#			
第15回	19	高台付壺	56		明灰色	鐵砂泥	#		底部見込に灰カブリ	
	20	赤焼土器 窯	(120)	(42)	赤褐色	粗砂泥	#	圓余		
	21	木製品 加工木	長160 幅73 厚8	外径328	曲物底板か					SX39 F1

表一2 A区遺物観察表(2)

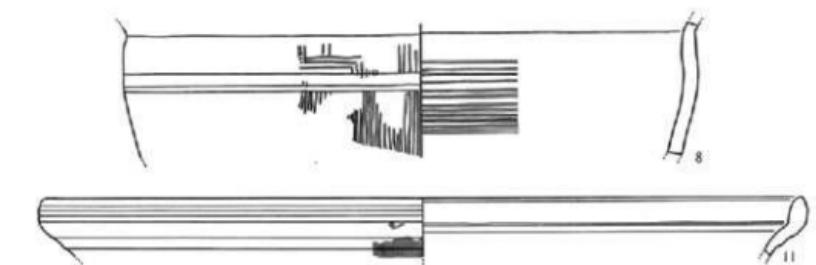
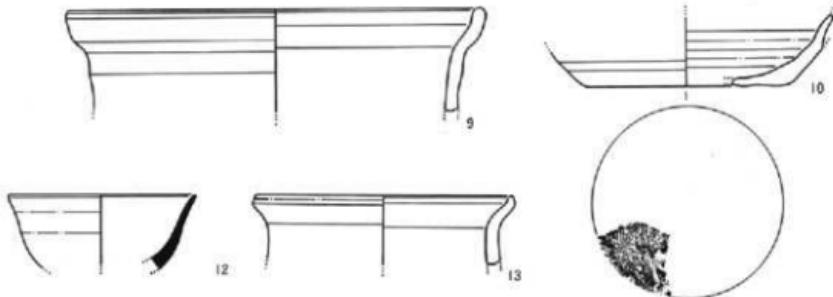
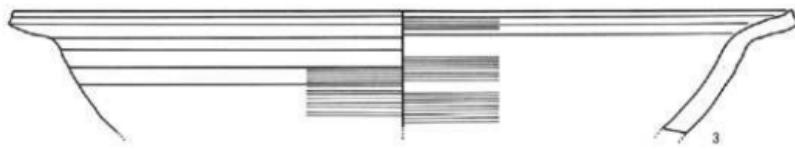
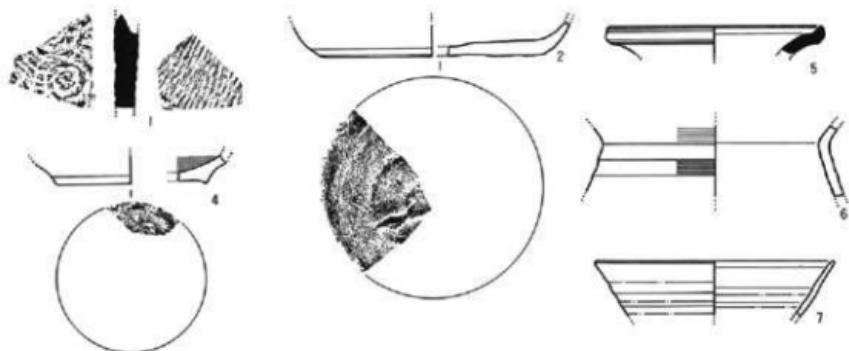
辨別 遺物 番号	器 種	分類	計測値(%)		色調	胎 土	幾成	底 部 切 離	調整技法・備考	出土地点・層位
			口径	底径						
第 14	土師器	高台付环	I B 2	68	灰褐色	粗砂混	良	因系	外面ミガを無し、内部板巻	S X29下層 ■d
	須恵器	蓋	II A 2 b (245)	25	暗灰色	粗砂混	#	ヘラ切		■b
	赤燒土器	蓋	III D 1 d (245)		明褐色	石英粗砂混	#			■d
			III D 3		褐色	石英砂混	#		外面条縞状叩き・内面子痕	■b
	木製品	加工木	長17.3 中11.0 厚7 外径 125		曲物底板					■d
	土師器	蓋			褐色	粗砂混	良		内外面ハケ目	S C61 F
					灰褐色	粗砂混	#		外側面のハケ目・内面縦巻のハケ目	41-51 V
		蓋	II A 2 b (129)		暗灰色	石英粗砂混	#			S C61 F
	須恵器	环	II B 2 (9.6)		灰褐色	粗砂混	#	ヘラ切		41-51 V
		II B 3 a (128) (7.6)	38		灰褐色	粗砂混	#	#		S C61 F
第 15	高台付环	II B 4 a (70)			暗灰色	粗砂混	#	#		
	土師器	蓋	ID 1 (164)			粗砂混	#		内外面ハケ目	S X26 F
		ID 2 c (202)				粗砂・小礫混	#			F
		ID 2 b (256)			黄褐色	石英砂混	#		外側面カット目・内面ハケ目・内面縦巻	F
		ID 4 (74)			明灰色	粗砂・小礫混	#			F1
		ID 4 (78)			赤褐色	砂粒混	#			F3
					赤褐色	粗砂混	#			F
					灰褐色	粗砂混	#			F1
		蓋	II A 2 c (140)		暗灰色	粗砂混	#			F3
		II A 2 d (140)			暗灰色	石英粗砂混	#	ヘラ切		F3
第 16	須恵器	环	II A 1 b (53) 31		灰赤褐色	粗砂・小礫混	不良			F3
		II B 1 (80)			白灰褐色	粗砂混	良	ヘラ切		F
		II B 3 a (136) (94) 33.5			灰褐色	粗砂混	#	#		F2
		(9.6)			赤褐色	粗砂混	#	#		F2
		II B 3 b (130.5) 79 35			灰褐色	粗砂混	#	#		F2
					(76)	暗灰色	粗砂混	#	底部ヘラ焼き「X」	F3
					72	暗灰色	粗砂混	#		F2.3
		II B 4 b (12.8) (73) 39			灰褐色	鐵鑄・粗砂混	#	#		F1
		II B 4 b (134) 80 45.5			暗灰色	粗砂・小礫混	#	#		F
		II B 4 b (88)			灰褐色	粗砂混	#	不明		F2
第 17	高台付环	II B 4 b (134) 88 34			暗灰色	石英砂混	#	ヘラ切		F3
	須恵器	蓋	III C		灰褐色	粗砂混	#		外面条縞状叩き・内面青漆波文	F2
		III D 1 a (117)			赤褐色	粗砂混	#			F3
		III D 1 b (174)			赤褐色	多量粗砂混	#			F3
		III D 1 b (164)			赤褐色	石英砂混	#			F2
		III D 1 b (157)			褐色	粗砂混	#		内面ハケ目	F
		III D 1 c (168)			褐色	粗砂・小礫混	#		外側ハケ目	F
		III D 1 c (134)			赤褐色	粗砂混	#		内面ハケ目	F3
		III D 2 a (51)			赤褐色	粗砂混	#	ヘラ切		F
		III D 2 b (82)			赤褐色	石英砂混	#	因系	内外面ハケ目	F
第 18	須 恵 器	III D 2 c			赤褐色	石英砂混	#			F2.3
	蓋	III F 1 a	(158)	明褐色	石英砂混	#				F

表一 3 A区遺物觀察表(3)

探査 番号	遺物 番号	器 種	分 類	計 測 値 (%)		色 調	胎 土	被 成	底 部 切 離	調 整 技 法・備 考	出土地點・層位	
				口径	底径							
第 16 回	64	瓶	III F 1 b	(158)		明 棕 色	石英 砂 泥	良			S X25 F 1	
	65		III E 1	(390)		赤 褐 色	石英 砂 泥	#		内外面埋付着	F 1.3	
第 17 回	66	土 鍋 器	II D 3	(200)		明 褐 色	石英 粗 砂 泥	#			50-52 V	
	67	須 志 器		(92)		赤 褐 色	石英 粗 砂 泥	不良	ヘラ削		45-58 W	
	68		II B 3 b	(150)	(10.4)	34	明灰褐色	鐵鑄・小鐵造	#		EB114(S A111)	
	69		II B 4 a	(102)	(6.8)	38-39	明 灰 色	粗 砂 泥	良	#	48-50 W	
	70	高台付环	II B 4 c	(124)	(6.4)	40	暗 灰 色	鐵鑄・小鐵造	#	#	内侧面埋付着	
	71		II B 4 d	(163)	(12.4)	39	石英 粗 砂 泥	#	#	底部ヘラ削	50-59 V	
	72		II C 1	10.5		暗 灰 色	石英 粗 砂 泥	#	#		50-58 W	
	73	土 鍋 器	II B 1	(132)		黑 鐵 青		#		内外面ガラス・黒鐵青着・外面部剥離	38-56 V	
	74		II D 2 a	(178)		赤 褐 色	粗 砂 泥	#			33-57 V	
	75					暗 褐 色	粗 砂 泥	#			37-56 V	
第 18 回	76	須 志 器	II A 1 a	(182)		4.1	暗 灰 色	粗 砂 泥	#	外面部自然剥離	37-54 V	
	77		II A 2 a	(148)		2.9	綠 灰 色	粗 砂 泥	#	外面部自然剥離		
	78	須 志 器	II B 3 b	(136)	(90)	33	白 灰 色	石英 粗 砂 泥	中強	ヘラ削	38-57 V	
	79			(8.8)		暗 灰 色	粗 砂 泥	良	#	底部漆付着	38-55 V	
	80		II B 3 b	(120)	(65)	3.3	灰 色	粗 砂 泥	#	#	38-57 V	
	81		II B 4 a	(10.5)	(6.7)	48	茶 褐 色	石英 粗 砂 泥	#	#	38-55 V	
	82		II B 4 a	(11.0)		47	黑 灰 色	鐵 青	#	#	内面部自然剥離	38-57 V
	83		II B 4 d	(152)	(12.4)	38	灰 色	鐵 青	#		外面部漆付着	37-55 V
	84		II B 4 c	136	76	45	暗 灰 色	粗 砂 泥	#	ヘラ削	35-52 V	
	85		II D 1 a	(217)		暗 灰 色	石英 粗 砂 泥	#		外面部ナス清し・内面部海波文	34-46 V	
第 19 回	86	須 志 器	II D 1 b			暗 灰 色	粗 砂 泥	#		外面部漆抜き・内面部海波文	38-56 V	
	87		II D 2 b	(574)		灰 色	粗 砂 泥	#			38-57 V	
	88		II D 2 a	472		灰 色	粗 砂 泥	#		内面部自然剥離	35-51 V	
	89	木 製 品		外径72 深23 内径8							37-55-57 V	
	90			長318 幅17 厚20		先端に金先が付く						

表一 4 C区遺物觀察表

探査 番号	遺物 番号	器 種	計 測 値 (%)		色 調	胎 土	被 成	底 部 切 離	調 整 技 法・備 考	出土地點・層位	
			口 径	底 径	器 高						
第 16 回	91	須 志 器	环		(6.2)	灰 色	鐵 青	苦	良	底部墨書	95-245 II
	92				(5.5)	灰 色	鐵 青	苦	#	底部墨書	94-242 II
	93		高台付环	(345)	67	3.9	灰 色	鐵 青	#	底部墨書	95-246 II
第 17 回	94	土 製 品	土 鍋 器	長 4.6 徑 1.9 口徑 6-5	灰 褐色	石英 粗 砂 泥	#				95-245 II
	95			長 3.3 徑 1.5 口徑 5-8	暗 褐 色	石英 粗 砂 泥	#				95-246 II
	96			長 4.2 徑 1.6 口徑 4.3	明 褐 色	石英 粗 砂 泥	#				95-243 II
	97				(5.5)	白 灰 色	鐵 青	苦	#	内面部灰化	TP 27 II



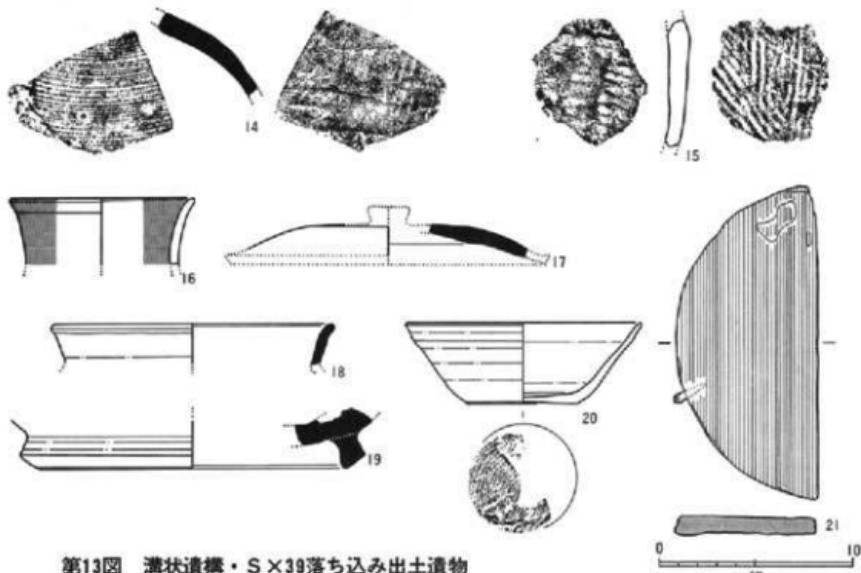
第12図 建物跡・土塁出土遺物

0 10 cm

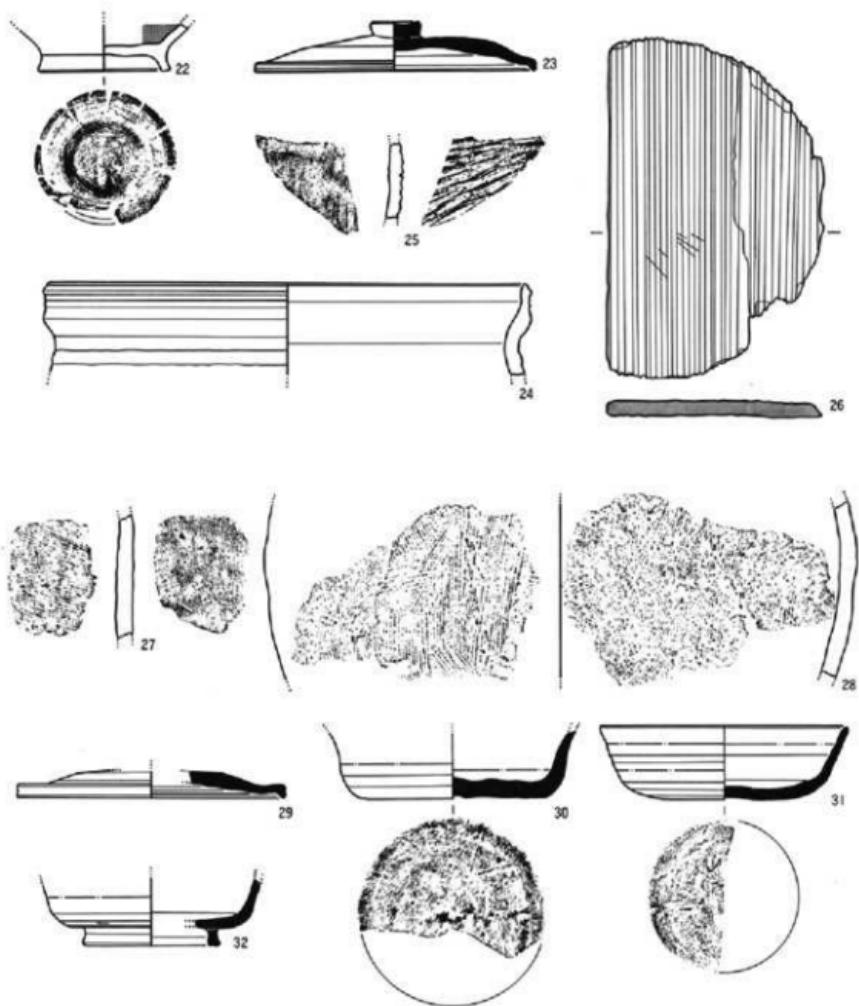
土壤は、A区南東隅Ⅲ層面からSK29土壤とSK58号土壤の2基検出されている。両土壤は重複しており、土層断面の観察からSK29土壤が新しい。SK29土壤の覆土1・2層からは、内面が黒色化処理されている土師器高台付环・同甕(第12図8)、須恵器环・赤焼土器甕(9・10)・同壠(11)などが出土している。またSK58土壤からは、須恵器环(12)、赤焼土器小形甕(13)・同長胴甕・同瓶などが出土している。さらに両土壤の下層Ⅲb・Ⅲd層からは、土師器高台付环(第14図22)、須恵器蓋(23)・同壺・赤焼土器环・同長胴甕(24・25)、曲物底板(26)などが出土している。時期としては、Ⅲb・Ⅲd層の土器が10世紀前葉、SK58土壤が10世紀後葉、SK29土壤が11世紀代頃に推定される。

溝状造構のうちSD27・28・38・76の各造構から遺物が少量ずつ出土している。いずれもSB40建物跡周辺のもので、器種としては須恵器壺(第13図14)、赤焼土器环・同甕(15)などがある。赤焼土器环には高台の付くものもあり、時期は11世紀代頃に推定される。またA区中央東端のSX39落ち込み造構からも遺物がやまとまって出土している。内外面が黒色化処理されている土師器壺(第13図16)、須恵器蓋(17)・同壺(18・19)、赤焼土器环(20)・同甕・曲物底板(21)などがあり、時期は11世紀代に推定される。

A区北東隅の造構のうちSB70建物跡とSA66・80・129柱列からは遺物が出ていない。



第13図 溝状造構・SX39落ち込み出土遺物

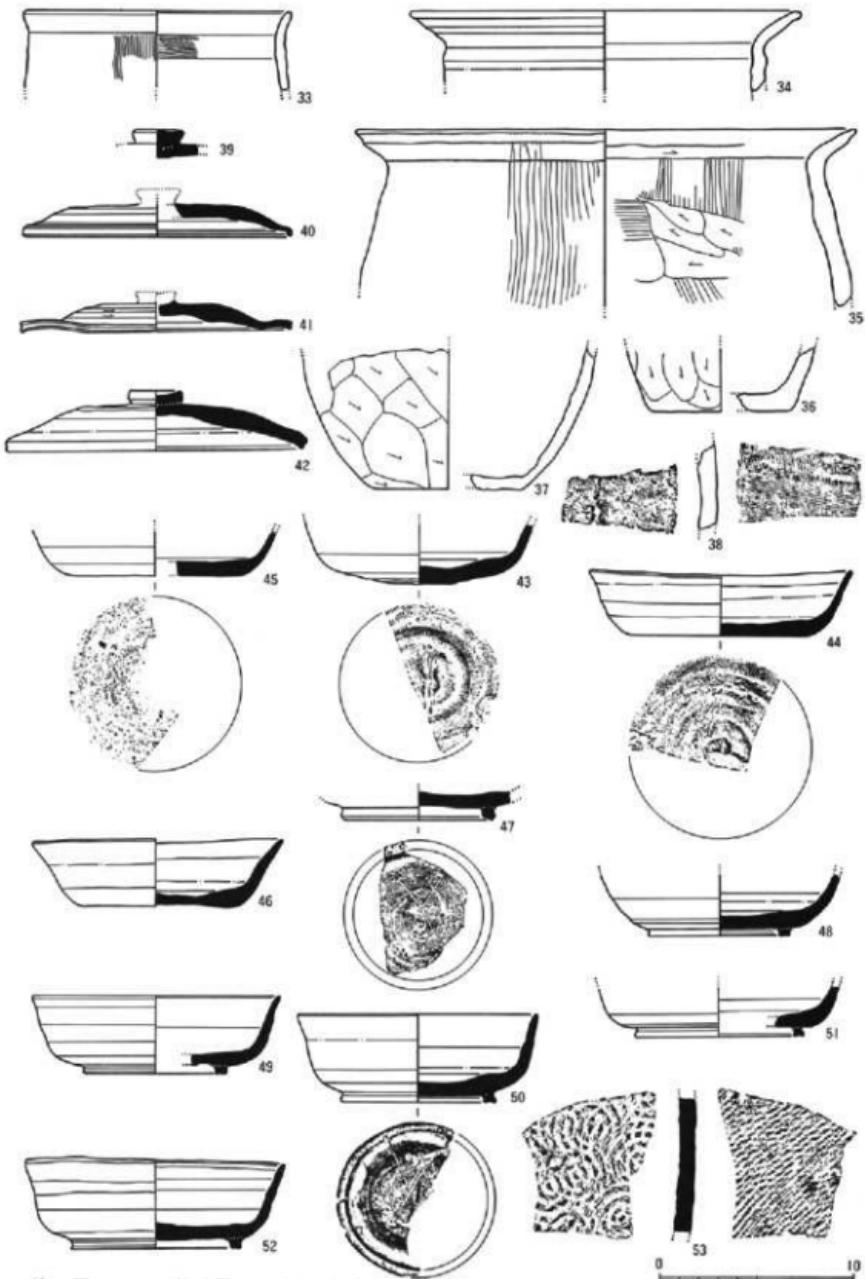


第14図 土壌・A区包含層出土遺物(1)

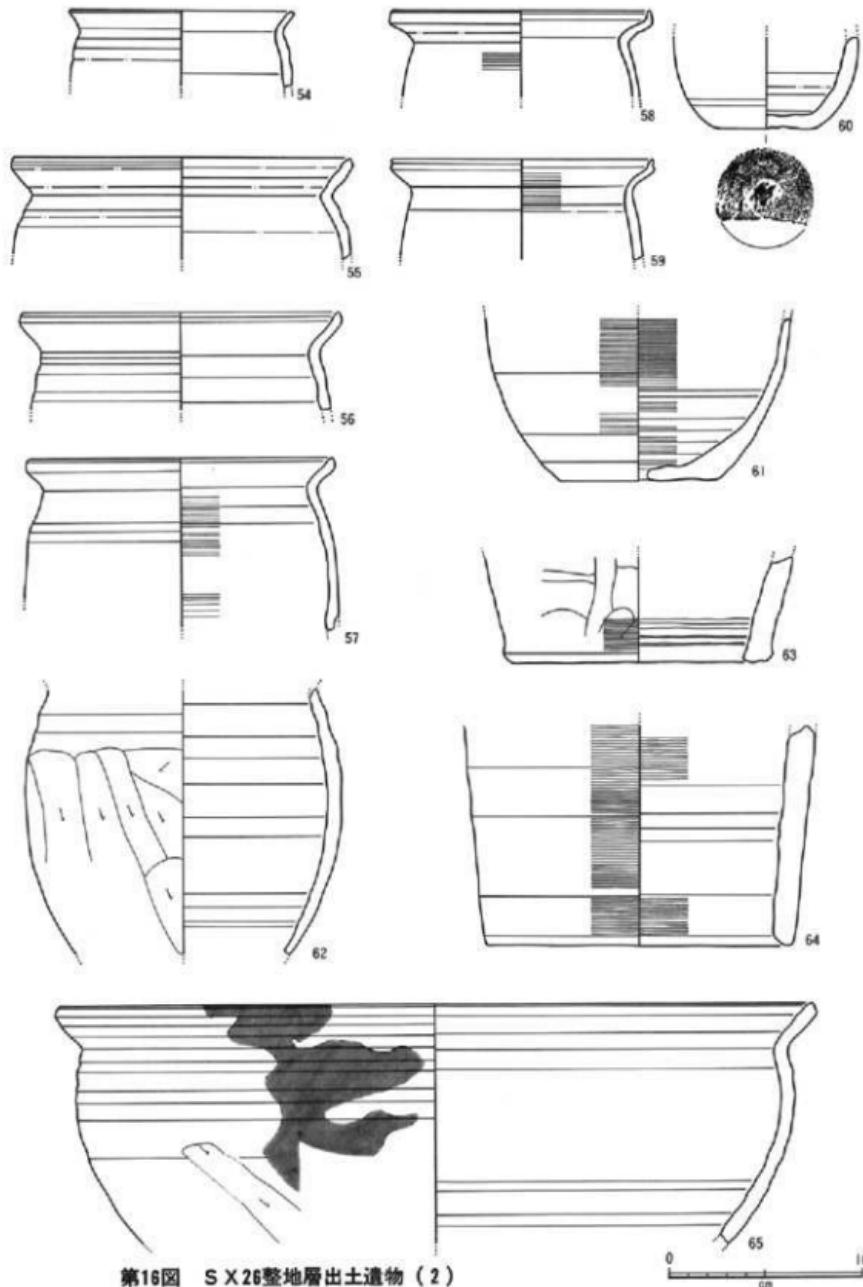
0 10
cm

表一五 A区包含層・整地層出土遺物分類

種別	基型	細分	形 異 の 特 徴		調 整 技 法		底部切 り離し	遺物番号
			口縁部～体部	底部	外 面	内 面		
I	B	1	体部丸味を持つ(内外唇若張着) (内面裏葉吸着)	丸底?	横旋のミガキ、削り	横旋、斜旋のミガキ	不明	73
		2		平底付 高台付			圓点	22
土	D	1	口縁部「く」字状にゆるく屈曲	不明	縦旋の無いハケ目	横旋の無いハケ目	不明	33
傳		a	口縁部「く」字状に屈曲	*	横旋のナデ	横旋の愛いハケ目	不明	26
器	2	b	口縁部「く」字状に張り出す	*	横旋のハケ目	横旋のハケ目、横位の削り	不明	35
	C	3	口縁部「く」字状に屈曲	*	横旋のナデ	横旋のハケ目、横位の削り	不明	34
		4	口唇部丸みのある後、口縁部「く」字状に屈曲	*	横旋のナデ	横旋と斜旋のハケ目	不明	66
			体部下半が開口	平 底	体部下半に削り	横旋のナデ	——	36・37
II	A	1	天井部丸味を持つ、宝珠形の抵が付く	——	ロクロナデ、沈線	ロクロナデ	ヘラ切	26
		b	天井部丸味を持つ	——	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	42
		a	天井部平坦、宝珠形抵の抵が付く	——	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	77
	B	2	天井部平坦、口唇部に山形の棱	——	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	23・29
		b	天井部平坦、口唇部に丸味のある後	——	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	40
		c	天井部平坦、口唇部山形の後	——	ロクロナデ、削り	ロクロナデ	ヘラ切	41
		d		——				
		1	丸底風	丸底風	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	43
		2	口縁部外反、体部から底部にかけ丸味を持つ	平 底	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	30
		a	開口角度11度、底部から底部にかけ丸味を持つ	*	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	31・44
		b	開口角度20度、底部から底部にかけ丸味を持つ	高台付	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	46・68・78・80
		a	開口角度10度、底部から底部にかけ丸味を持つ	*	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	32・69・53・82
		b	開口角度20度、底部から底部にかけ丸味を持つ	*	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	49・50・51・52
		c	開口角度17度、底部から底部にかけ丸味を持つ	*	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	70・84
		d	開口角度10度、底径が大きい	*	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切	71・83
	C壺	1	体部下半に丸味を有する	高台付 光 線	ロクロナデ	ロクロナデ	72	
	D	1	口唇部山形の後、葉筋が浅く開口	不 明	各種状タキテ→テテ清し	青海波文ア子瓶	不 明	85
		b	口縁部が深く外反、大型品	*	各種状タキテ	青海波文ア子瓶	不 明	86
		a	口縁部が深く開口、大型品	*	ロクロナデ・波状文	ロクロナデ	不 明	88
		b	口縁部が深く外反	*	ロクロナデ・波状文	ロクロナデ	不 明	87
III	D	a	口縁部「く」字状に屈曲	——			54	
赤		b	口唇部丸みのある後、口縁部「く」字状に屈曲	不 明	ロクロナデ		55・56・57	
燒		c	口唇部山形の後、口縁部「く」字状に屈曲	——			58・59	
土		d	口唇部山形の後、口縁部「く」字状に屈曲	——			24	
		1	体部に丸味を有する	平 底	不 明		ヘラ切	60
		2			ロクロナデ		圓点	61
		b			横位のヘラ削り		不 明	62
		c						
		3	不 明		各種状タキテ	アテ瓶	不 明	25
	E壺	1	口唇部山形の後、口縁部「く」字状に屈曲を有する部分		ロクロナデ、斜旋のヘラ削り		不 明	65
	F	a	体部下半が直線的に外側に開口		指輪押任直	横位のハケ目		63
		b			ロクロナデ	ロクロナデ		64



第15図 S X 26整地層出土遺物（1）



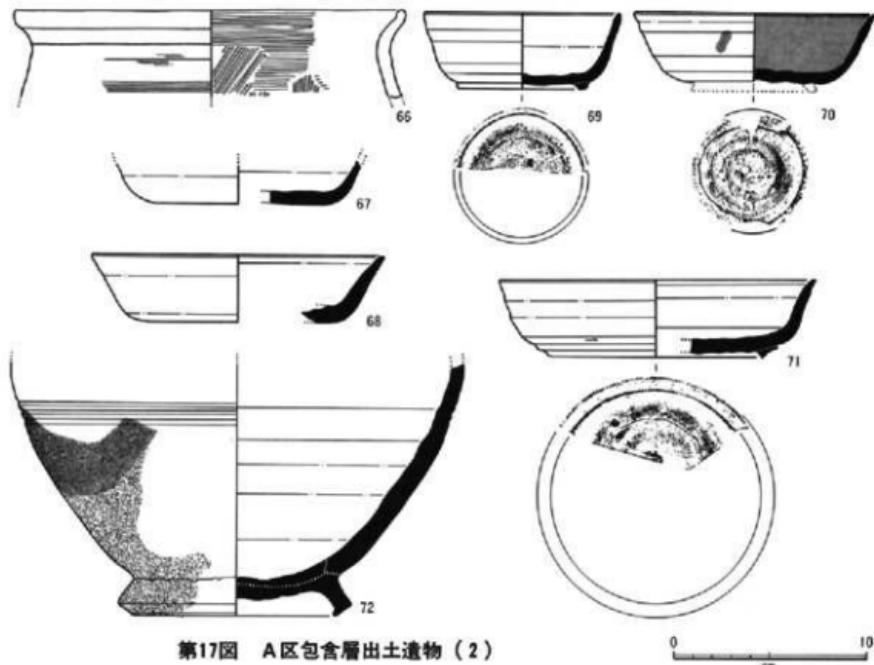
第16図 S X 26整地層出土遺物（2）

俵田遺跡の今回の調査で注目されるのは、Ⅲ層とした黄褐色砂層の遺構検出面のさらに下層から遺構や遺物が検出されたことである。これらは地点や層序からみてつぎの4つのブロックに大別される。なおこれらの土器については、表5に器種毎の分類基準を示した。

第一は、S B40建物跡北側の整地層で、とくにS X26とした落ち込み部に土器が集中して認められた（第15・16図）。器種には、土師器甕、須恵器蓋・同环・同高台付环・同甕、赤焼土器甕・同甌などがある。土師器甕はD1・D2類を主とし、D3類は認められない。須恵器蓋はA1b・A2c・A2d類があり、宝珠形の抓はみられない。須恵器环類はB1・B3a・B3b・B4b類があり、底部の切り離しはすべてヘラ切りによる。赤焼土器甕は各種あるが、D1d類だけは認められない。赤焼土器甕と塙は各種存在する。

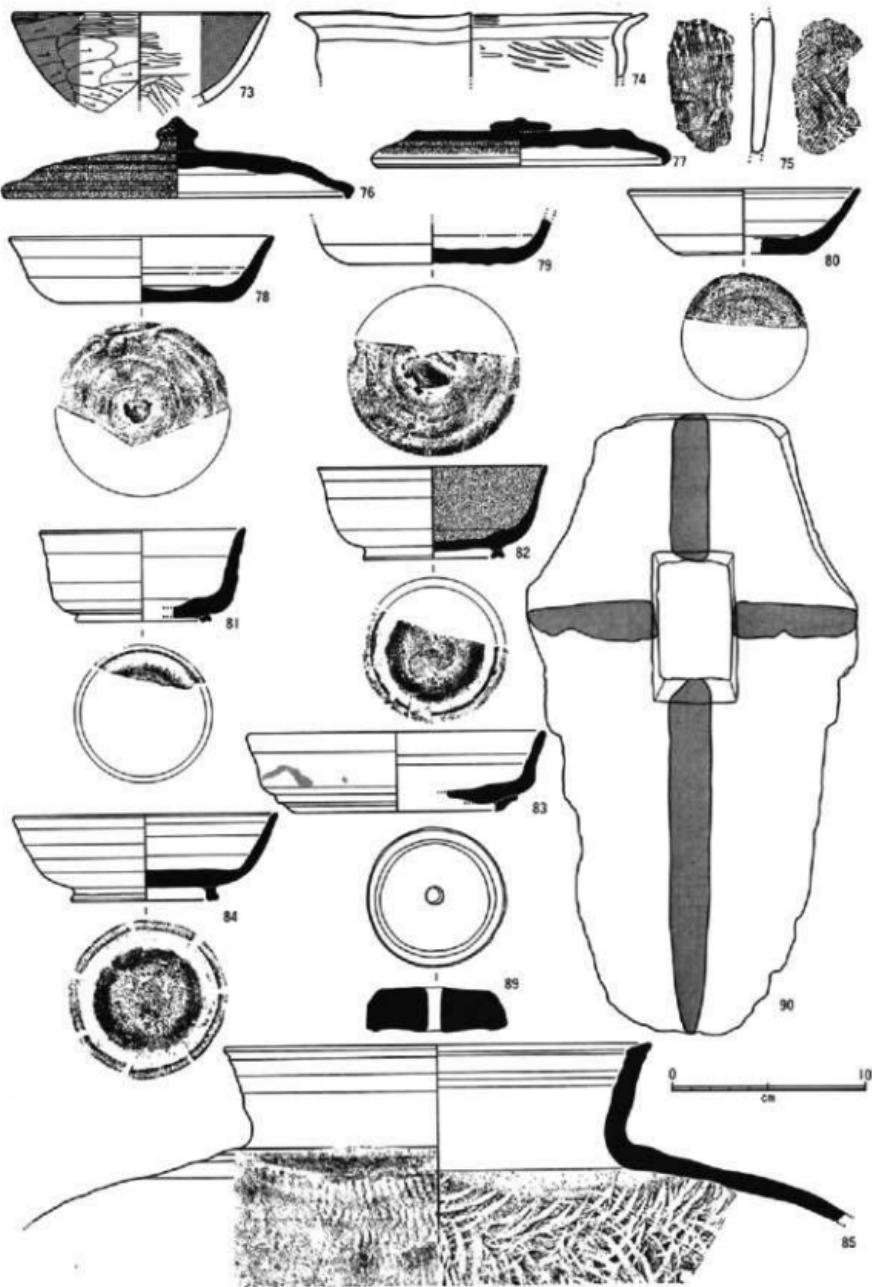
第二は、SG61河川跡の覆土および同掘り込み面のV層から出土した土器群である（第14図27～32）。覆土中からは須恵器のA2b・B3a・B4a類、V層からは須恵器B2類などが出土している。覆土中の土器群とV層の土器群の間には当然時期差が考えられる。

第三は、S A120柱列からS A123柱列にかけての整地層およびV層で出土した土器群で



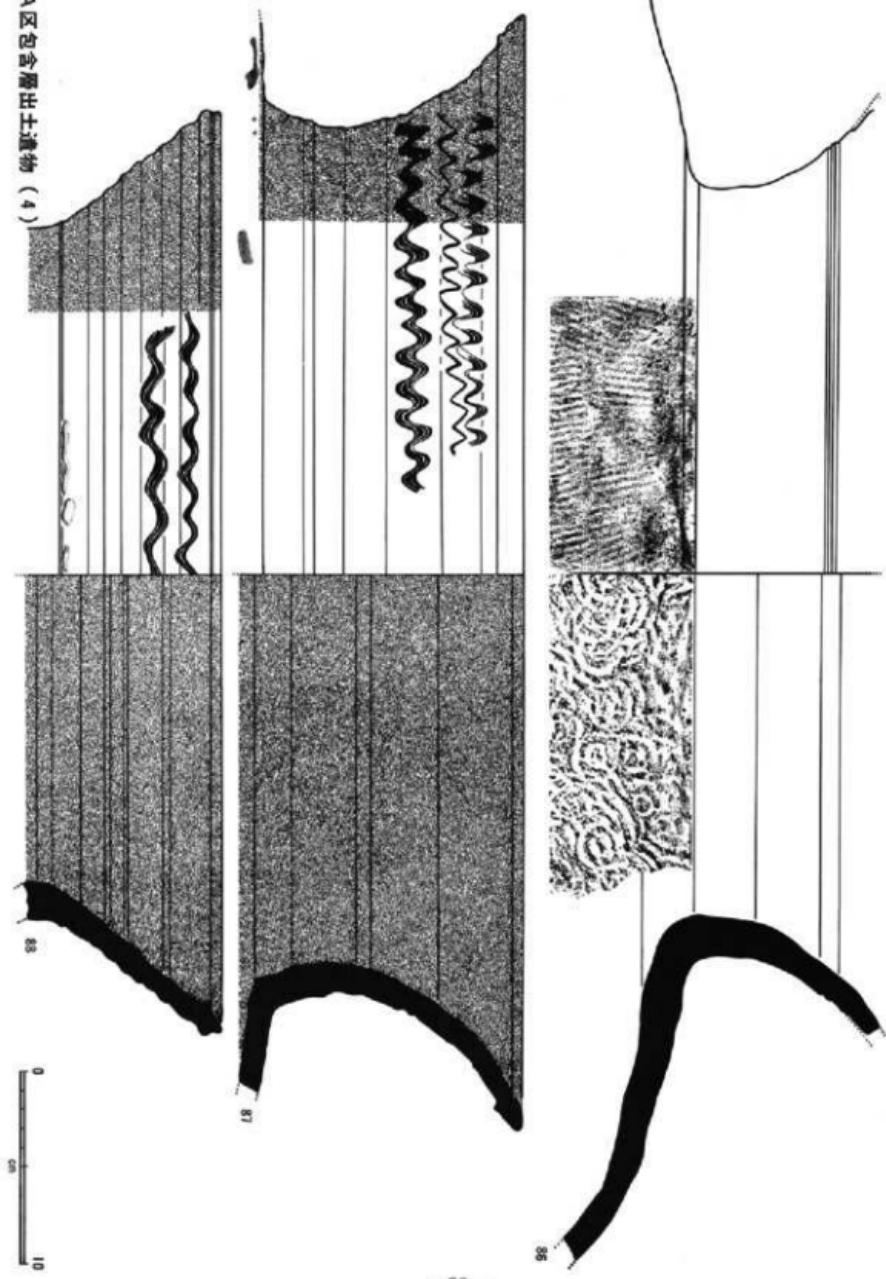
第17図 A区包含層出土遺物（2）





第18図 A区包含層出土遺物 (3)

第19図 A区包含層出土遺物(4)



ある。(第17図)。整地層からは須恵器B4a・B4b・C1類、V層からは土師器D3類、須恵器B4d類などが出土している。これも両土器群の間には時期差が考えられる。

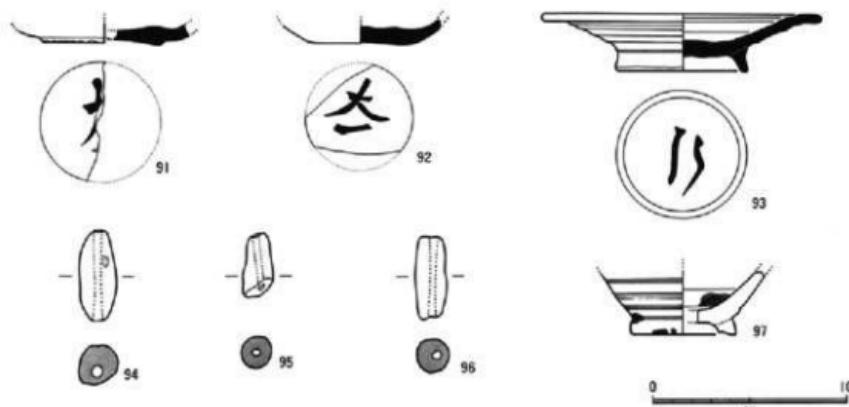
第四は、S M60祭祀遺構の下層(V層)から出土した土器群である(第18・19図)。本地区のV層からは土師器B1・D2a類、須恵器A1a・A2a・B3b・B4a・B4c・B4d・D1a・D1b・D2a・D2b類などが出土している。赤焼土器も甕の破片などが少量出土しているが、細片であるため図示できるものはない。

これらの土器群は、平底ないし高台の付くロクロ使用の黒色化処理された土師器坏が認められないことや、須恵器坏類の底部切り離しがすべてヘラ切りであることなどでは共通するものの、細部において幾つかの差異を有する。層位的な把握も考慮に入れながら、いま大きく三つのグループに分けてみる。

一つ目は、S X26とした整地層の土器群で、須恵器蓋に宝珠形の抓がみられること、須恵器坏類の開口角度がゆるやかであることなどに特徴がある。これと同じような土器群は^{註-14}遊佐町地正面遺跡S X11落ち込み遺構にみられ、私共が庄内地方の平安時代土器編年の第Ⅱ期としているものである。時期は9世紀後半頃が想定される。

二つ目は、S M60祭祀遺構下のV層から出土した土器群で、須恵器蓋が宝珠形の抓を有すること、須恵器坏類の体部が強く立ち上り底径の大きいものがあることなどに特徴がある。^{註-15}これに類似した土器群は酒田市上ノ田遺跡S D1大溝にみられるが、本土器群は全体としてさらに古い様相をもっており、8世紀末葉頃の時期が想定される。

三つ目は、S G61河跡の土器群で、時期は前二者の間、9世紀前半頃が想定される。



第20図 C区出土遺物

7. S M60祭祀遺構（第32図）

A区西辺中央北より、35~37~51~53グリッドで人面墨描土器、刀形・人形・馬形・斎串等の木製品がまとまって発見された。発見の契機は西辺X軸35ライン上に排水用の溝を掘っている際に36~52グリッド北西隅で赤焼土器甕(98)と細い板状木製品（後に斎串と判明）が出土した事に始まる。甕を中心に東側一帯を順次トレンチ状に畦を残しながら掘り下げていった。東側の遺物が出土する限界を見極めた段階で、未掘部分の西側を東西8m南北12mにわたって拡張した。その結果遺物が集中して出土したのはS G61西側36~52グリッドを中心とする東西5m南北5mほどの範囲であった。

祭祀遺物が出土した層位はIII a層下のIII b層（明褐色砂質土）で厚さ6~8cmの平坦な堆積状況を示している。S G61の氾濫源であるのか、III b~III g層はすべて砂又は砂を多く含む砂質土の堆積であり、西側に行くにつれて高くなっていく。

祭祀遺物は人面墨描土器(98)を中心としたまとまりと、S G61に平行するように散乱している須恵器甕(132)・小形の人形・馬形・斎串のまとまりと、大きく二つに分けられる。

人面墨描土器(98)は体部周間に4体の人物全体像と「礮鬼坐」の墨書がある。甕内には長さ49cmの斎串約30本と刀形(140)と人形の股部(149・150・151・152b・153・154・155・156)が入っていた。出土状況は「石鬼坐」の墨書文字が真下になり、口を西方に向けて潰れていた。

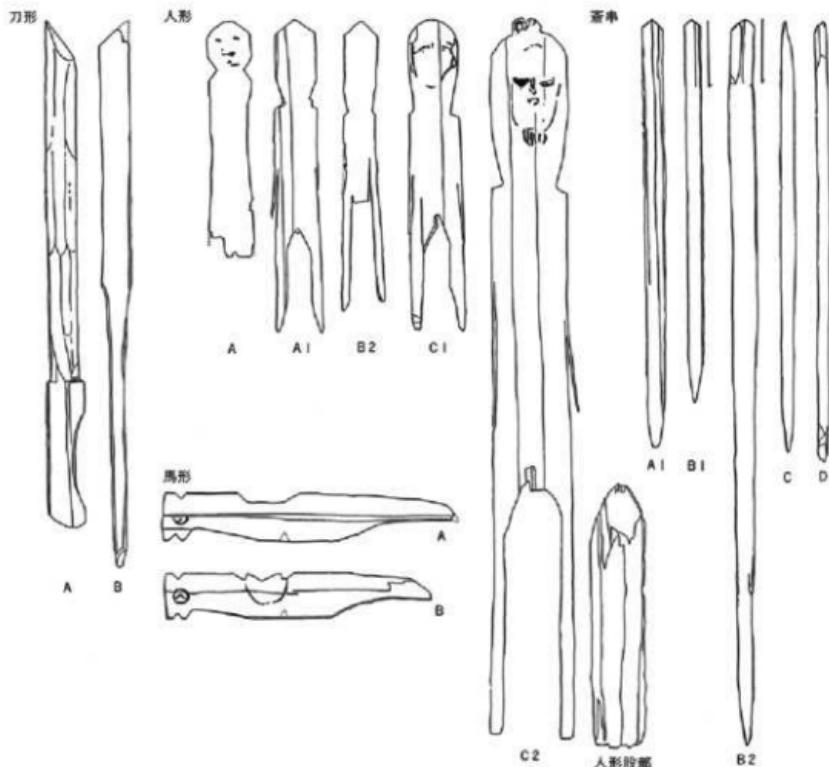
甕より南北に各々50cm離れた2箇所に刀形(140・141)がある。東へ40cm離れた南北線上に4点の人形(145・146・147・148)が頭部を西へ向けて重なっており、これより北へ90cm離れて人形が2点(144・152-a)頭部を西へ向けて重なって、又同様に南へ90cm離れて人形(142・143)がある。人形(152-a)は腐触が著しくその形態を実測図上に留めるに終った。中央にある4枚の人形の東側30cmに、対をなすように8本の斎串(183と189、185と196、184と188、186と190)がまとまってある。又4点の人形と刀形(141)の間に小形の人形が2点(157・158)ある。他に8本ほどの斎串が4点の人形の周囲に散乱してある。

人形、刀形、斎串は直接地面に差し立てられ、甕(98)は地面を少々掘り窪めて据えられていたと推察できる所から、これらは原位置を止めた姿で検出できたと考えられる。

馬形は腹部に三角状の切り込みがあり、ここに串状のものを挿入し地面に穴き立てたと
考えられる。^{註-17}馬形は地面と水平で浮いた状態にあった証で、その大部分が原位置を止めていないと思われる。10点出土しており、そのうち甕(98)の周囲に6点(164・165・166・167・168・170)ある。

須恵器甕(132)は人面墨描土器(98)より南東へ2.6m離れてあり、口を北へ向けて横転していた。底部片が南へ1m離れた地点に流されていた。甕内には人形(133)と斎串が9本入っていた。いずれも腐植が著しく原形を止めていなかった。甕の北東1mに斎串が5本(175・176・177・178・203)散乱しているが、これも区画するために立てられていたと考えられる。東側と南西60cmの所に人形(161・163)が横臥しており、又離れてある底部片周囲に馬形(169・172・173)が3点と斎串があり甕(132)とセットになるものではないだろうか。

人面墨描土器(98)の南側51—35・36グリッドに人形(159・160・162)、馬形(171)、斎串がまとまっている。人形(159・160)の二点とも南東に頭部を向けて平行に横臥している。



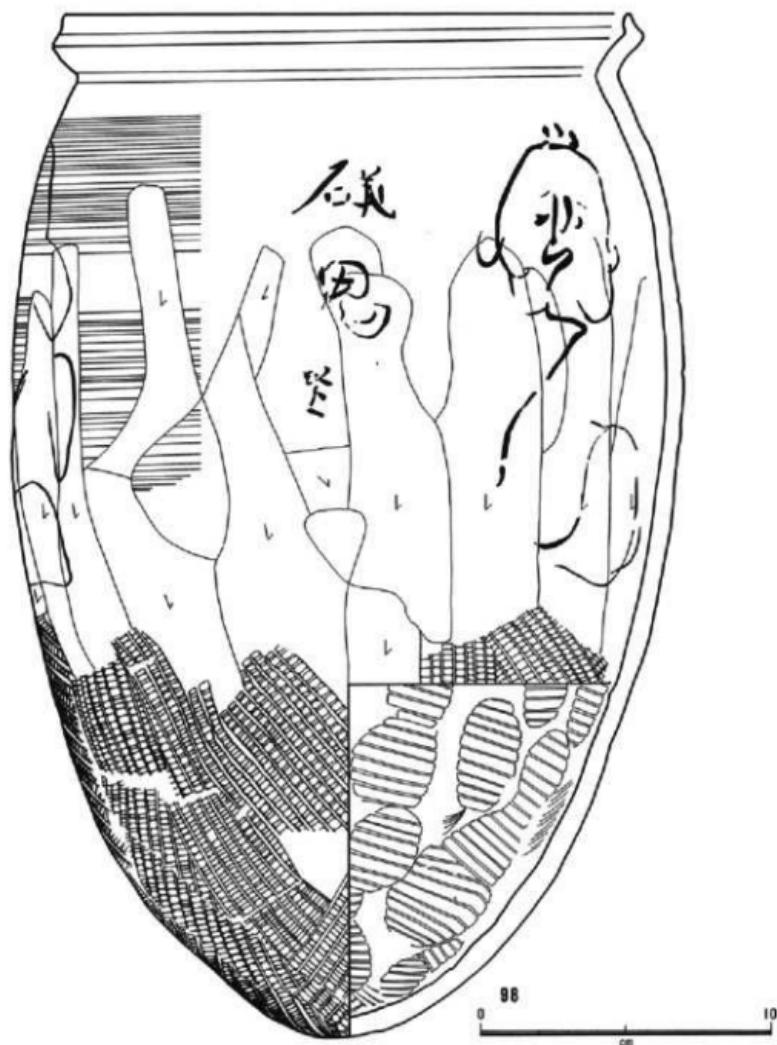
第21図 SM60木製祭祀遺物分類図

表一 6 S M60出土刀形・人形・馬形觀察表

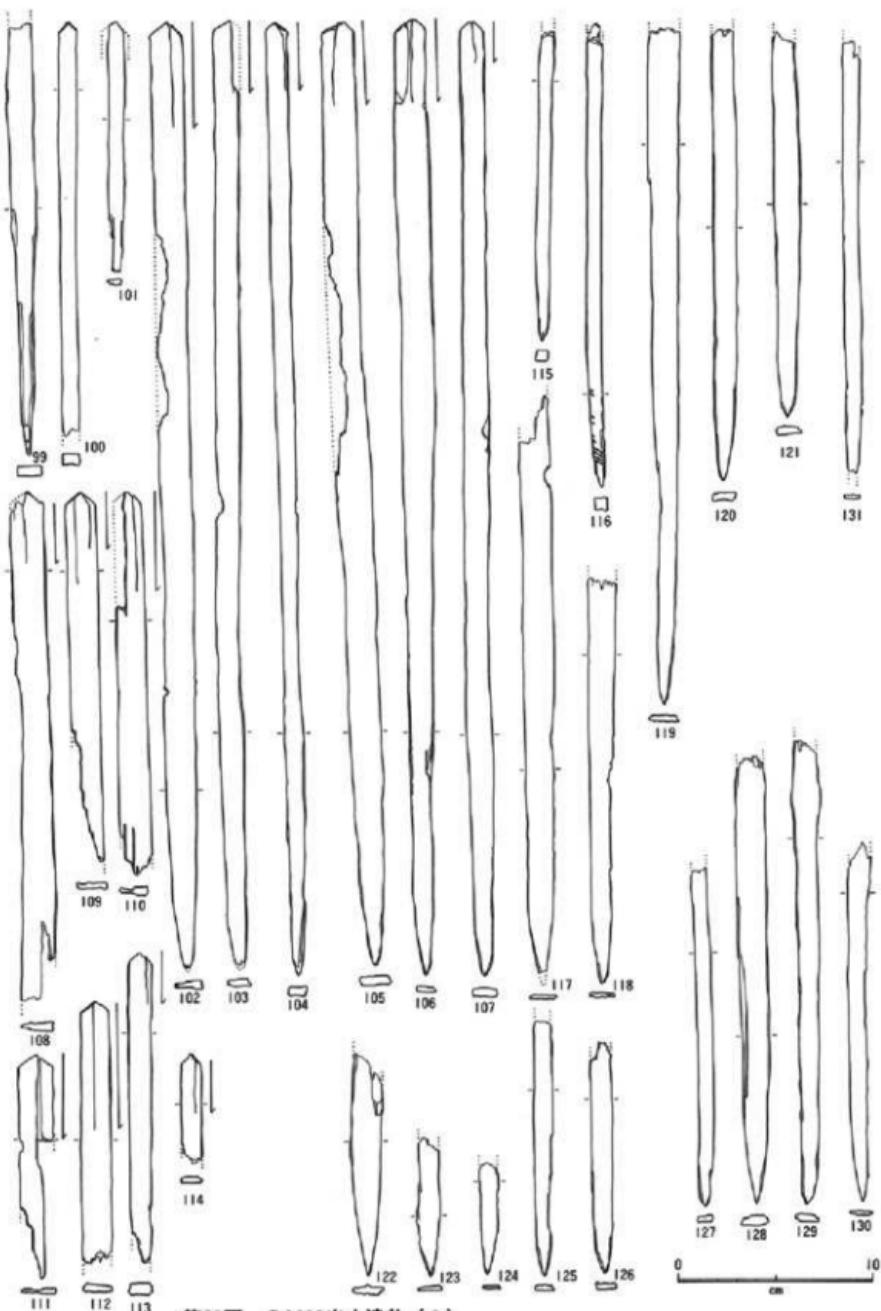
種別	遺物 番号	分類	計測値(%) (縦×横×厚)	被覆状況	形	其	前面形	基 書
第 140 刀 A 141 形 B	340×20×26×10 350×20×6	定 形 上 短 欠			把は茎面にくり込む。刀身は刃がつく。		板 状 無し 無し	
第 25 国 142 A 143 C2	430×48×6.5 <432>×53×7 <541>×54×7	下 半 欠 下 短 欠 下 半 欠			頭は倒卵形。頭に鰐有。肩・側面は施で削。		板 状 無し 無し	
					頭は倒卵形。頭に鰐有。肩・側面は施り目。手の切込み有り。頭は台形に切込み折る。			
					頭は倒卵形。頭に鰐有。肩・側面は施り目。手の切込み有り。頭は台形に切込み折る。			
第 26 国 145 形 146 147 形 148	583×46×8 500×53×6.5 486×53×9 504×54×6	完 形 完 形 完 形 完 形			頭は倒卵形。頭に鰐有。肩・側面は施り目。手の切込み有り。頭は台形に切込み折る。		板 状 無し 無し	
					頭は倒卵形。頭に鰐有。肩・側面は施り目。手の切込み有り。頭は台形に切込み折る。			
					頭は倒卵形。頭に鰐有。肩・側面は施り目。手の切込み有り。頭は台形に切込み折る。			
第 25 国 149 人 150 形 151 形 152 形	197×40×7 <188>×37×5 177×29×5 170×28×5.5	（人面 象頭 土器 頭内 密生 土）	下 短 欠 下 短 欠 下 短 欠 下 短 欠		（人形143の腹部切込み部分の残片） （人形143の腹部切込み部分の残片） （人形142の腹部切込み部分の残片） （人形152の腹部切込み部分の残片）		板 状 無し 無し 無し	
					（人形145の腹部切込み部分の残片） （人形146の腹部切込み部分の残片） （人形147の腹部切込み部分の残片） （人形148の腹部切込み部分の残片）			
					頭は倒卵形。肩・側面は施り目。頭部は台形に切込み、			
第 26 国 153 腹 154 部 155 部 156	149×25×3 170×41×5.5 179×37×6 176×27×5	上 短 欠 完 形 完 形 完 形			頸は六角形。肩・側面は施で削。		板 状 無し 無し 無し	
					頸は六角形。肩・側面は施で削。			
					頸は六角形。肩・側面は施で削。			
第 27 国 157 人 158 A 159 B1 160 B2 161 形 162 形 163 C1 164	219×33×3~4 <200>×27×2.5~4 <160>×29×5 215×29×5 198×21×5 <160>×37×5 211×38×5 <152>×22×3	C1 A B1 B2 C1	下 半 欠 下 半 欠 下 半 欠 下 半 欠 下 半 欠 下 半 欠 下 半 欠		頭は六角形。肩・側面は施で削。足は下端が三角形。頭部は台形に切込み折る。 頭は六角形。肩・側面は施で削。手に切込み有り。足は下端が三角形。頭部は台形に切込み折る。 頭は六角形。肩・側面は施で削。手に切込み有り。足は下端が三角形。頭部は台形に切込み折る。 頭は六角形。肩・側面は施り目。手に切込み有り。足は下端が三角形。頭部は六字に切込み。 頭は六角形。肩・側面は施り目。手に切込み有り。足は下端が三角形。頭部は六字に切込み。		板 状 無し 無し 無し 無し 無し 無し 無し	
					頭は六角形。肩・側面は施り目。手に切込み有り。足は下端が三角形。頭部は台形に切込み折る。			
					頭は六角形。肩・側面は施り目。手に切込み有り。足は下端が三角形。頭部は台形に切込み折る。			
第 28 国 165 馬 166 B 167 168	132×28×5.5 184×24×6 382×32×7 212×28×8.5	下 半 欠 完 形 完 形 完 形			頭部にたてがみ・口、背を切り欠き縫を作る。腹部に切込み有り。		板 状 無し 無し 無し	
					頭部にたてがみ・口、背を切り欠き縫を作る。腹部に切込み有り。			
					頭部にたてがみ・口、背を切り欠き縫を作る。腹部に切込み有り。			
第 29 国 169 170 B 171 形 172 B 173	216×25×9 <122>×24×4.5 260×33×7 269×35×5 190×36.5×5.5 <157>×28×5.5	?	上 下 遠		頭部陥没、破損著しい。		板 状 無し 無し 無し 無し	
					頭部にたてがみ・口、背を切り欠き縫を作る。腹に切込み有り。			
					頭部にたてがみ・口、背を切り欠き縫を作る。腹に切込み有り。			
第 30 国 174 箸 175 B1 176 串 177	153×16×3.5 <118>×8×4 <218>×15×5 <120>×17×2	下 短 欠 下 短 欠 下 短 欠 下 短 欠			上端が虫食状で切込み有り（切込み長66mm）		板 状 無し 無し 無し 無し	
					# # (# 47mm)			
					# # (# 59mm)			
第 31 国 178 大 179 刃 180 白	<50>×14×13 <220>×16~20×15	—	両 短 欠 両 短 欠		発火部は径が13mmで2個。棒状の断面形。		棒 状 —	
					発火部は径が12mmで1個。棒状の断面形。			

表一7 S M60出土斎串観察表

種別	遺物番号	分類	計測値(%) (幅×横×厚)	残存状況	形 状				備 考
					上端・切り込み	有・無、長さ(%)	下端	断面形	
鋸	174	A-1	600×9×3	完 形	圭頭状	無	側先状	板状	上端片側欠
	175		278×12×3	完 形	?	無	?	?	上端片側欠、下方側欠
	176		291×14×4.5	完 形	?	無	?	?	
	177		295×14×4	完 形	?	無	?	?	
	178		284×12×3.5	完 形	?	無	?	?	
	179		(142)×10×3	下半欠	?	無	—	?	
	180		(73)×10×5.5	下半欠	?	無	—	?	
	181		495×15×2.5	完 形	?	有 58	側先状	?	
	182		482×20×2.5	完 形	?	有 46	?	?	
	183		500×18×4	完 形	?	有 19	?	?	
鋸	184	A-2	496×15×5	完 形	?	有 32	?	?	
	185		500×20×5	完 形	?	有 53	?	?	
	186		504×15×5	完 形	?	有 51	?	?	
	187		(402)×15×2.5	下端欠	?	有 53	—	?	
	188		(445)×18×4	下端欠	?	有 59	—	?	
	189		508×8×6	完 形	?	有 47	側先状	角棒状	
	190		(482)×9×5	上端欠	—	有 22	?	角棒状	
	191		264×18×4.5	完 形	圭頭状	有 48	?	板状	
	192		260×11×3.5	完 形	?	有 45	?	?	
	193		(63)×10×3.5	下半欠	?	有 44	—	?	
鋸	194	A	(207)×14×3.5	上端欠	—	—	側先状	?	
	195		(248)×10×4	上端欠	—	—	?	?	
	196		(430)×10×5.5	上端欠	—	—	?	?	
	197		(53)×10×4.5	上半欠	—	—	?	?	
	198		(171)×5×5	上端欠	—	—	?	角棒状	
	199		(120)×7.5×5	上半欠	—	—	?	板状	
	200	B	(60)×3×8	上半欠	—	—	?	板状	
	201		303×7×6	完 形	?	無	?	角棒状	
	202		294×10×4	完 形	側先状	無	側先状	板状	
	203		294×(8-9)×(5-4.5)	完 形	?	無	?	?	
	204		300×8×5	完 形	?	無	?	?	
鋸	205	C	(170)×7×4	上端欠	—	—	?	?	
	206		(236)×7×8	上端欠	—	—	?	?	
	207		(302)×14×6	上端下端欠	—	—	—	?	
	208		(277)×13×4	上端下端欠	—	—	—	?	
	209		(244)×13×6	上端下端欠	—	—	—	?	
	210		(199)×12×3.5	上端下端欠	—	—	—	?	
	211		(197)×10×5	上端下端欠	—	—	—	?	
	212		(194)×16×3	上端下端欠	—	—	—	?	
	213		(208)×12×3	上端下端欠	—	—	—	?	
	214		(451)×13×3	上端下端欠	—	—	—	?	
鋸	215	D	(430)×11×6.5	上端下端欠	—	—	—	?	
	216		(393)×24×7	上端下端欠	—	—	—	?	



第22図 S M60出土遺物(1)
人面墨描土器



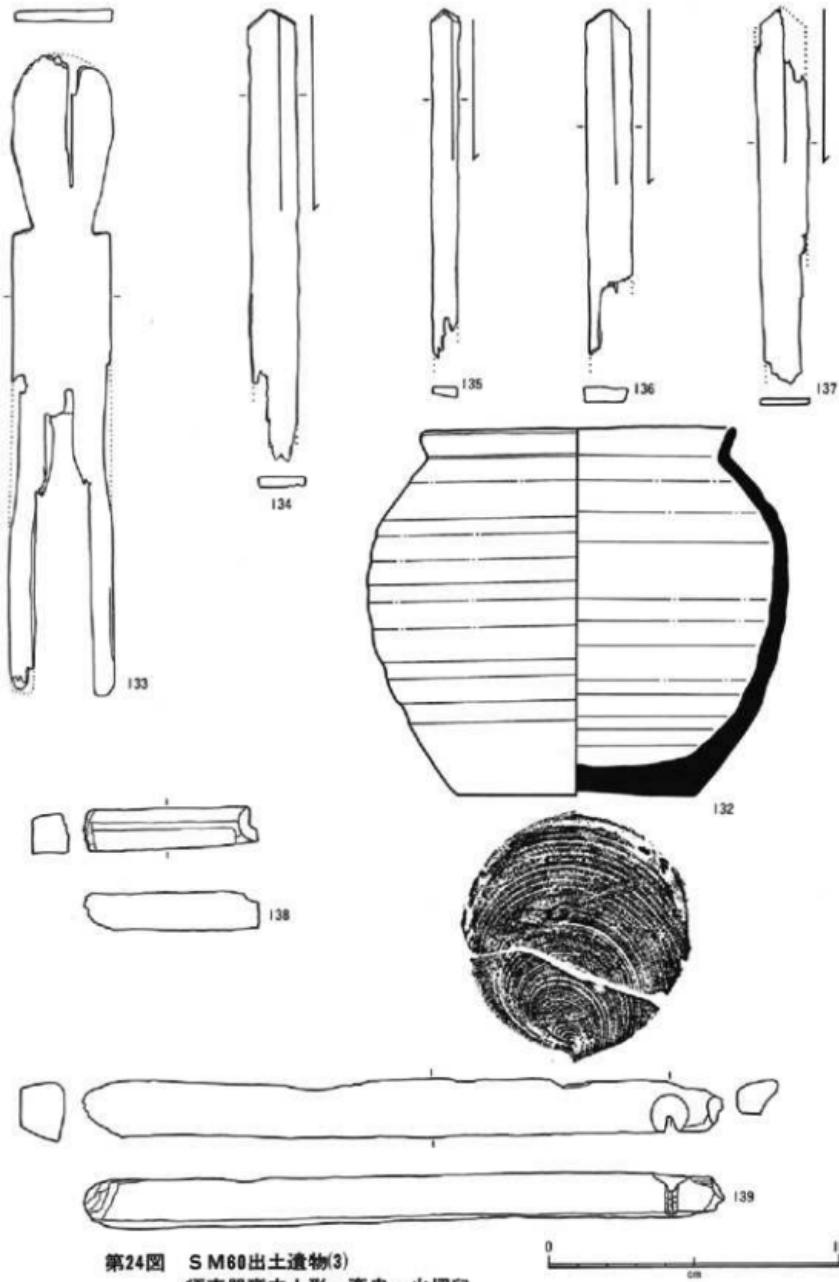
第23図 S M60出土遺物(2)
人面墨描土器(88)内出土素串

表一 8 人面墨描土器(98)内出土斎串・刀形観察表

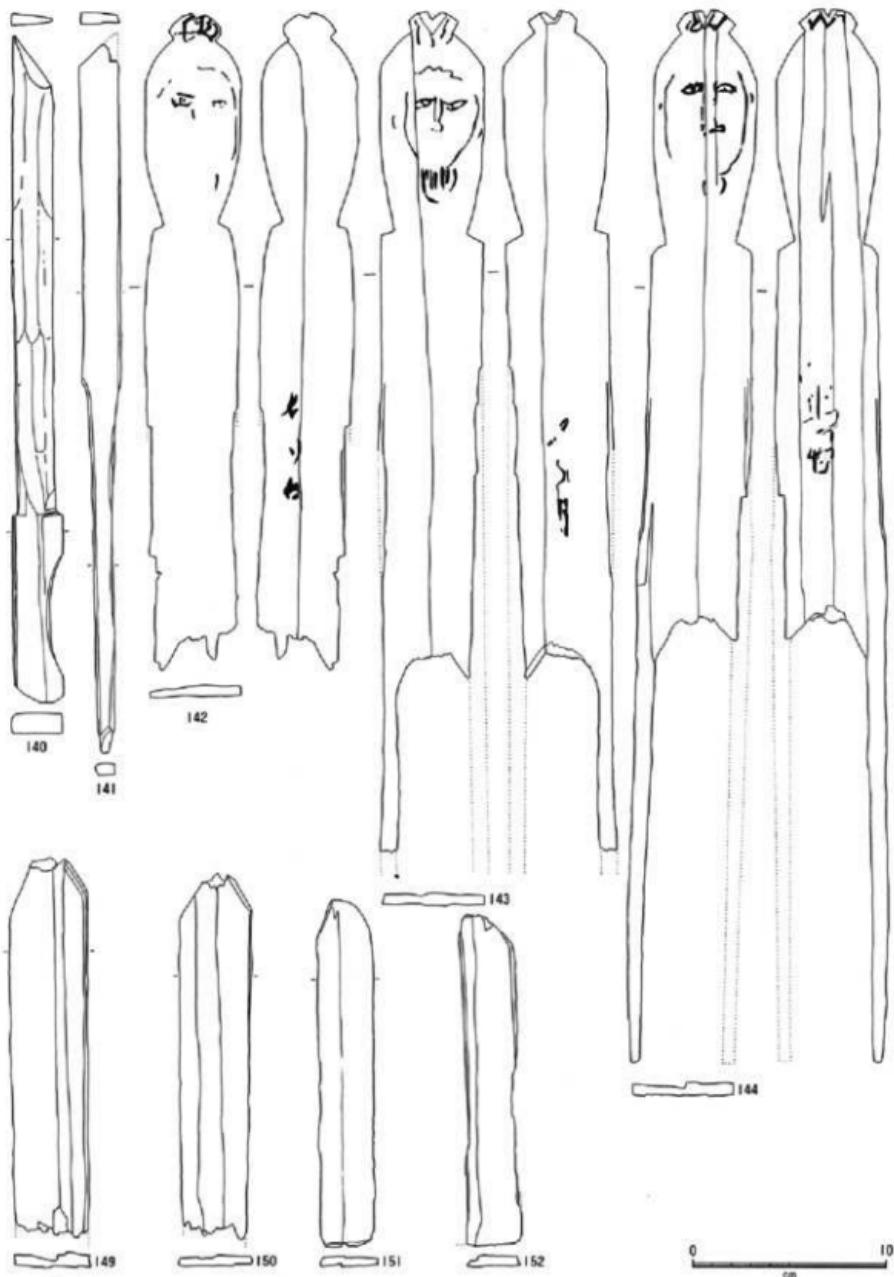
探査区	遺物番号	分類	計測値(%) (幅×奥×厚)	現存状況	形 状			備考
					上端欠	下端を鋸く削り込み先端を観する。	断面形	
	99	刀形	B (221)×13×5	上端欠			板状	
	100	A-1	G212)×9×6	下端欠	主頭状(切り込み無)	—	板状	
	101		G126)×7×3	下半欠	x	無	—	両側欠
	102		485×17×4	完形	x	有 54	斜先状	
	103		484×12×4	完形	x	有 33	x	上片側欠
	104		488×10×5	完形	x	有 32	x	
	105		483×18×4	完形	x	有 41	x	
	106		492×15×3	完形	x	有 42	x	
	107		489×12×5	完形	x	有 21	x	
	108		G260)×17×4	下端欠	x	有 31	—	
	109		G189)×16×3	下端欠	x	有 29	—	
	110	A-2	G196)×15×5	下端欠	x	有 49	—	
	111		G115)×18×3	下半欠	x	有 43?	—	
	112		G134)×16×4	下半欠	x	有 63	—	
	113		G159)×12×6	下半欠	x	有 34	—	
	114		G56)×11×3.5	下半欠	x	有 27	—	
23	115		G150)×7×6	上半欠	—	斜先状	角棒状	
	116		G236)×7×7	上端欠	—	x	角棒状	
	117		G297)×14×2	上端欠	—	x	板状	
	118		G209)×14×2.5	上端欠	—	x	x	
	119		G348)×16×3	上端欠	—	x	x	
	120		G231)×13×4	上端欠	—	x	x	
	121		G198)×14×4	上端欠	—	x	x	
	122		G116)×16×4	上半欠	—	x	x	
	123		G71)×12×2	上半欠	—	x	x	
	124		G58)×9×15	上半欠	—	x	x	
	125	A	G131)×9×3	上半欠	—	x	x	
	126		G119)×11×3	上半欠	—	x	x	
	127		G175)×8×3	上端欠	—	x	x	
	128		G230)×15×5	上端欠	—	x	x	
	129		G238)×12×4	上端欠	—	x	x	
	130		G185)×11×2	上端欠	—	x	x	
	131		G222)×8×2	上端下端欠	—	—	x	

人形(162)は頭部を南西に向てある。斎串は5点ほどがまとまりなくある。

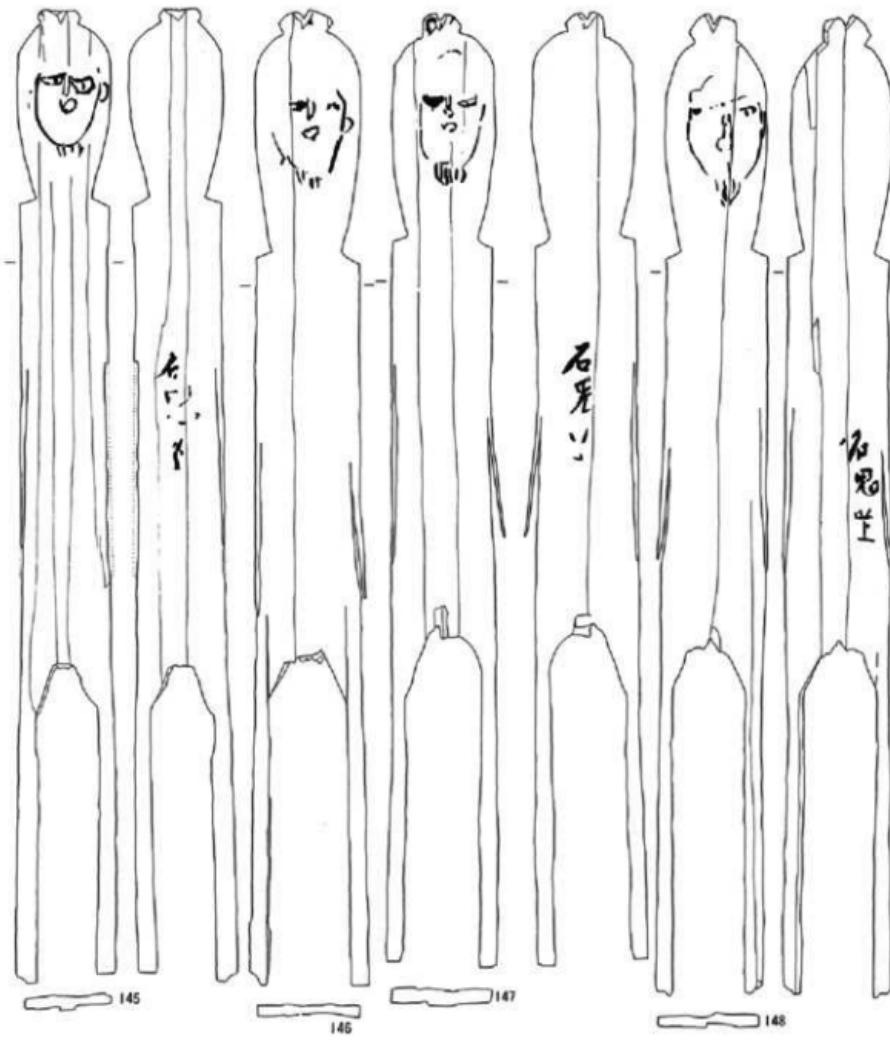
以上の様に人面墨描土器(98)周辺の遺物群は、祭祀場の様相を住時のまま残しているものである。SG61河川跡から4m以上離れている事がこの様な遺存状況を示してくれたと考えられる。この人面墨描土器を中心とした祭祀場の南東辺に、SG61と平行して帶状にある須恵器甕(132)・人形(133・161・163・162・160・159)・馬形(169・172・173・171)・斎串は、一時は祭祀としての配置がなされたものの、後にSG61の増水等によって流されたものと考えられないだろうか。



第24図 SM60出土遺物(3)
須恵器甕内人形・斎串・火切臼



第25図 S M60出土遺物(4)
刀形・人形



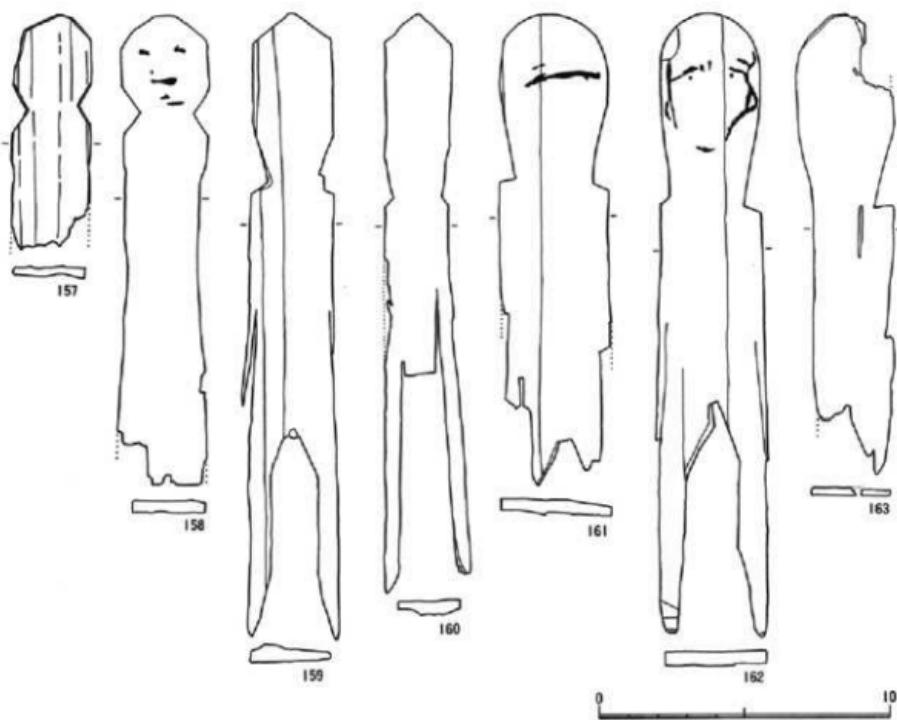
第26図 SM60出土遺物（5）人形

0 10
cm

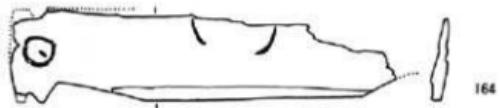
S M60祭祀遺構の二つの遺物群の時期的関係については、なお検討を要する。ただし小形の木製人形については、B類とC類という形態差があり、時期的差異も考えられる。

人面墨描土器、刀形、人形、馬形、斎串等の祭祀遺物の分布はほぼ全国的なものとなってきた。単独又はいくつかの祭祀遺物がセットとなって大溝中で出土しており、櫛^{註-18}等を水に被い流しさるという意味を持ったものであったとされる。これら祭具は政教一致の状態にあった古代律令的祭祀の内容を観せてくれるものといえる。本遺跡で出土した祭祀遺物は祭祀場そのものとして遺存しており、日本でも最初の発見といえる。

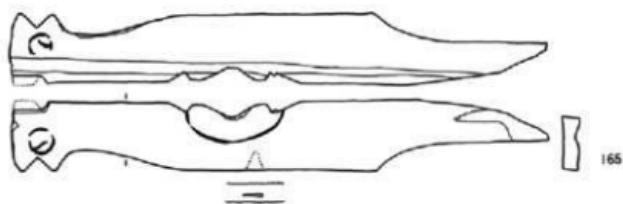
S M60祭祀遺構はⅢ a 層（9世紀後葉以前）下に存り、又 S G61河川の併存してたと考えられる。人面墨描土器(98)、須恵器甕(132)については、その形態・手法から9世紀中葉頃の所産と考えられる。^{註-20}人形・馬形についても9世紀代の年代観があてはめられる。以上を観るに、S M60祭祀遺構の年代は9世紀中葉ころの所産ではないかと考えられる。



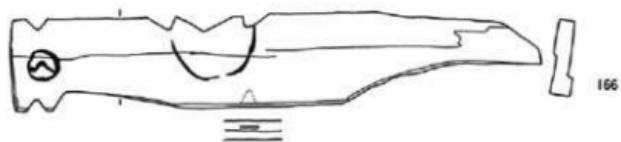
第27図 S M60出土遺物（6）人形



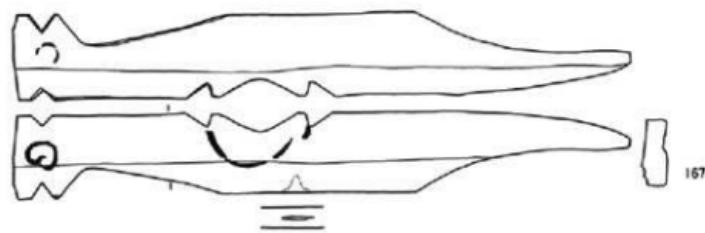
164



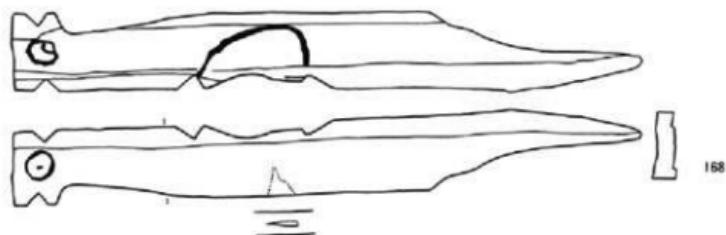
165



166



167



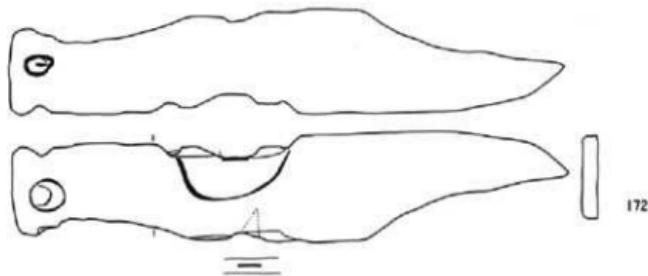
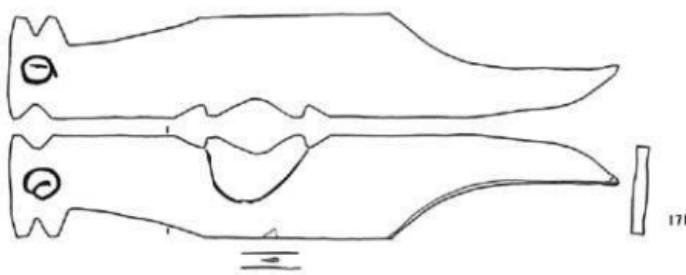
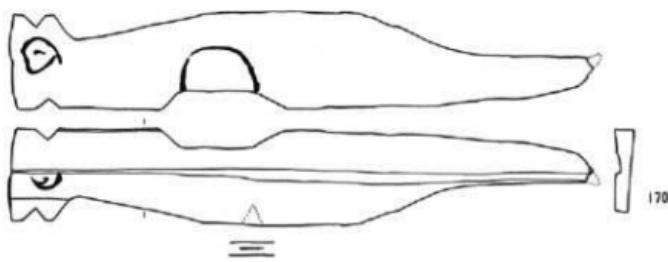
168



169

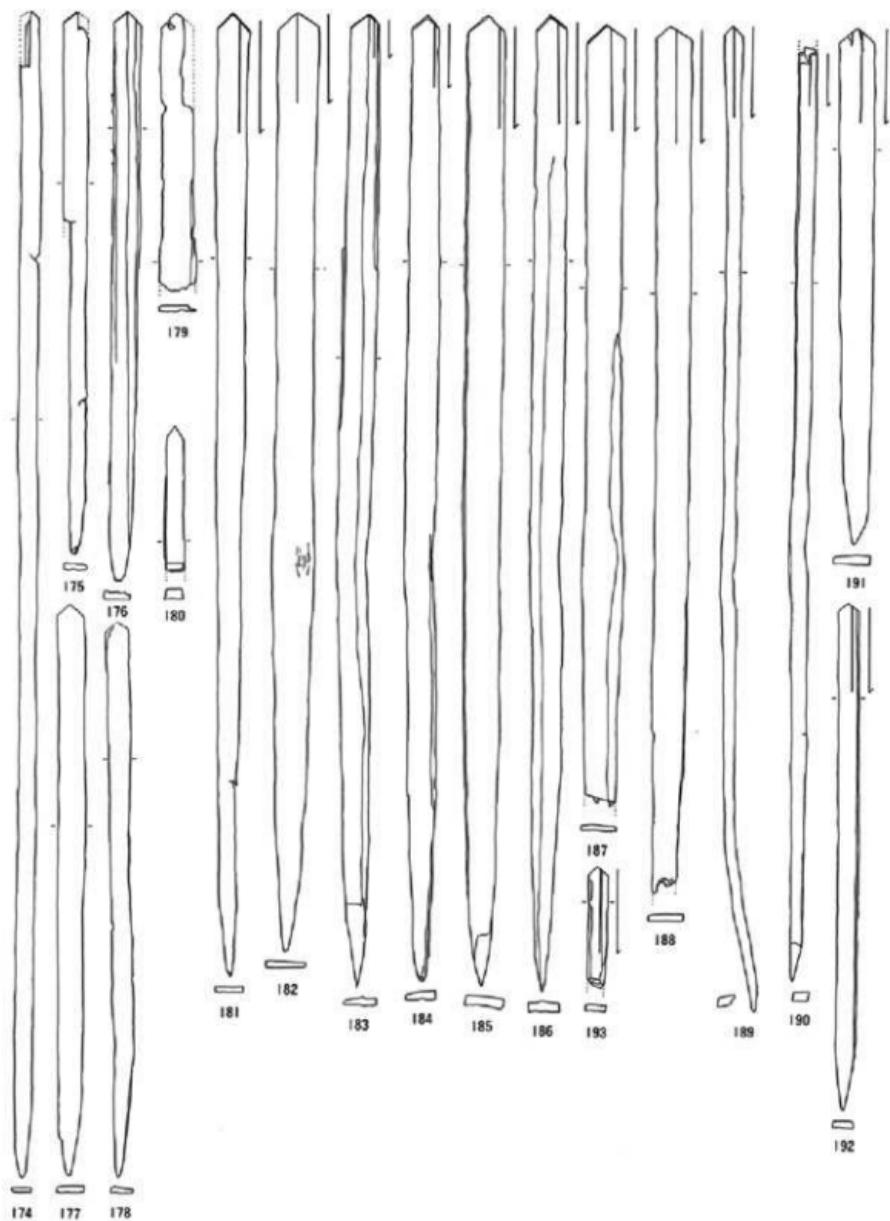
第28図 SM60出土遺物（7）馬形





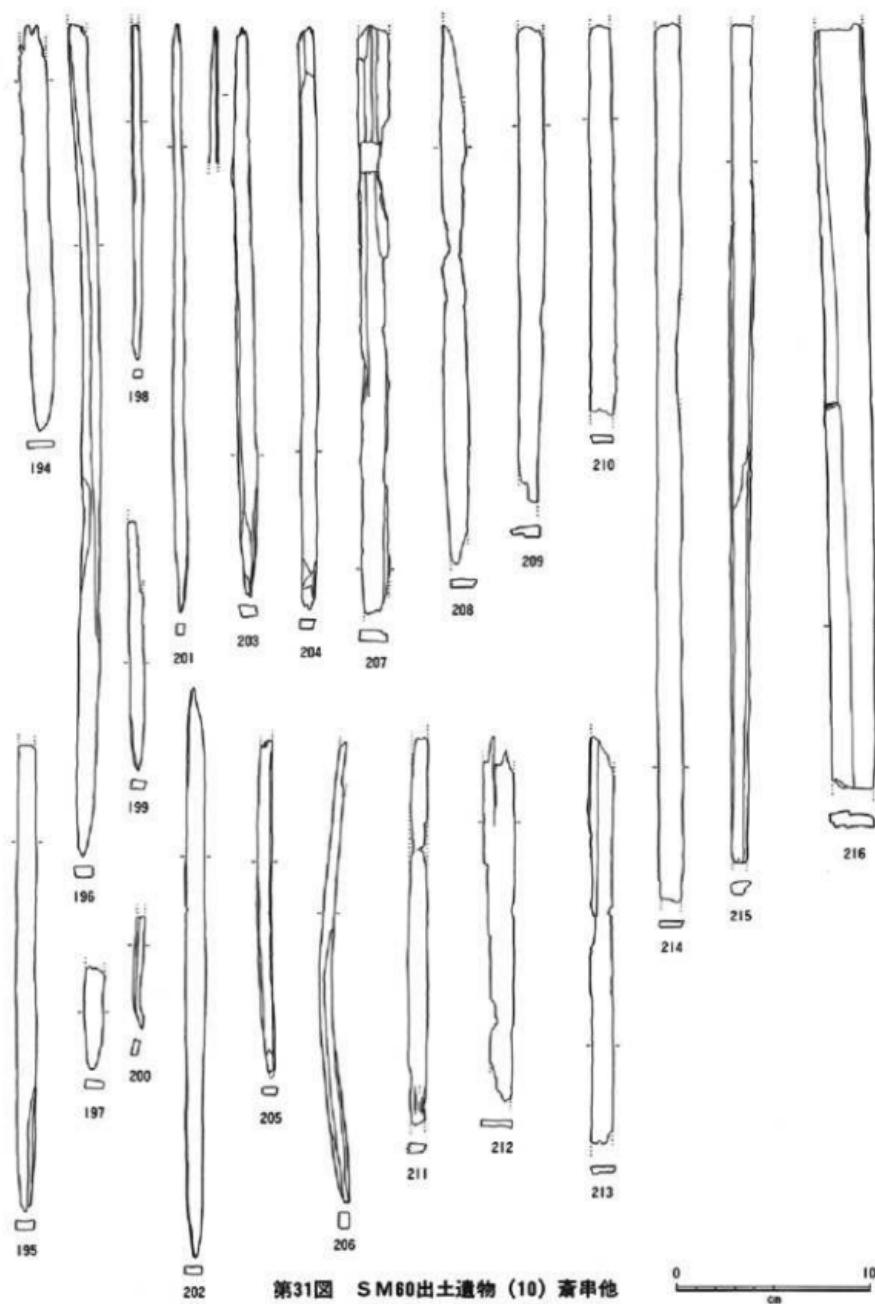
第29図 SM60出土遺物(8)馬形





第30図 SM60出土遺物(9) 斧車

0 10
cm



第31図 SM60出土遺物(10) 薫串他

0 10
cm

9

8

7

+

6

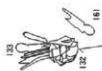
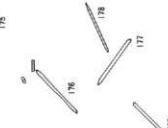
+

5

4



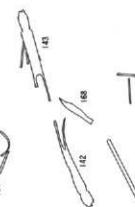
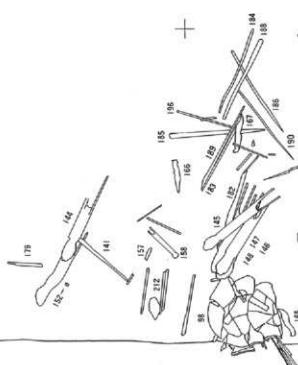
3



+

+

+



+

+

+



14

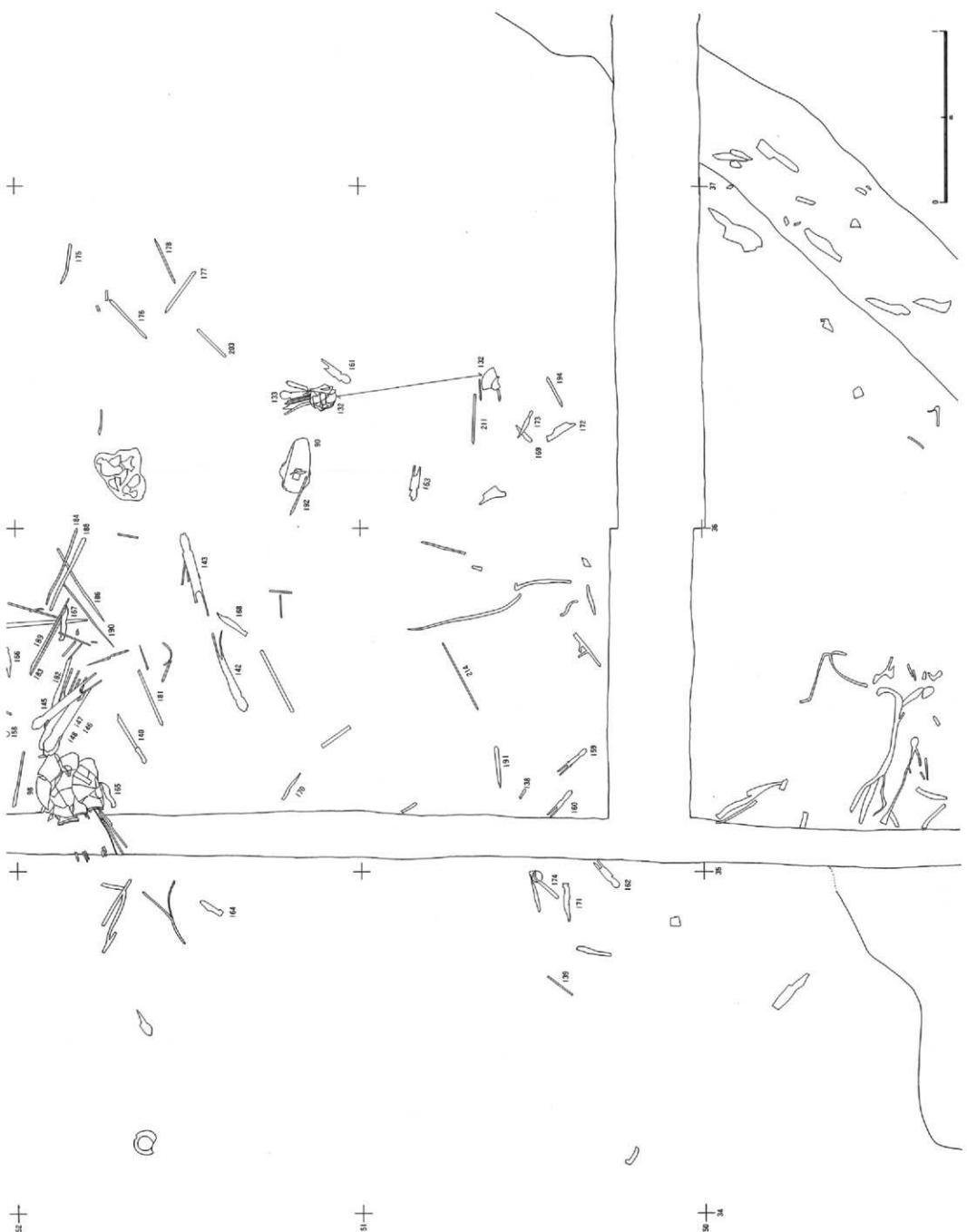


+

+

+

第12图 S M60条纹鱼平面图



IV 1次調査結果

1. 調査の概要

調査はまず東西160m、南北450mの対象地区全体を50m毎に坪掘りし、つぎに幅2mのトレンチ掘りを行なって、最終的に4つの精査地区を設けた。遺構や遺物がまとまって発見された場所は、対象地区的西側・県道東寄りに限定される。このほかの地域は砂質ないしシルトの有機質分を含む地層が厚く堆積し、遺物もほとんど出土していない。

1次調査で検出された遺構には、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡3棟、土壙7基、溝状遺構13などがある。4つの精査地区の中でも、遺構や遺物は中央区にもっとも多く、ついで南区が多い。つぎに各精査地区毎に遺構を概述する。

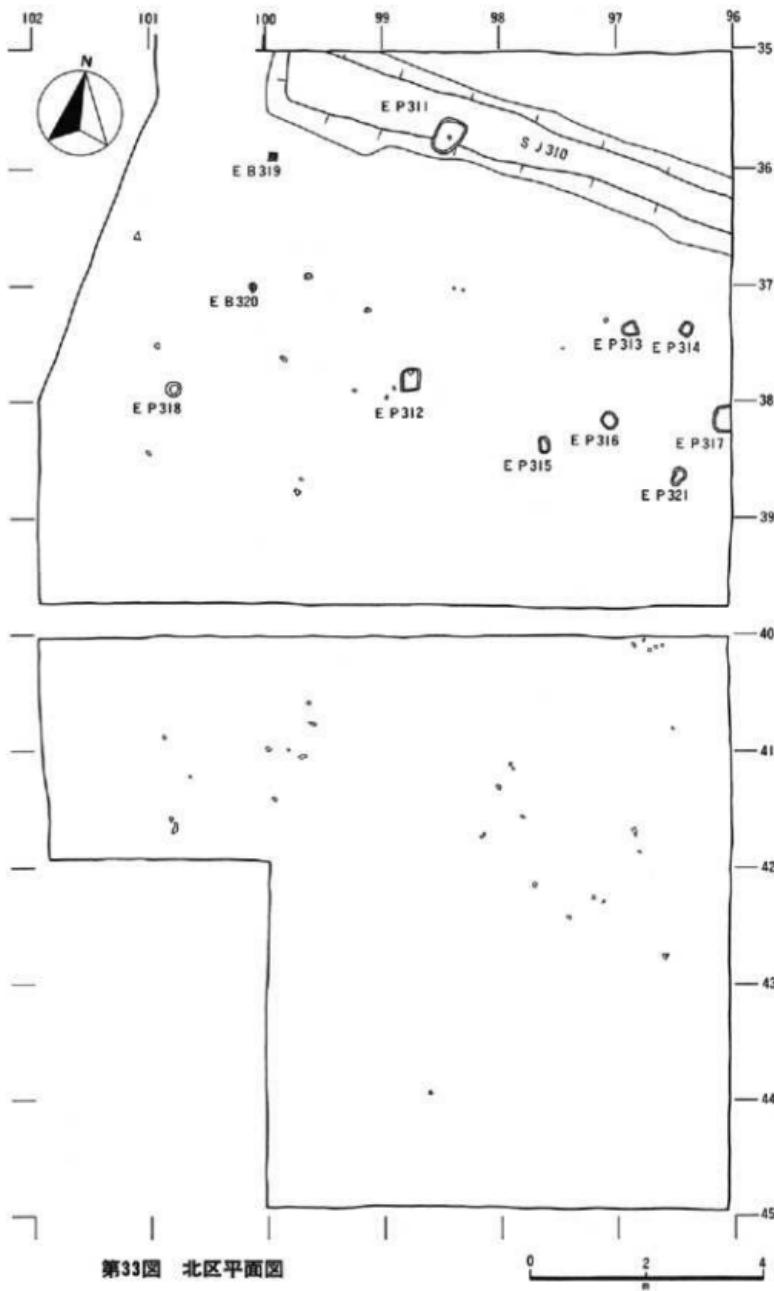
2. 北区検出遺構（第33図）

北区は、岡島田部落太田神社の北東隣、97~102-35~44グリッドに位置する。水田の耕作による削平が著しく、耕土を約20cm掘り下げた段階でIII層の黄褐色砂質土に達する。北区の北東隅には、基底幅約120cm、高さ3cmの東西に長い畦畔状遺構（S J 310）が長さ8.3mにわたって検出されている。方位は真東を基準として28度北に傾き、現在の畦畔方向とは5度位の振れを示す。

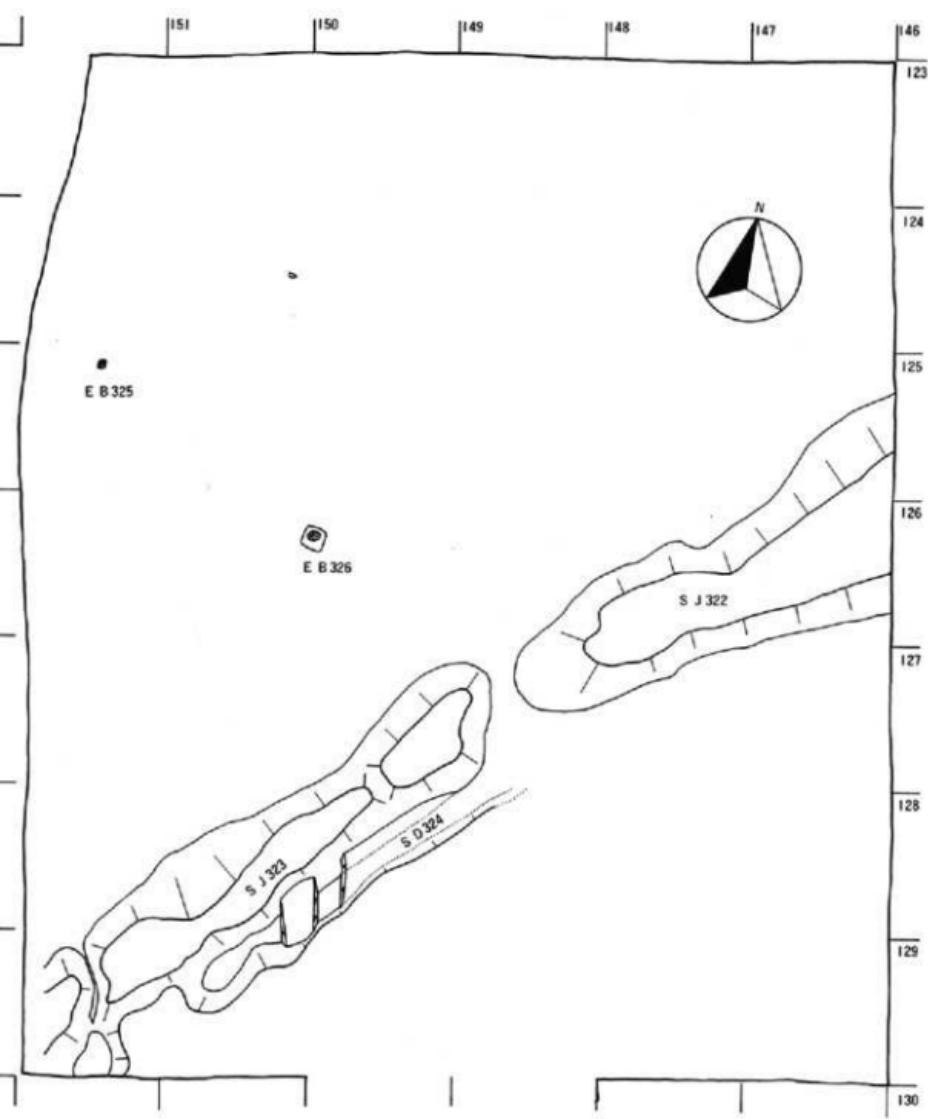
本精査区北半から長径24~62cmのピット9個と、柱根が2本検出されている。柱根のうちE B 319は直径15cmの角柱、E B 320は径14cmの円柱である。またE P 311はS J 310畦畔状遺構を切って掘り込まれている。ピットの埋土はいずれも炭化粒子を多く含む暗褐色粘質土で、掘立柱建物跡の柱穴の一部をなすものと推定されるが、柱間尺が不規則で建物跡を構成するまでには至らない。この周辺からの遺物は少ないが、赤焼土器环や須恵器表の細片や土錐などが同一面から出土している。

3. 西区検出遺構（第34図）

西区は、県道のすぐ東側、147~152-123~129グリッドに位置する。地表下約40cmで青灰色シルトに達する。西区の中央には、基底幅150~250cm、高さ6cmの北東から南西にかけて長く延びる畦畔状遺構が2条（S J 322・323）長さ13.5mにわたって検出されている。方位は真北を基準として約51度東に傾む。S J 323畦畔状遺構の南側には幅80cm前後のSD 324溝状遺構が対をなすように存在する。水口を含む水田大畦畔の一部とも考えられるが、詳細は不明である。西区の北半には円柱根を伴う柱穴が2個検出されているが建物跡を構成するまでには至らない。周辺からは須恵器を主とし漆器碗などが出土している。



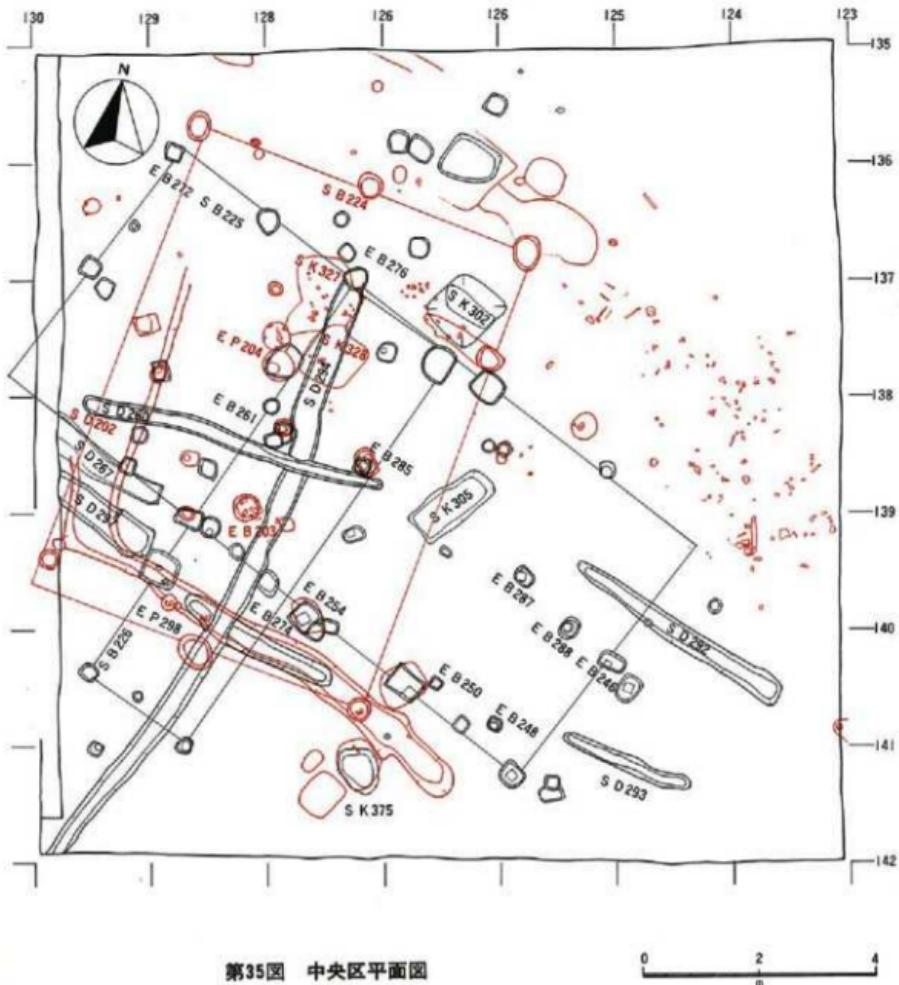
第33図 北区平面図



第34図 西区平面図

4. 中央区検出遺構（第35図、図版20）

中央区は、西区の南西50m、119~130—135~141グリッドに位置する。地表下約36cmでIII層の青灰色シルトに達し、III層をさらに10~15cm掘り下げるとIV層の暗青灰色砂質土に至る。遺構や遺物は、III層を境にしてその直上とIV層の2枚から検出される。本地区でのIII層は下部の文化層の上に再堆積した無遺物層で、南区でも同じような層序が観察された。



第35図 中央区平面図



III層直上面からは、掘立柱建物跡1棟と溝状遺構1条・土壙2基などが検出されている。遺構は本精査地区の西寄りに集中し、中央から東寄りにかけては須恵器や木製品などの遺物がまとまって出土している。これらの遺物はIII層直上の一括遺物として後述する。

S B224建物跡は、梁行2間、桁行推定4間の南北棟の掘立柱建物跡で、南西部でSD202溝状遺構と重複している。切り合い関係からみてSD202溝状遺構の方が新しい。建物跡の梁行長は6.0m、桁行長は8.4mである。柱間距離は、北面・南面梁とも3.0m（約10尺）等間、桁行は幾つかの柱穴が欠落しているが、確認された柱穴からみて2.1m（約7尺）間隔をなすものと推定される。南北主軸方位は、真北を基準としてN14°Eである。柱穴掘り方は径40cm前後の円形ないし梢円形を呈し、埋土は炭化物を含む茶褐色粘質土である。SD202溝状遺構は幅50cm、深さ10cm前後を測り、西側でL字状に屈曲する。覆土は暗褐色粘質土で、須恵器壺などの土器を多く包含している。

IV層下面からは、掘立柱建物跡2棟と溝状遺構7・土壙4基などが検出されている。遺構は本精査地区の南西寄りに集中し、中央から東寄りにかけて須恵器や木製品などの遺物がまとまって出土している。これらの遺物はIV層中の一括遺物として後述する。

S B225建物跡は、梁行2間、桁行5間の掘立柱建物跡で、中央でS B226建物跡と重複している。建物跡の梁行長は5.0m、桁行長は11.1mである。柱間距離は、梁行が推定で2.5m等間、南西面桁行が1.5~3.0mを測る。桁行主軸方位は、真北を基準としてN59°Wである。柱穴掘り方は径30~50cmの円形ないし隅丸方形を呈し、埋土は炭化粒子を含む暗灰褐色粘質土である。柱アタリは15~18cmの隅丸方形を示している。

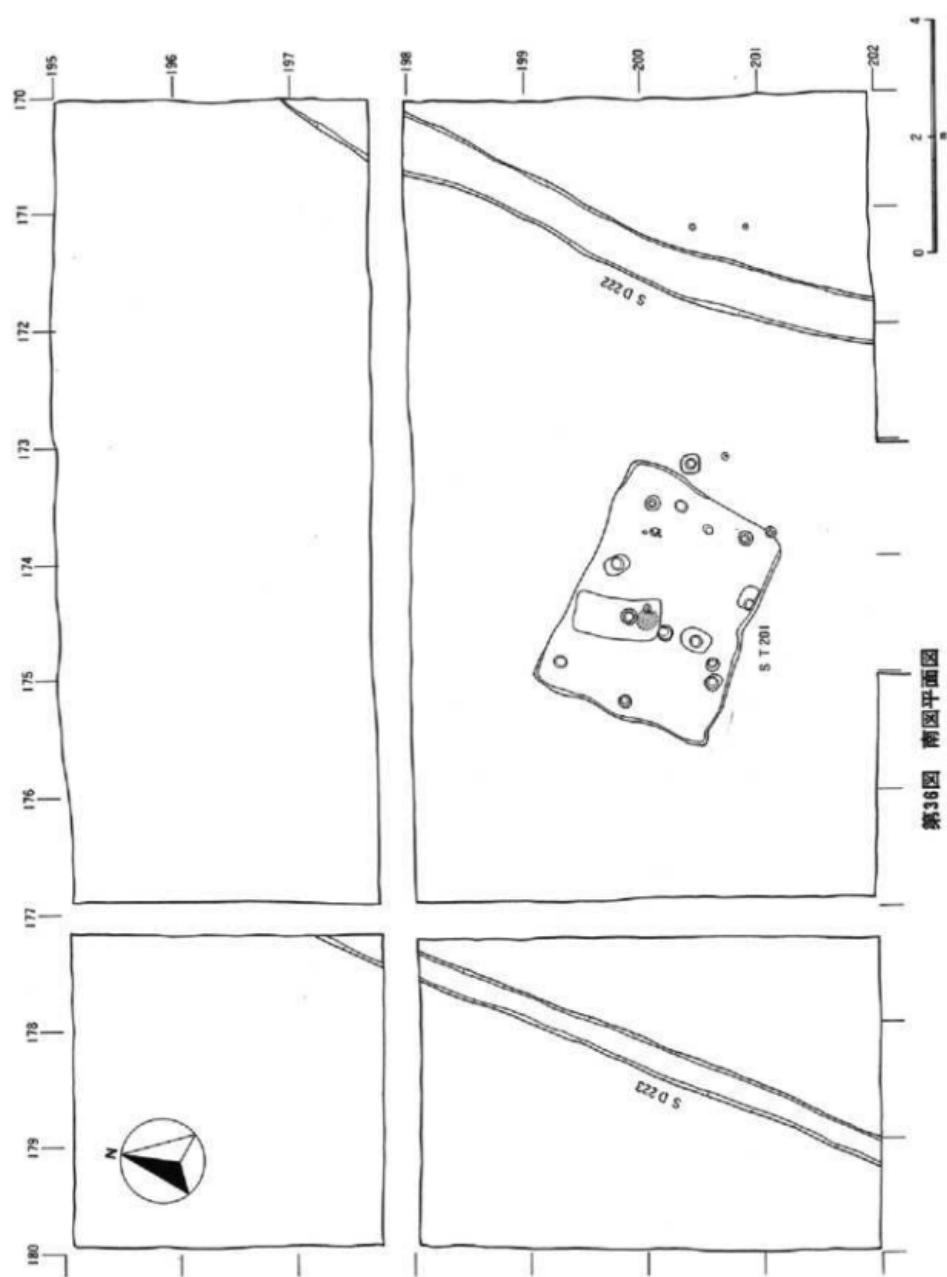
S B226建物跡は、梁行1間、桁行3間の南北に長い掘立柱建物跡である。建物跡の梁行長は2.1m（約7尺）、桁行長は8.1mで、桁行の柱間距離は2.4~3.3mを測る。桁行主軸方位は、真北を基準としてN42°Eである。柱穴掘り方は径30~55cmの隅丸方形を呈し、埋土は炭化粒子を少量含む灰褐色粘質土である。柱アタリは15cm程の隅丸方形を示す。両建物跡の前後関係は不明であるが、S B226建物跡の東側には主軸方位をほぼ同じくする4本の柱穴群（E B248・250・287・288）を認められる。中央区からはSK275・279・291・305の4つの土壙も検出されている。覆土は炭化粒子を多く含む暗黄褐色粘質土である。

5. 南区検出遺構（第36・37図、図版19）

南区は、調査対象地区的南西端、171~180-195~201グリッドに位置する。地表下20~30cmでIII層の青灰色シルトに達し、南半部はIII層のさらに20cm程下に遺物を多く含むIV層の灰褐色粘質土が堆積している。

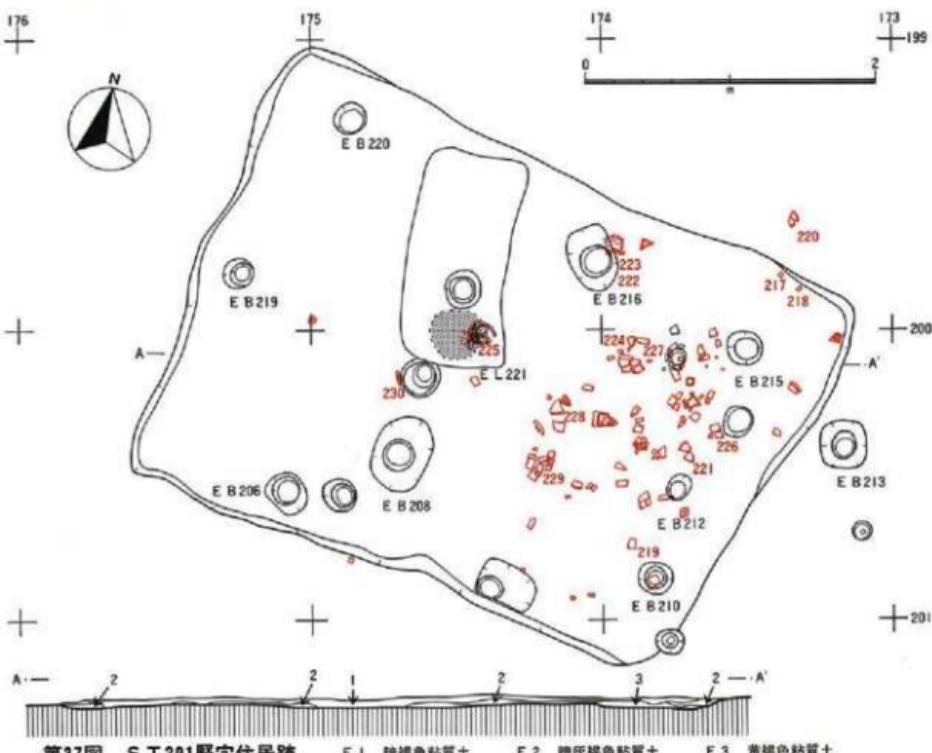
中央区のIII層直上面で検出された遺構には、竪穴住居跡1棟と溝状遺構4などがある。

第36図 南図平面図



S T201住居跡は、南区中央南寄りのⅢ層面で検出された竪穴住居跡で、長径4.34m、短径2.92mの隅丸方形を呈する。遺構検出面から床面までの深さは、上面が水田耕作等によって削平されているためか、最深部で6cmと浅い。床面は中央部付近がやや固くなっている。南北軸の方位は、真北を基準としてN-18°-Eを測る。住居跡中央やや北西寄りに地床炉と思われる焼土 E L221があり、主柱穴は深さや位置などからみて E B 206・210・212・215・216・220・219で構成されるものと考えられる。住居跡の覆土は3層に分かれ、覆土2層とした床面ないし床直上面から約15個体分の須恵器環・赤焼土器環・同窓などが出土している。柱穴の埋土は炭化粒子を多く含む暗黃褐色粘質土である。

S T 201住居跡の最終精査の際Ⅲ層の下面にさらに遺物が認められたので、東側54m²を10cm掘り下がたところ、Ⅳ層下部に幅1mの溝状遺構2条(S D 238・240)、ピット8個等が検出された。また南区の南方20m地点の暗渠埋土を除去した際、壁面の下層から遺物が出土したので、この地区を4m²深掘りしたところ、Ⅳ層中から土器がまとめて発見された。



第37回 ST 201堅穴住居跡 F 1 噴褐色粘質土 F 2 噴灰褐色粘質土 F 3 黃褐色粘質土

6. 出土遺物（第38図～第44図、図版38～43、表9・10）

1次調査で出土した土器は、整理箱にして約36箱分である。このほかに陶碗や箸・火切白・漆器等の木製品、土錐、紡錘車、刀子や釘などの鉄製品なども出土している。本節では構内出土の遺物および中央区包含層の一括遺物を中心に記述する。

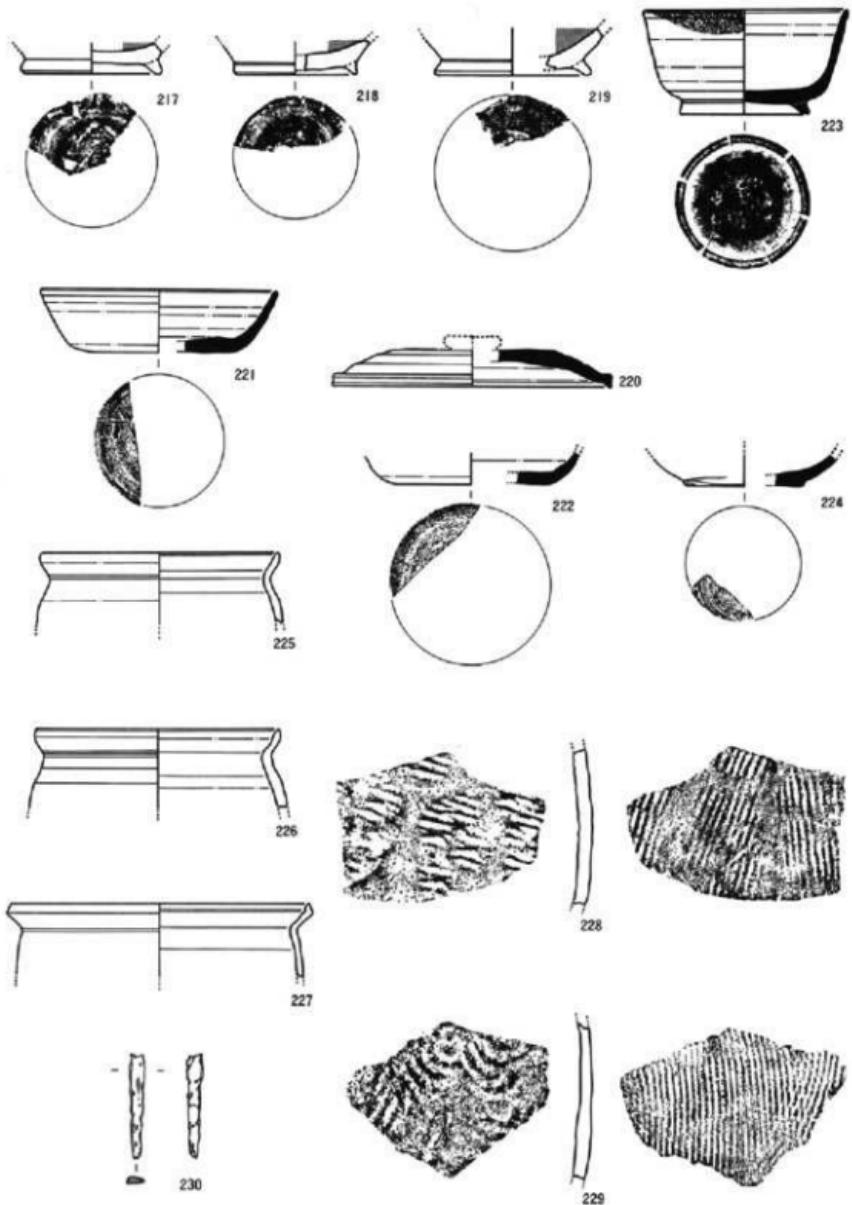
南区のS T 201住居跡の床面ないし床直上面からは約15個体の土器が出土している。このうち実測可能な土器を図示したのが第38図である。器種には、土師器高台付环、須恵器环、

表-9 第1次調査遺物観察表(1)

探査 番号	遺物 番号	器 種	計測値(%)			色	調	粘	土	焼成	底部 切端	調整技法・備考	出土地点・層位			
			口 径	底 径	部 高											
217	土師器 高台付环		(68)	明褐色	粗砂混	良	圓	赤	内面ミガキ、武者模倣	S T 201	Y					
218			(53)	(17)	灰褐色	石英・砂混	良	圓	赤	内面ミガキ、炭素吸着	S T 201	Y				
219			(73)	(34)	赤褐色	石英・細砂混	良	圓	赤	内面ミガキ、炭素吸着	S T 201	Y				
220		蓋	(144)	(19)	暗灰色	石英・砂混	良	圓	赤	内面ミガキ、ヘラ削	住居跡場	Y				
221		环	(123)	(33)	灰褐色	鐵密	良	圓	赤	内面自然釉	E L 221	Y				
222		須恵器 高台付环	(84)		灰褐色	石英・砂混	良	圓	赤	外面自然釉	F3	Y				
223		环	104	63	灰色	鐵密	良	圓	赤	外面自然釉	E L 221	Y				
224		环	(60)	(16)	黄灰色	鐵密	良	圓	赤	外面自然釉	E L 221	Y				
225			(134-136)	(37)	赤褐色	鐵砂混	良	圓	赤	外面自然釉	E B 220	F1				
226		赤燒土器	(138)	(41)	赤褐色	石英・細砂混	良	圓	赤	内面塗付層	E B 220	F1				
227		須恵器 裏	(154)	(37)	赤褐色	石英・細砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 220	F1				
228		須恵器 環	(135)	(37)	茶褐色	石英・細砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 220	F1				
229		金萬葉品 耳	150	44	褐灰色	粗砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 220	F1				
231	赤燒土器 裏		(190)		明褐色	石英・砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 204	F1				
232		須恵器 环	(180)		明褐色	粗砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 204	F1				
233		須恵器 裏	(134)	(75)	34	褐色	小粒・細砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 220 (S B 25)	F1			
234		赤燒土器 裏	(90)		灰褐色	鐵砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 205 (S B 25)	F1				
235		須恵器 裏	(70)		茶褐色	粗砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 206	F1				
236		須恵器 環	(132)	(84)	31	明灰色	鐵砂混	良	圓	赤	外面塗付層	E B 206	F1			
237		赤燒土器 裏	(200)		129.5	75	22-33	明灰色	粗砂混	良	圓	赤	外面塗付層	129-140 F1		
238		須恵器 環	(131)	78	28-39	明灰色	粗砂混	不良	粗	圓	赤	外部手持ちヘラ削り	SD 202	127-140 F1		
239		須恵器 裏	(101)	33	灰褐色	鐵砂混	良	圓	赤	外側自然釉・内面ナフ	SD 202	128-140 F1				
240		須恵器 裏	(104)	31	灰褐色	鐵砂混	良	圓	赤	外側自然釉・内面ナフ	SD 202					

表-10 第1次調査遺物観察表(2)

辨認 番号	遺物 番号	器 種	計測値 (%)		色 調	胎 土	施成 部 切 削	調査 方 法・備 考	出土地點・著 位				
			口 徑	底 径									
41	250	环	(136)	80	38	暗灰色	粗 密	良 ヘラ切	体部墨書き	125-129・Ⅲ			
	251		高台付环	(128.5)	80	49.5	灰 色	石英・粗砂混	# # 外面自然釉	126-137・Ⅲ			
	252	环	(120)	(60)	34	灰 色	粗 砂 混	# #	底部墨書き「」	128-136・Ⅲ			
	253		(20)			暗灰色	粗 砂 混	# #	体部墨書き	128-136・Ⅲ			
	254	高台付环	114	69	48	暗灰色	粗 砂 混	# #	底部墨書き	128-138・Ⅲ			
	255	环	116	75	30-31	灰 色	粗 砂 混	# 圆点	底部墨書き	124-138・Ⅲ			
	256	蓋	(148)	35.5	36.5	灰赤褐色	粗 砂 混	不良		122-137・Ⅲb			
	257	环	(123)	(82)	25	暗灰色	粗 砂 混	良 ヘラ切	底部墨書き「石」字	129-135・Ⅲb			
	258		(131)	(78)	(31.5-38)	明 灰 色	粗 砂 混	# #		126-137・Ⅲb			
42	259	环	133	84	29	暗灰色	鐵 青	# #		122-141・Ⅲb			
	260		123	80	30	暗灰色	鐵 青	# 圆点	底部墨書き「西」	129-135・Ⅲb			
	261		127	55	39	暗 灰 色	小捲 砂混	# #		126-137・Ⅲb			
	262	蓋	(142)			灰 色	石英・砂混	#		128-141・Ⅳ			
	263		(140)		25	灰 色	鐵 青 色	# ヘラ切		120-140・Ⅳ			
	264	环	(132)	(70)	34	灰 色	粗 砂 混	# #		124-139・Ⅳ			
	265		136	80	34	暗 灰 色	石英・小捲砂	# #					
	266	环	(122)	(78)	38	灰 色	石英・砂混	# #		129-140・Ⅳ			
	267		(126)	65	36	灰 色	鐵 青 砂混	# #	足込に指痕ナデ	125-139・Ⅳ			
	268	环	(128)	76	32	灰 色	石英・細砂混	# #		130-135・Ⅳ			
	269		(136)	76	35	暗 灰 色	粗 砂 混	# 圆点		120-140・Ⅳ			
43	270	高台付环	(132)	84	41	暗 灰 色	鐵 青	#	ヘラ切	121-140・Ⅳ			
	271		(150)	(80)	80	暗 灰 色	粗 砂 混	#	内圓十字痕	128-141・Ⅳ			
	272	赤燒土器	78	(49)		赤灰褐色	粗 砂 混	# 圆点	内面条状状痕	126-137・Ⅳ			
	273		(116)			明 褐 色	石英・粗砂混	#	内面凹凸目	134-139・Ⅳ			
	274	壺	(400)		(85)	灰 褐 色	石英・粗砂混	#	外表面格子目状叩き・外面粗粒	128-141・Ⅳ			
	275	赤燒土器	(242)	(197)		灰 褐 色	粗 砂 混	#	外表面凸子目状叩き	124-139・Ⅳ			
	276		(274)	(140)		灰 褐 色	石英・粗砂混	#	外表面凸子目状叩き	中央区			
44	277	蓋		70	89	灰 色	鐵 青	#	ヘラ切 外面自然角	152-123・II			
	278					明 灰 色	石英・粗砂混	#	外面自然角	90-40・II			
	279	环	(128)	(84)	35	灰 色	粗 砂 混	# ヘラ切	内面黑漆塗り	128-139・IV			
	280		(144)	(96)	42	灰 色	小捲 砂混	# #	内面漆塗り	127-137・IV			
	281	环	(142)	(92)	33	明灰褐色	石英・粗砂混	# #	内面深村着	128-136・IV			
	282				74	白 灰 色	鐵 青	# 圆点	底部墨書き	152-123・III			
	283	环			34	灰 色	鐵 青	#	底部墨書き	150-125・III			
	284					白 灰 色	鐵 青	#	底部墨書き	127-140・III			
	285	鋸輪陶器	壺		(47)	黄 绿 色	鐵 青 砂混	#	内面自然角	150-140・II			
	286	陶 壺	円 底	器高	55	孔径	4-29	暗 灰 色	石英・砂混	# ヘラ切 内面自然角	中央区130-138・IV		
45	287	土 製 品	綠 油 壺	器厚	9-15	孔径	9	明 褐 色	鐵 青	#	130-137・III		
	288	土 製 品	土 罐	長	68	幅	7-18	重	30g	褐 色	鐵 青	# 全体に埋付窓	102-38・III
	289	土 製 品	大 切 臼	長	46	重	8g	口徑	3-3	明 褐 色	粗 砂 混	#	125-138・III
	290	木 製 品	刀 子	残長	52	幅	1.2-2.4					#	121-135・III b
	291	铁 製 品	刀 子	残長	10	幅	9-14					#	125-125・II

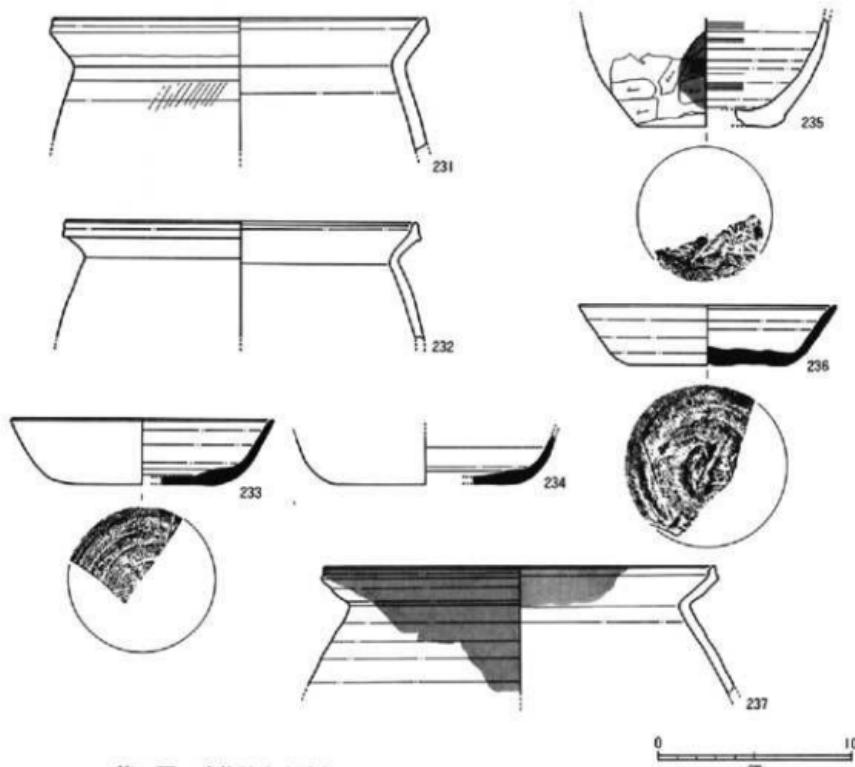


第38図 ST 201出土遺物

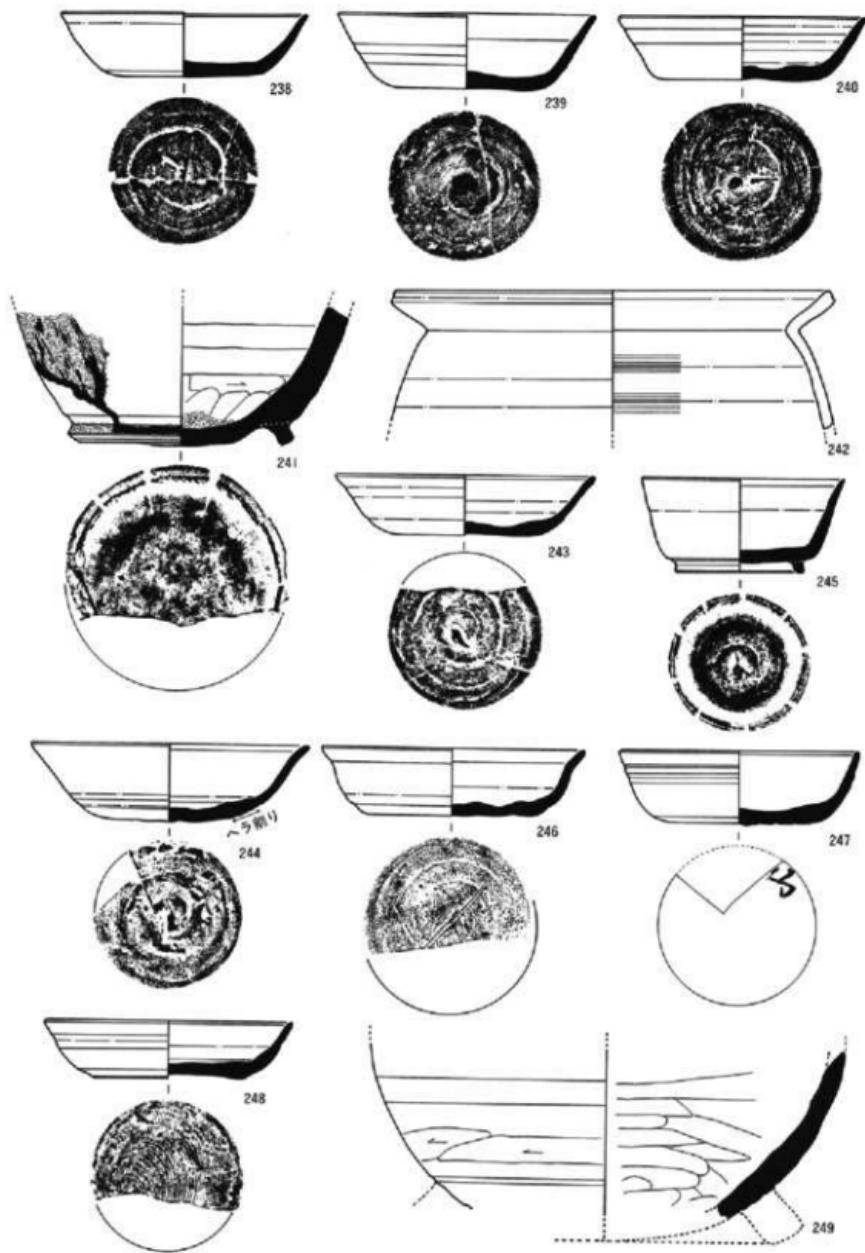
0 10
cm

同高台付環・同甕、赤焼土器環・同小形甕・同長胴甕・同壺などがある。土師器環は低い台部が付くもので、内面がヘラミガキのち黒色化処理されている。須恵器環類の底部切り離しはヘラ切りと回転糸切りの二つがある。赤焼土器小形甕は口縁部がやや膨みを持つものと口縁端が軽く内傾するものがある。柱穴のうちEB208・210・213・215・216の5ヶ所から遺物の出土が認められるが、赤焼土器甕の体部片を主とするものである。ST201住居跡の時期は、資料が十分でなくなお不明な点もあるが10世紀代に比定される。

南区の3棟の掘立柱建物跡のうち8個の柱穴から土器が出土している。細片が多く測図できるものは少ないが、主なものを第39図に図示した。III層直上面で検出されたSB224建物跡のうち、土器を出土しているのはEB2031ヶ所のみであるが、同一面上にあるEP204の資料も傍証として用いる。両柱穴とも内面が黒色化処理された土師器環は見当らず、底

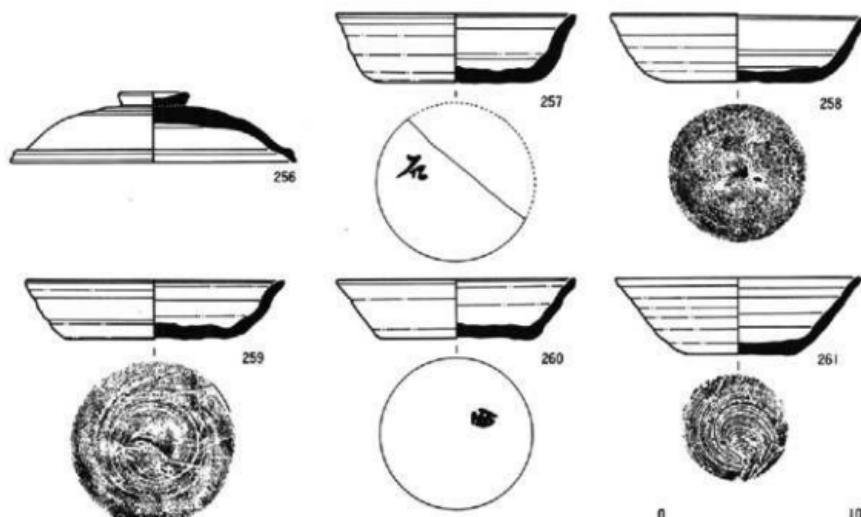
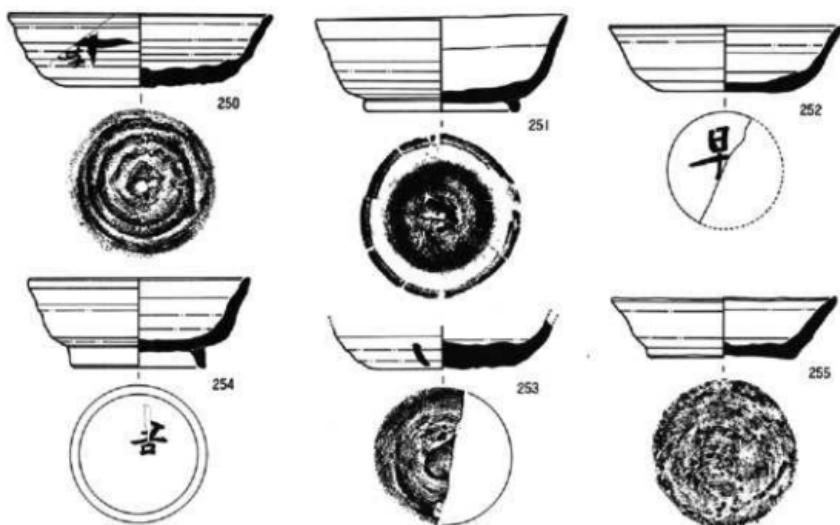


第39図 建物跡出土遺物



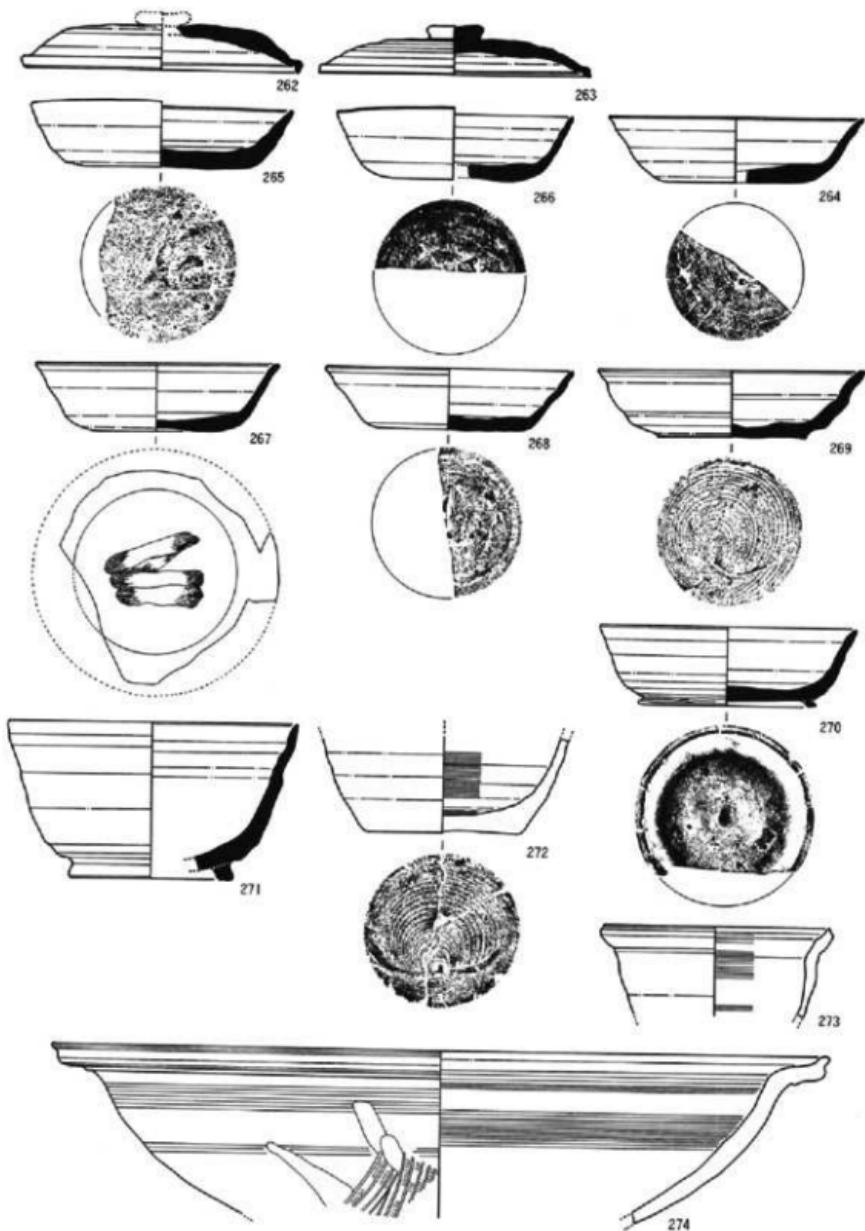
第40図 溝状造構出土遺物

0 10 cm



第41図 中央区出土遺跡（1）

0 10 cm



第42図 中央区出土遺物（2）

0 10
cm

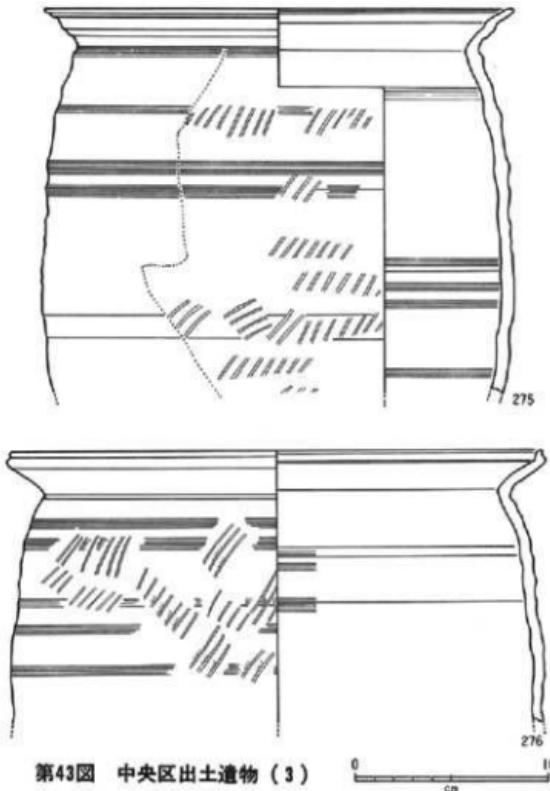
部がヘラ切り手法による須恵器環と、口縁部が「く」字状に外反ないし口縁端が直立する赤焼土器小形甕および長胴甕が土器の主体を占める。本建物跡の時期は、後述するSD202溝状造構等の遺物をも勘案して、平安時代9世紀後半頃と推定される。

IV層下面で検出されたSB225・226建物跡のうち、土器が出土しているのはEB246・254・272とEB261・274・276・285の7ヶ所である。このほかにEP298内の出土土器もSB226関連資料と考えられる。各柱穴とも内面が黒色化処理された土師器環は見当らず、底部がヘラ切り手法による須恵器環と、口縁部が「く」字状に外反ないし口縁端が直立する赤焼土器小形甕および長胴甕が土器の主体を占める。甕類には体部下半がヘラ削り調整されているものもみられる。両建物跡には遺物からみて顕著な時期差は認められず、その時期は後述するIV層出土の遺物をも勘案して、平安時代9世紀前半頃と推定される。

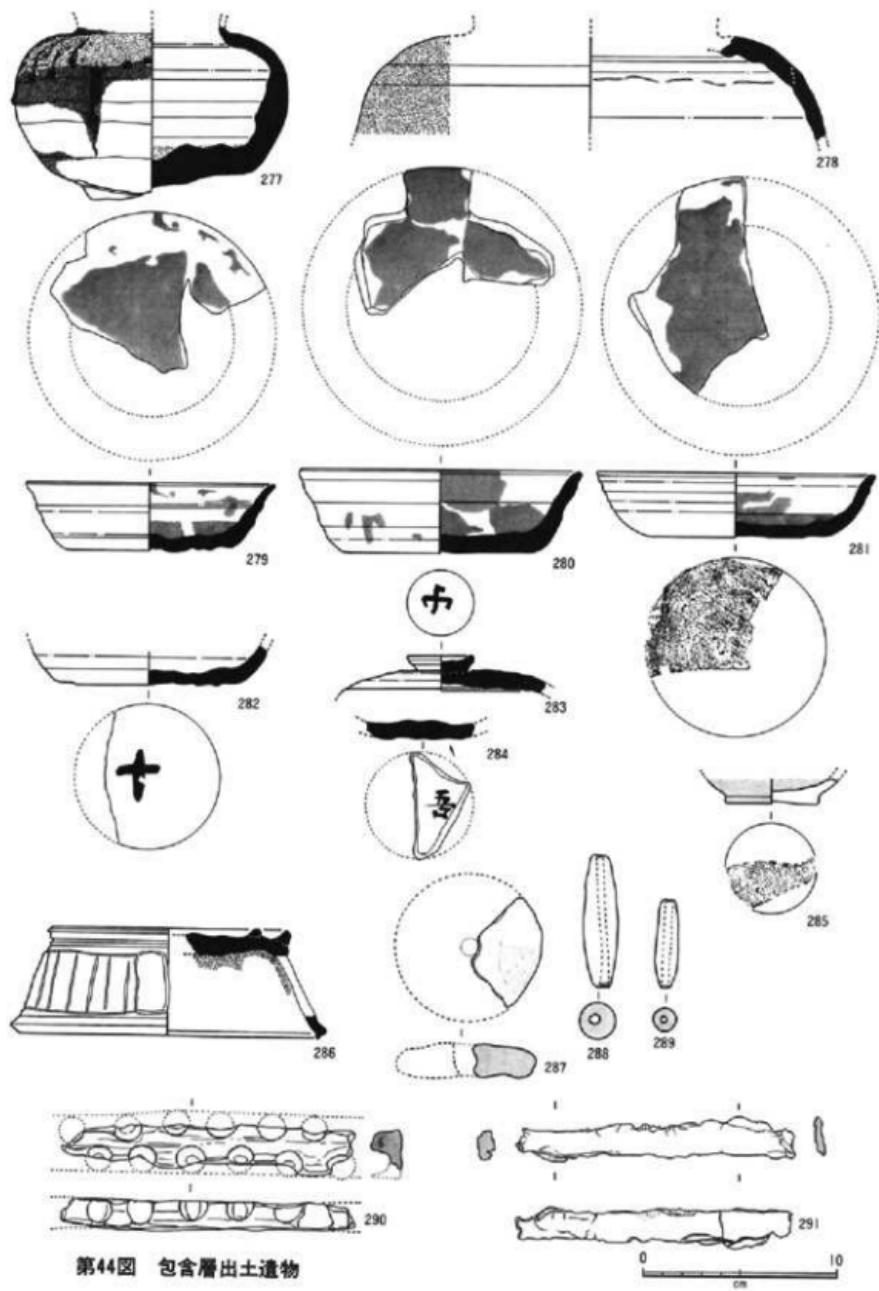
溝状造構13条のうち、
ここでは中央区と南区の
ものについて、出土土器
を第40図に図示した。

中央区III層直上面で検出されたSD202溝状造構からは、5個体の土器が出土している。底部がヘラ切りの須恵器環と口縁部が「く」字状に外反する赤焼土器甕などがあり、形態や調整技法などから9世紀後半頃の時期が推定される。

中央区と南区のIV層下部の各溝状造構からは、底部がヘラ切りないし糸切りの須恵器環と口縁端が直立する赤焼土器甕などがある。形態や調整技法などから9世紀前半頃の時期が推定される。



第43図 中央区出土遺物（3）



第44図 包含層出土遺物

中央区の真ん中から東寄りにかけては、包含層とくにIV層中から多量の一括土器が出土している。これらの土器はIII層直上面から出土したものとIV層中から出土したものおよびその中間層から出土したものの三つに分けられる。これを各々III層・IV層・III b層と呼ぶ。

III層出土の土器は第41図上段に図示したもので、須恵器環類が主である。底部の切り離しはヘラ切りと回転糸切りの二種があり、ヘラ削り等の再調整は認められない。とくに255は底径が大きく器高の低い回転糸切り離しの环で、III b層の260、IV層の269に共通する特殊な器形である。城輪柵跡周辺では酒田市上ノ田遺跡 S D 601大溝出土のものに類似がある。^{註-22} IV b層出土の土器は第41図下段に図示したもので、須恵器環を主体としことに同蓋が加わる。器形や調整手法はIII層の土器とはほぼ同様であるが、261は時期的にやや新しい様相をもつ。IV層出土の土器は第42・43図に図示したもので、器種としては須恵器環・同高台付環・同蓋・赤焼土器小形甕・同長胴甕・同壺などがある。内面に黒色化処理を有する土器器環は見当らず、これはIII・III b層の土器についても同じである。須恵器環類の底部の切り離しはヘラ切りが主で、267の底面には指頭によるナデ痕が認められる。赤焼土器の甕や壺の口縁部形態は、「く」字状に外反するものと口縁端が直立しない内傾するものの2種がある。壺や長胴甕の体部には横方向のロクロ目とともに外面に条線状の叩きが施されている。内面の同心円状のアテ痕はいまのところ認められない。

これらの土器のうちIV層出土の土器群は、先述した上ノ田遺跡 S D 601大溝出土の土器群と共通性を示す。同土器群は私共が庄内地方の平安時代土器編年の第I期としているもので、時期は平安時代初頭9世紀前半に比定している。したがってIV層出土の土器群もこれとほぼ同じ時期に推定される。III b層の土器群も、III層の下面から出土していることを含めてIV層の土器群とほぼ同じ時期に推定されるが、一部III層の土器が混入している可能性がある。III層の土器群はSB224建物跡周辺から出土しているものが多く、IV層の土器群よりやや新しい時期、9世紀後半頃のものと考えられる。ただしIII層とした土器群のうちでも250と255の須恵器環は、出土地点が中央区の東寄りにあたりIV層の土器が主に出土した場所に属するため、出土レベルに若干の高低はあるにしても、IV層の土器群に含めてよいかもしれない。

このほか各精査区およびトレーニングの包含層からは、内面に漆の付着している須恵器環や、墨書き土器、綠釉陶器、土製品、木製品、鉄製品などもいくつか出土している。これらは包含層出土遺物として一括して第44図に図示した。

286は透しのある台脚部を有する円面鏡で、中央区IV層の土器群と一緒に出土したものである。また290は火切臼の一部で、表面の両端に径14mm前後の火切孔が交互についている。291は鉄製の刀子であるが、II層出土の遺物であり時期的な限定は困難である。

V まとめ

1. 遺構の変遷

俵田遺跡の1次・2次調査で検出された遺構には、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡8棟、掘立柱列5条、板列3条、土壤10基、河跡2、溝状遺構28、祭祀遺構などがある。これらの遺構は、検出区域からみて(1)1次調査北区と2次調査C区、(2)1次調査西区と中央区、(3)1次調査南区と2次調査A・B区の三群に分けることができる。

本遺跡の遺構の変遷を考える場合に鍵層となるのがIII層の黄褐色ないし暗青灰色の砂層である。2次調査A区では、III層を上下とした遺構について、層序や遺物等の検討から古い順につぎのような変遷を想定することができる。



I期にはこのほかS A120・123板列、E B121・122柱穴などが含まれ、II期には1次調査中央区IV層で検出されたS B225・226建物跡、S D238・240溝状遺構などが含まれる。S M60祭祀遺構は、S G61・116河川跡が存続していた期間の後半期頃に属すると思われる。

III期の遺構としては、1次調査III層直上面で検出されたS B224建物跡とS D202溝状遺構などがある。

IV期の遺構としては、S B2建物跡のほかにS A111掘立柱列があり、明確な遺物の出土はないがS B70・S B100建物跡、S A129掘立柱列もほぼ同時期と考えられる。また1次調査南区で検出されたS T201住居跡も本期に属する。

V期の遺構としては、S B40建物跡のほかにS A86掘立柱列とS D28溝状遺構・S K29土壤などがあり、1次調査C区のS B90建物跡もおそらく本期に属するものであろう。

俵田遺跡は、8世紀末葉から11世紀まで続く平安時代を中心とした良好な遺存状況にあった遺跡であるが、とくにこれまで城輪柵跡周辺で未検出であった奈良時代8世紀末葉の遺構や遺物が検出されたことは大いに注目される。

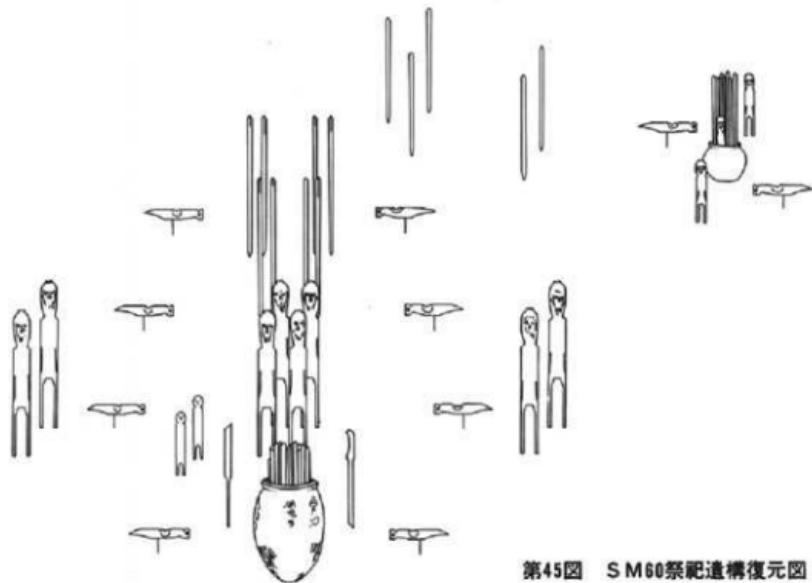
2. S M60祭祀遺構について

A区西辺中央で発見されたS M60祭祀遺構は、人面墨描土器、須恵器小甕、木製の人形・刀形・馬形・蕭串などの祭祀遺物が祭場として配置されたままの姿で出土しており時期は

9世紀中葉頃と考えられる。人面墨描土器や木製模造品の人物・馬形等は全国的に出土していたが、本遺跡にあるように具現的に祭場としての形を残した状態が発見されたのは日本では最初の発見といえる。

木製模造品の一部は、8世紀初頭に成立した「大宝令」の「神祇令」に規定された国家的祭祀と関連しており、その具体的な内容は『延喜式』によって一応知る事ができるという。さらに人物は中国起源の道教系の祭祀具で、呪禁師の制度とともに令に伴なって移入されたと考えられている。これらを使用しての祭祀は、天武・持統朝の祭祀政策を背景として、6世紀以降の伝統を基に、新たに中国系の祭祀具を加えて再編成されたものという。^{註-25}

本遺跡の祭場の性格を考える場合、近郊に在る出羽国府（城輪柵跡）との関連は見逃せない。宮都を中心に分布していた祭祀が、地方行政機関を通して次第に各地に広まっていたと考えられており、行政の中心である出羽国府においても同様な祭祀が伝えられた事がうかがえる。現に嘉祥三年（850）に、全国に先駆けて陰陽師が派遣されている。この陰陽師の行なった祭祀と本遺跡の祭場を直接結びつける事はできないが、出羽国府の律令的祭祀との可能性はうかがわれる。祭祀の具体的な内容についても載りのみに限定できるかという問題もあり、今後の研究課題といえる。



第45図 S M 60祭祀遺構復元図

註

- 註1 山形県「土地分類基本調査 岡田」 1978年
- 註2 小野 忍 「城輪櫓遺跡」「月刊考古学ジャーナル」119号 1982年
- 註3 川崎利夫 「出羽国分寺はどこにあったか」「羽陽文化」114 1982年
- 註4 佐藤穂宏 「仁和三年条の國府移転に関する覚書」「庄内考古学」16号 1979年
- 註5 佐藤庄一他 「農林・土木事業関係遺跡発掘調査報告書」「上ノ田遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書 第52集 1982年
- 註6 野尻 侃也 「北田遺跡第2次発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書」第53集 1982年
- 註7 野尻 侃也 「沼田遺跡発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書」第78集 1984年
- 註8 佐藤庄一他 「農林事業関係遺跡(2)発掘調査報告書」「後田遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書 第64集 1983年
- 註9 川崎利夫他 「境興野遺跡発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書」第46集 1981年
- 註10 安部 実也 「豊原遺跡発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書」第56集 1983年
- 註11 野尻 侃也 「岡B遺跡発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書」第68集 1983年
- 註12 註11に同じ。IVまとめで、城輪櫓を中心とした地割りの可能性が指摘されている
- 註13 註8に同じ、「侯田遺跡」
- 註14 佐藤庄一他 「農林事業関係遺跡発掘調査報告書」「地正圓道跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書 第51集 1982年
- 註15 安部 実也 「新青渡遺跡第1次発掘調査報告書」「山形県埋蔵文化財調査報告書」第67集 1983年
- 註16 註5に同じ、上ノ田遺跡
- 註17 金子裕之 「古代の木製模造品」「研究論集4」奈良国立文化財研究所学報第38冊 1980年
「伊場遺跡の馬形に腹部に巻く下辺の切りこみに細棒片が残存したのがあり、細棒に棒し立てた」
- 註18 註17に同じ
- 註19 水野正好 「祭礼と儀礼」「古代史史観10」 1974年
人形は、御氣を懸け、身を撫でて人像に懸れを移し、汗に流しやらせるものとして、奈良・平安時代に盛行したものである。
- 註20 庄内地方における平安時代の土器縦年の骨格は註5新青渡遺跡で一応形成されており、赤燒土器窯(96)は9世紀中葉頃と考えられる
- 註21 註17に同じ
- 註22 註5に同じ、上ノ田遺跡
- 註23 註15に同じ、新青渡遺跡 2次
- 註24 註17に同じ
- 註25 註17に同じ
- 註26 註17に同じ
- 註27 山形県史「山形県史 資料編15上」古代中世史料1 1977年
- 180 文徳實錄一 嘉祥三年六月廿八日
出羽國奏目、境接ニ夷落ニ、動爲ニ風塵ニ、至ニ有ニ嫌疑ニ、必資ニ占驗ニ、諸省ニ史生ニ一員ニ、置ニ陰陽師ニ一員ニ、許ニ之、
184 類聚三才格五 加減諸國官員并廢置事
太政官符
寒ニ置ニ陰陽師ニ一員ニ事
右得ニ出羽國解ニ備、太政官去年六月十一日符備、國解備、邊要之事備ニ豫レ豫レ本、不虞ニ御知レ機爲ニ先、此國與ニ陸奥ニ
去ニ達夜ニ、雖ニ復國有ニ大少ニ官員有ニ降差上ニ、而至ニ決ニ嫌疑ニ何故有ニ此無也。假令國內非レ無ニ倍異ニ、占ニ一候吉凶ニ
曾無ニ其人ニ、望請ニ永滅ニ史生具ニ殊置ニ陰陽師ニ、雖謂ニ官職ニ者、右大臣宜、奉ニ勤、依ニ請者、而今雜務多ニ官員減ニ、
望請ニ不レ者ニ史生ニ殊置ニ件員ニ、但考證傳折准ニ博士醫郎ニ者、同宣、奉ニ勤、依ニ請、
嘉祥四年二月廿一日

図 版



図版 1

▲ 倭田遺跡航空写真1966年（酒田市教育委員会提供）

▼ 遺跡近景（北から）



図版2

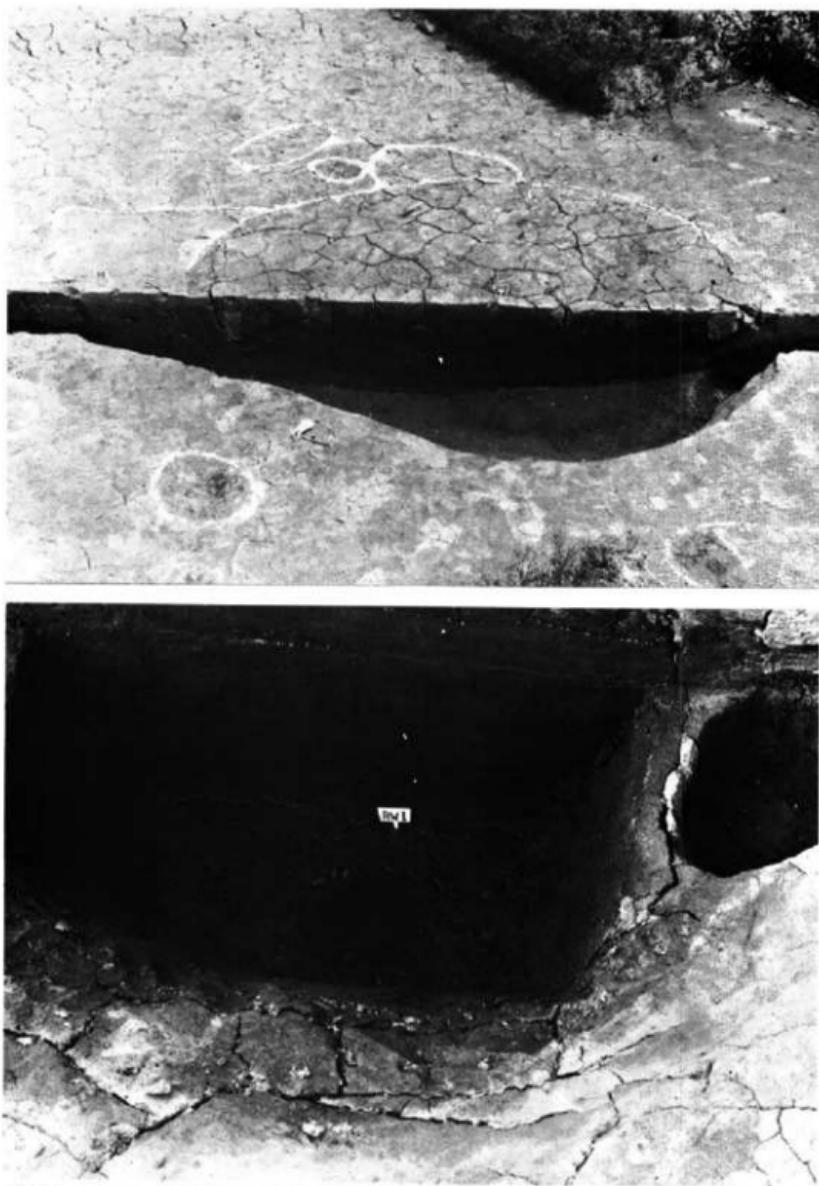
▲ S B40建物跡（北西から）

▼ S X26整地層周辺（北西から）



図版3 ▲ S B 2建物跡（東から）

▼ S B 100建物跡（東から）

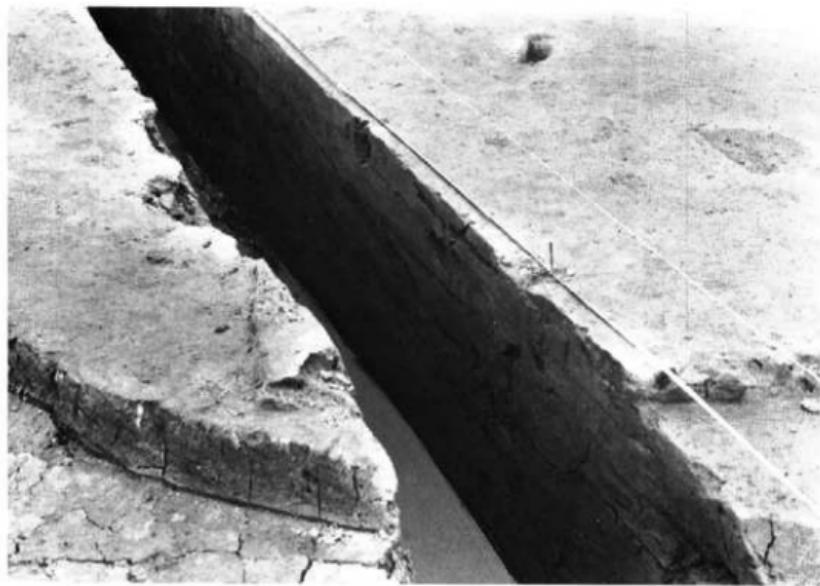
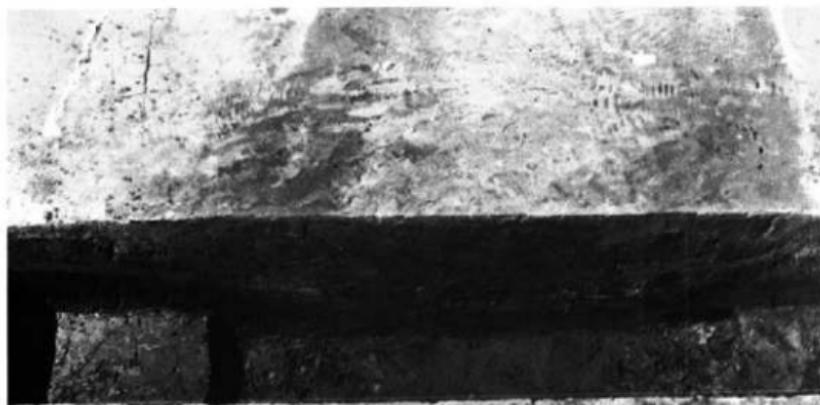


図版4 ▲ S K58・29土壤（南から）
▼ S K29土壤遺物出土状況（南から）

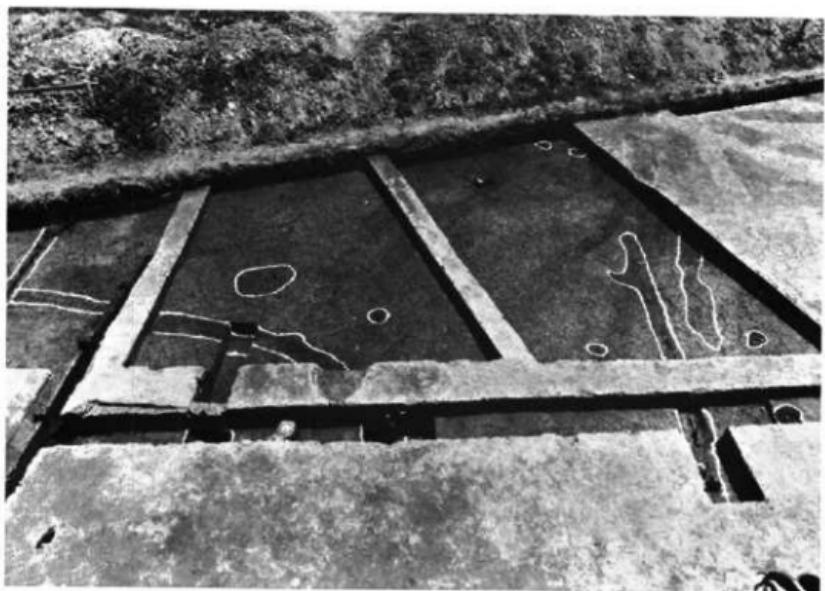


図版 5 ▲ S G61・116 河川跡（北から）

▼ 同 上 (南西から)



図版 6 ▲ S G61河川跡土層（南から）
▼ S G116河川跡土層（北西から）



図版7 ▲・S A 120・119・123板列（西から）

▼ S A 120・119板列 （南西から）



図版 8

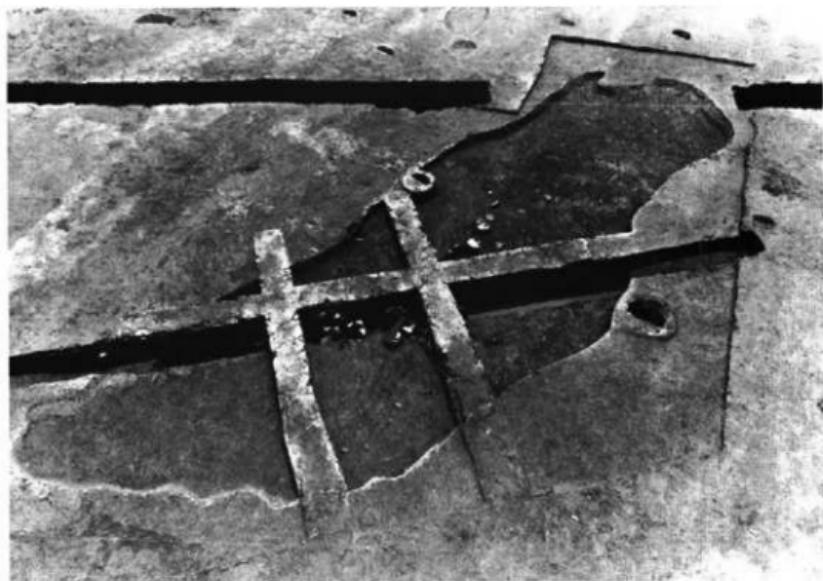
▲ SA120板列（西から）

▼ 同 土層（西から）



図版 9 ▲ S A 123板列土層（西から）

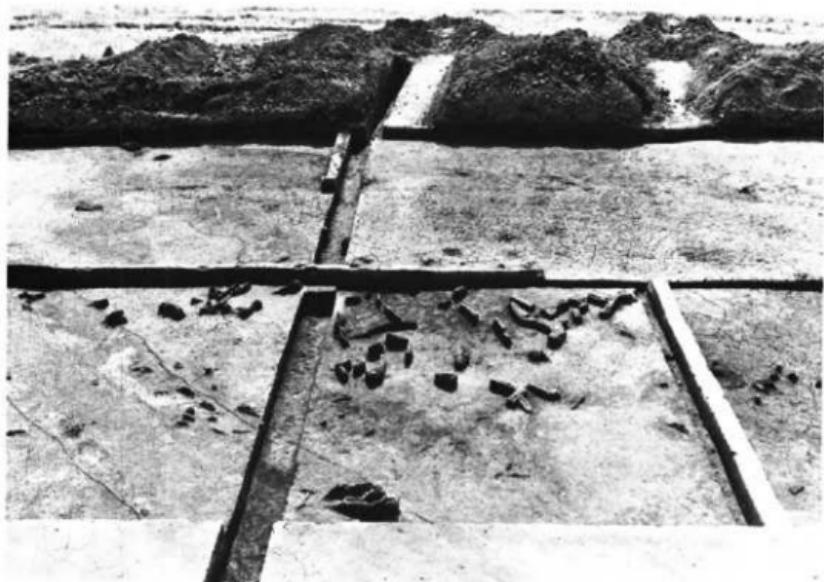
▼ E B 121柱根 （西から）



図版10

▲ SX26整地層（北から）

▼ 同上土層（北から）

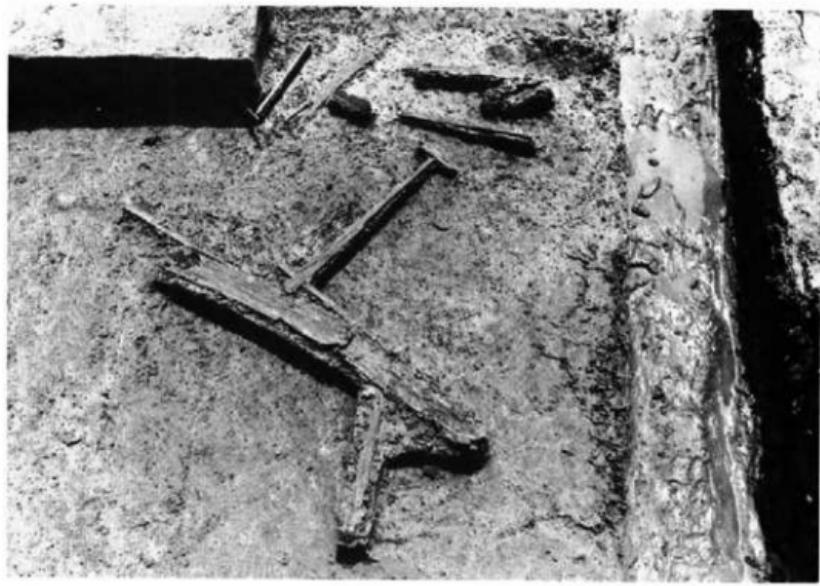


図版11 ▲ S M60祭祀遺構近景（東から）
▼ 同 上 (北から)

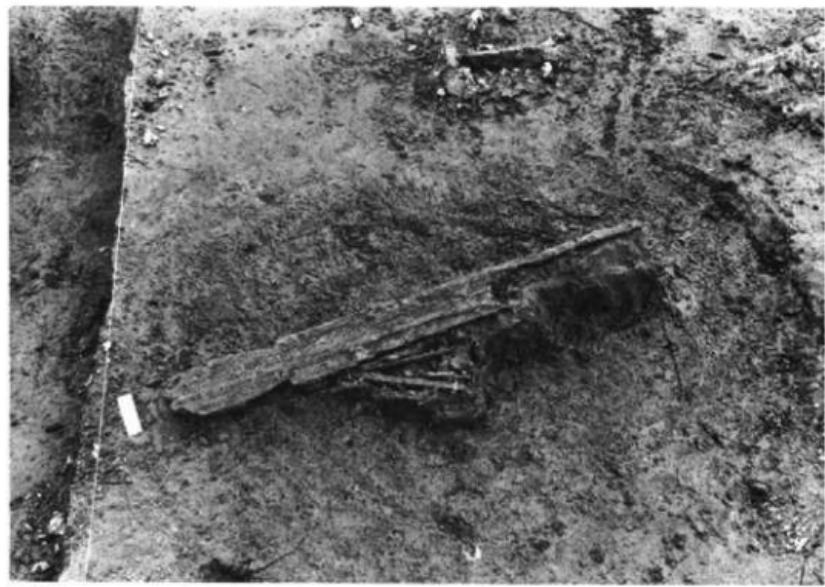


図版12 ▲ 人面墨描土器（98）出土状況（東から）

▼ 同土器内部斎串 （南から）



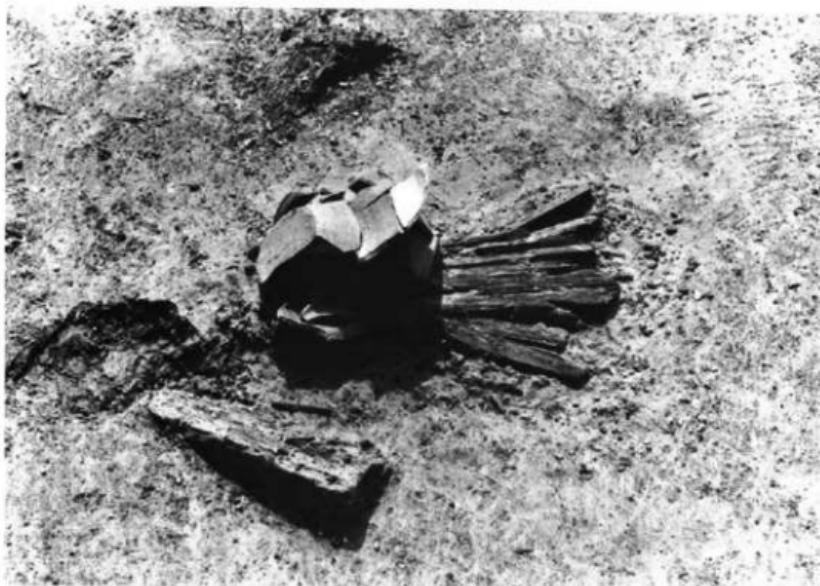
図版13 ▲ 人形(145・146・147・148) 馬形(167) 車輪(182・183・189・184・188・185・186・190・196) 出土状況(東から)
▼ 人形(144・157・158) 刀形(141) 出土状況(北から)



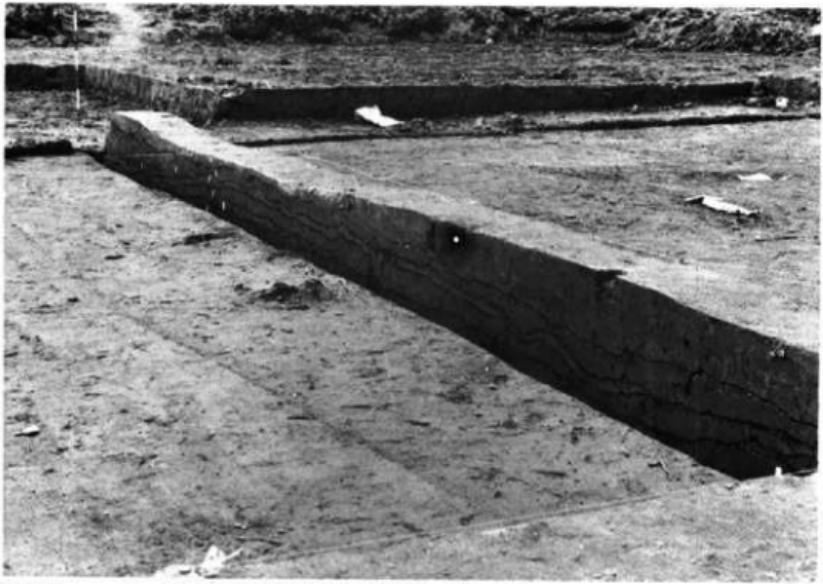
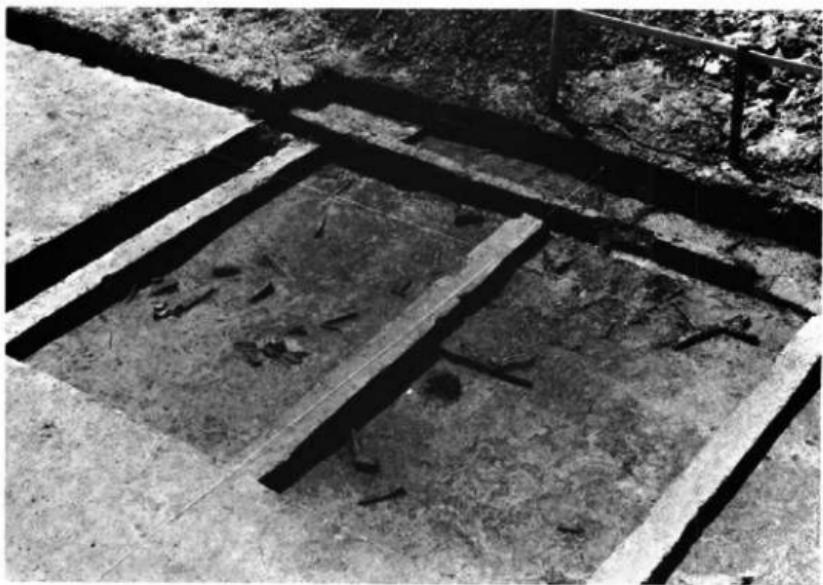
図版14

▲ 人形（左より147・146・148・145）出土状況（南東から）

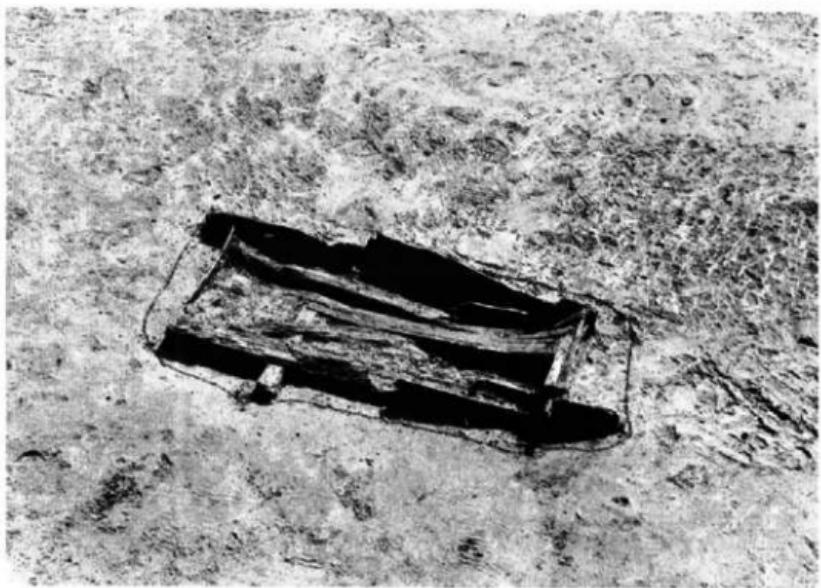
▼ 人形（143）出土状況（北から）



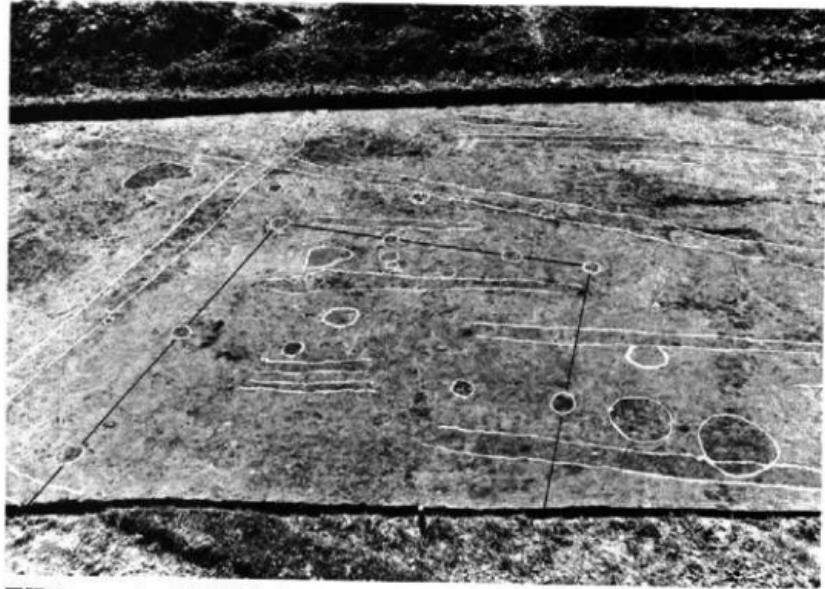
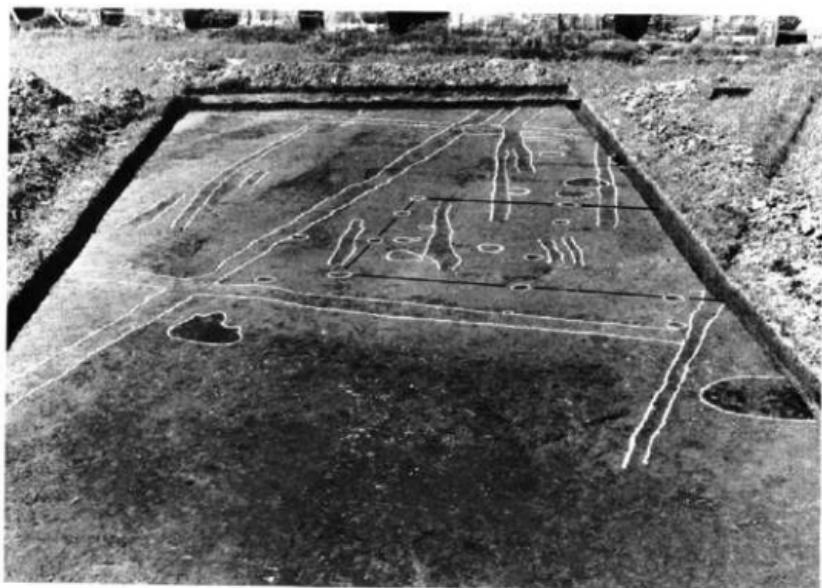
図版15 ▲ 裝（132）・人形（133）・斎串出土状況（東から）
▼ 馬形（167）出土状況（南から）



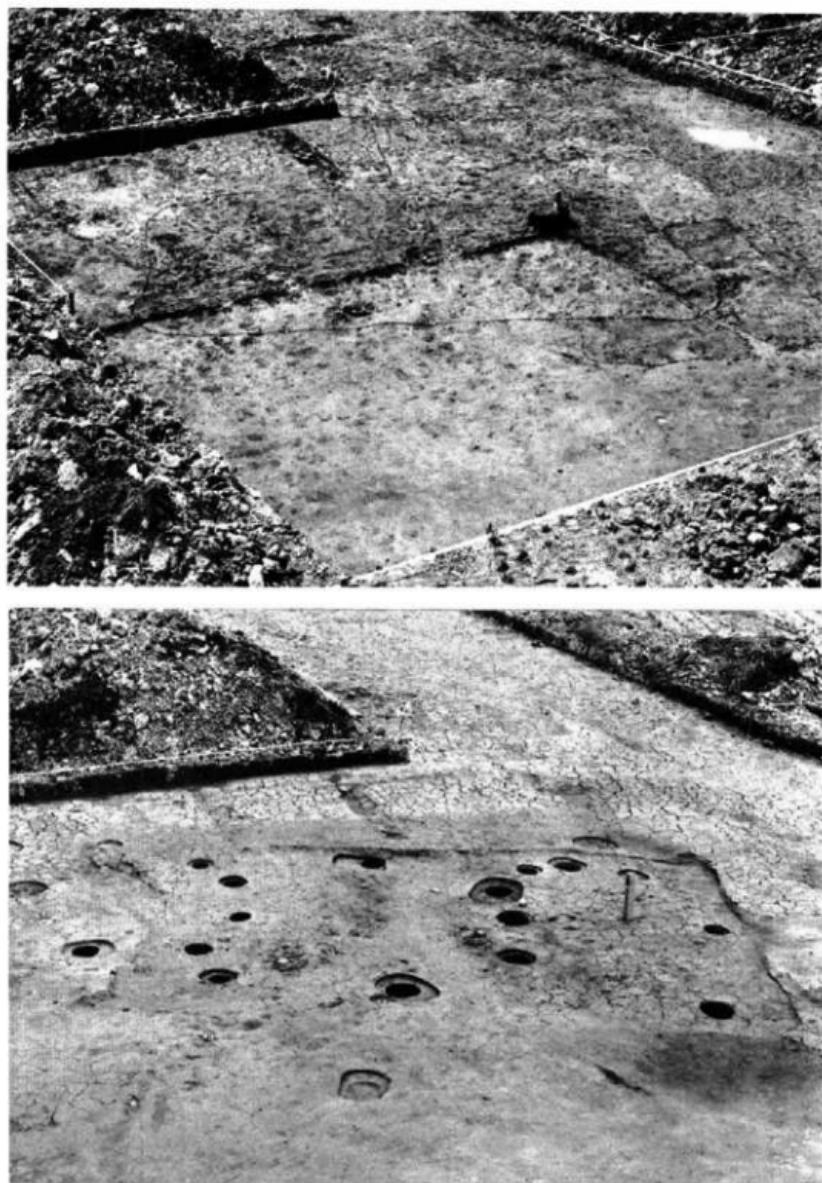
図版16 ▲ S M60祭祀遺構掘り下げ状況（東から）
▼ S M60祭祀遺構東西土層（南東から）



図版17 ▲ A区調査状況
▼ B区S X 1木箱出土状況（西から）



図版18 ▲ C区遺構検出状況（南から）
▼ S B 90建物跡（東から）



図版19 ▲ S T 201住居跡検出状況（北から）

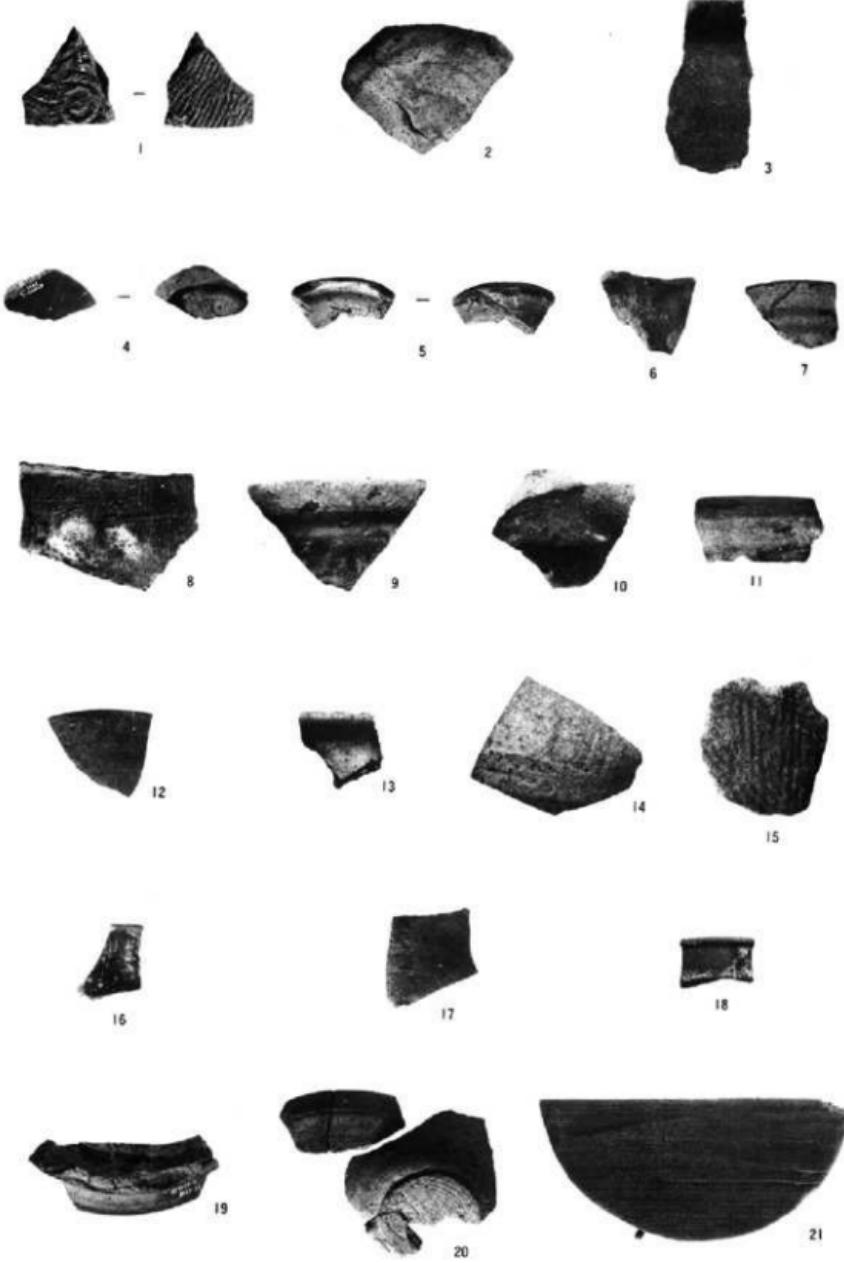
▼ 同 全景（北から）



図版20

▲ S D 202溝状遺構

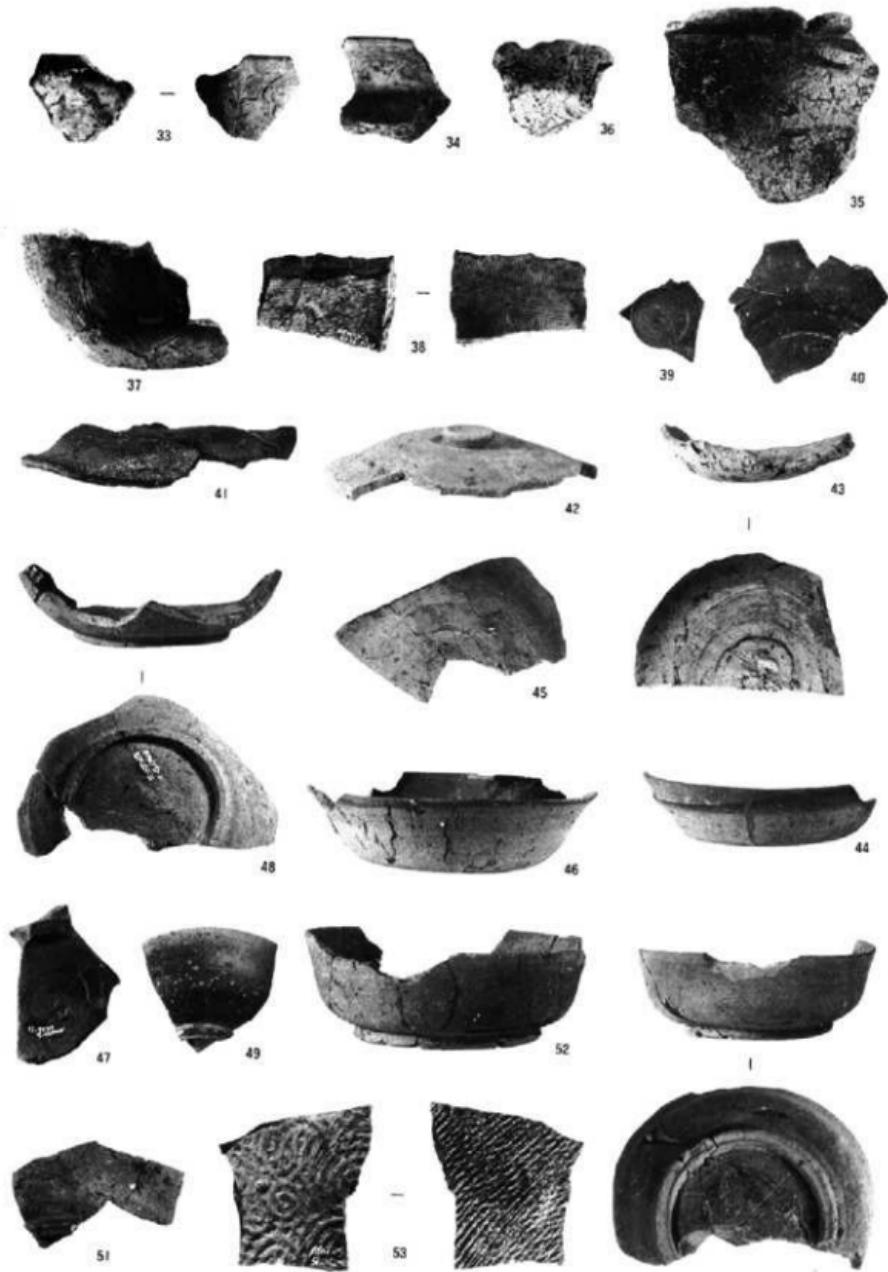
▼ 中央区VI層検出遺構



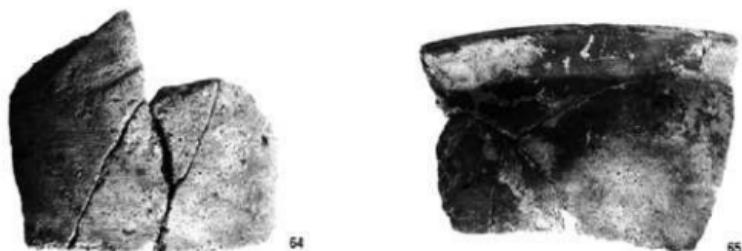
図版21 2次調査A区出土遺物（1）



図版22 2次調査A区出土遺物(2)



図版23 2次調査A区出土遺物(3)



図版24 2次調査A区出土遺物(4)



図版25 2次調査A区出土遺物（5）



図版26 2次調査A区出土遺物(6)



91



92



93



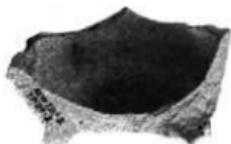
94



95



96



97



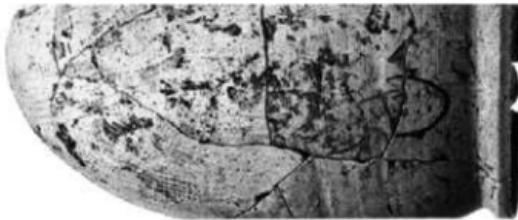
図版27 2次調査C区出土遺物（縮尺2分ノ1）

圖版28 S M60出土遺物(1) 人面壘指土器(S=1/4)



128
圖

98





圖版28 SM60出土遺物(2) 人面墨描土器(98) 内斎串



133



134



135



136

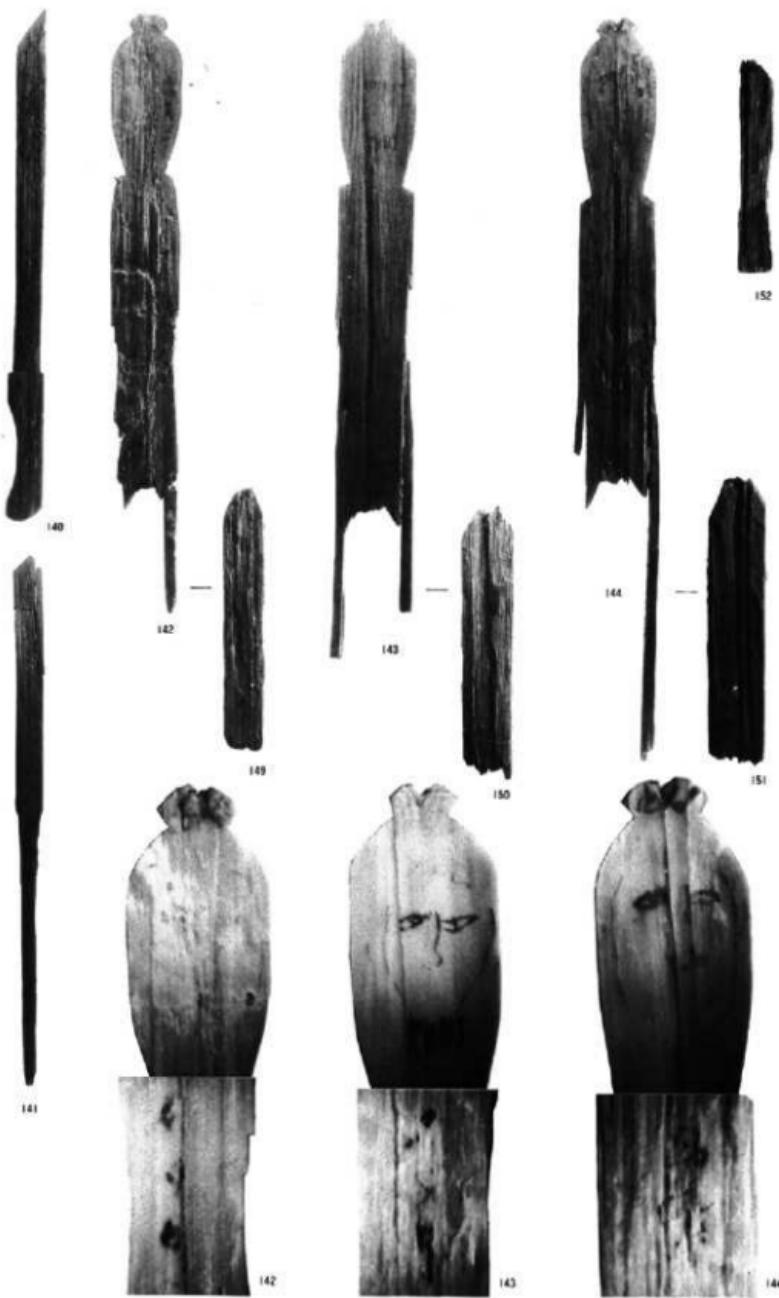


137

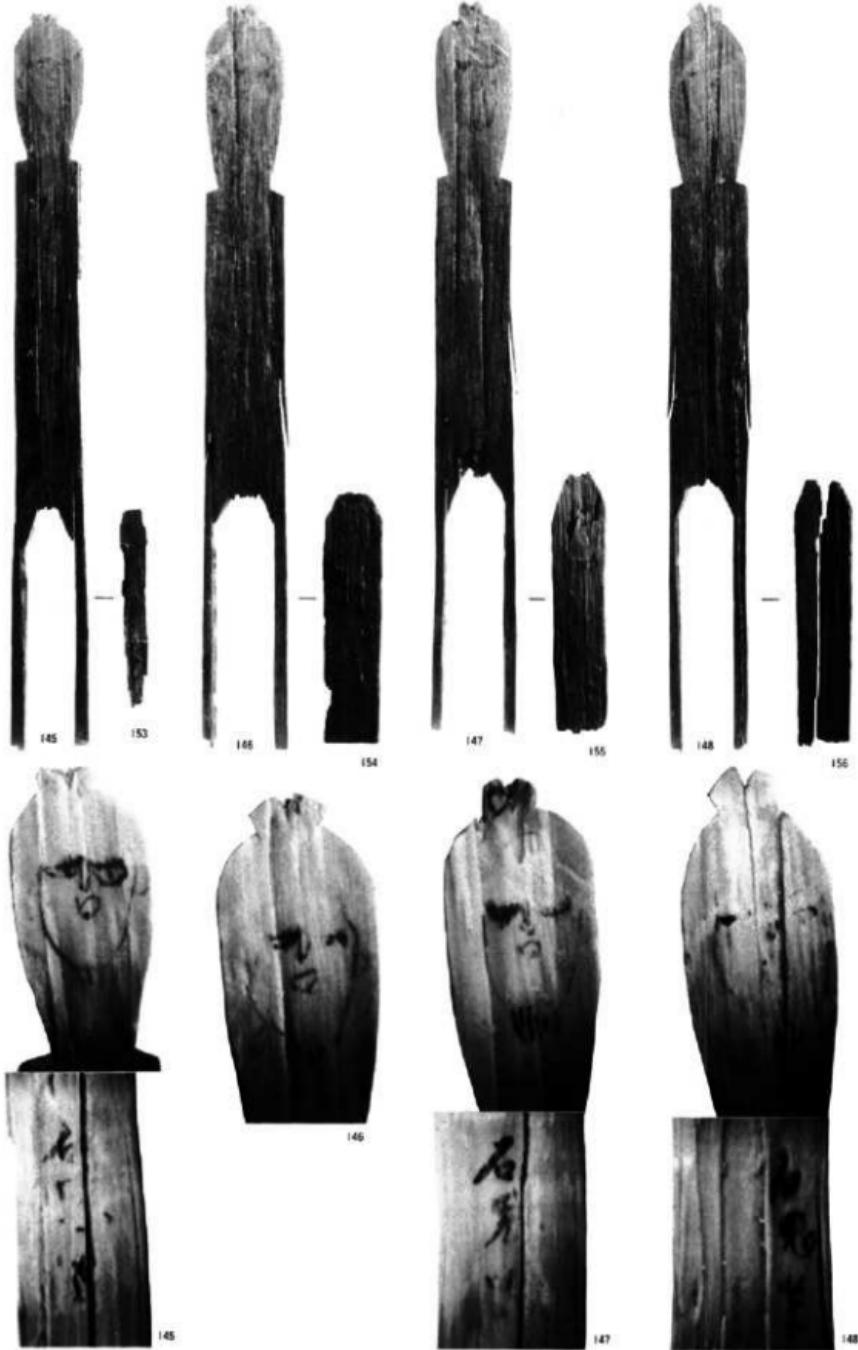


138

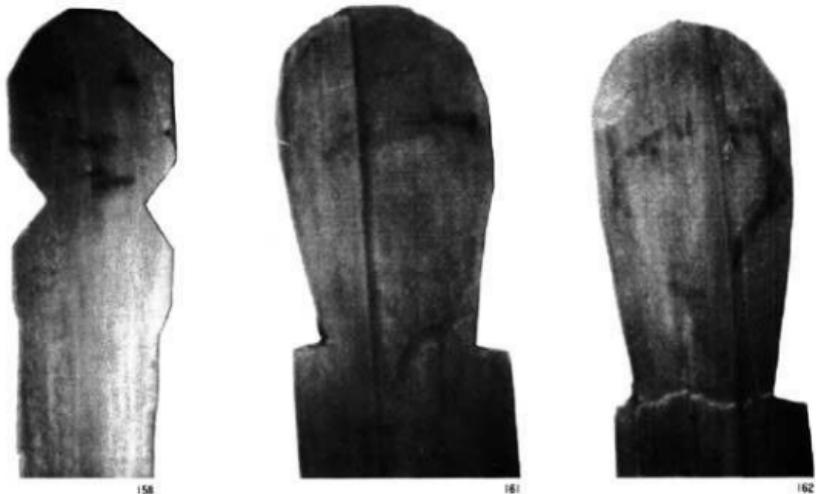
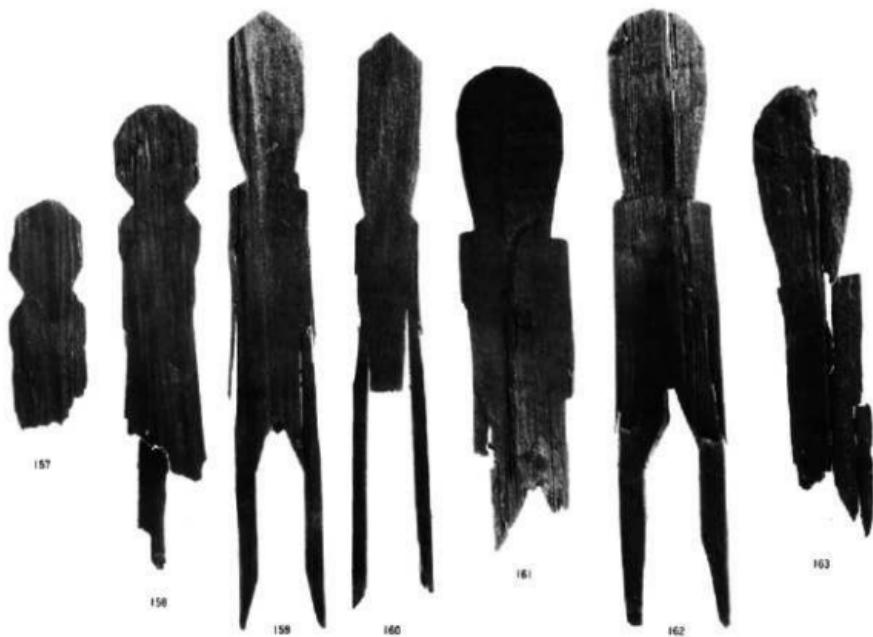
図版30 S M60出土遺物（3） 須恵器甕（甕内出土人形・斎串） 火切白



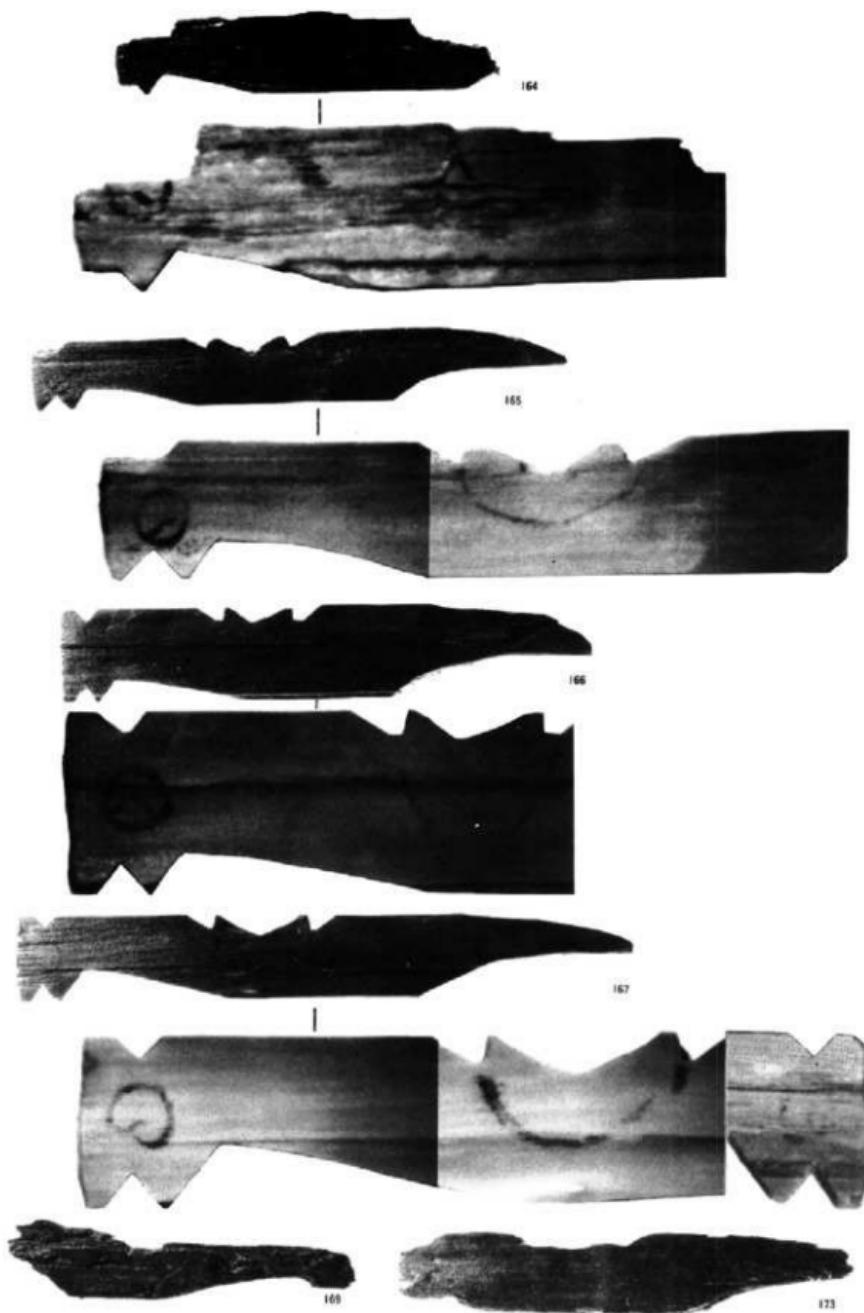
図版31 SM60出土遺物(4) 刀形・人形 (下段赤外線テレビによる $S = 1/2$)



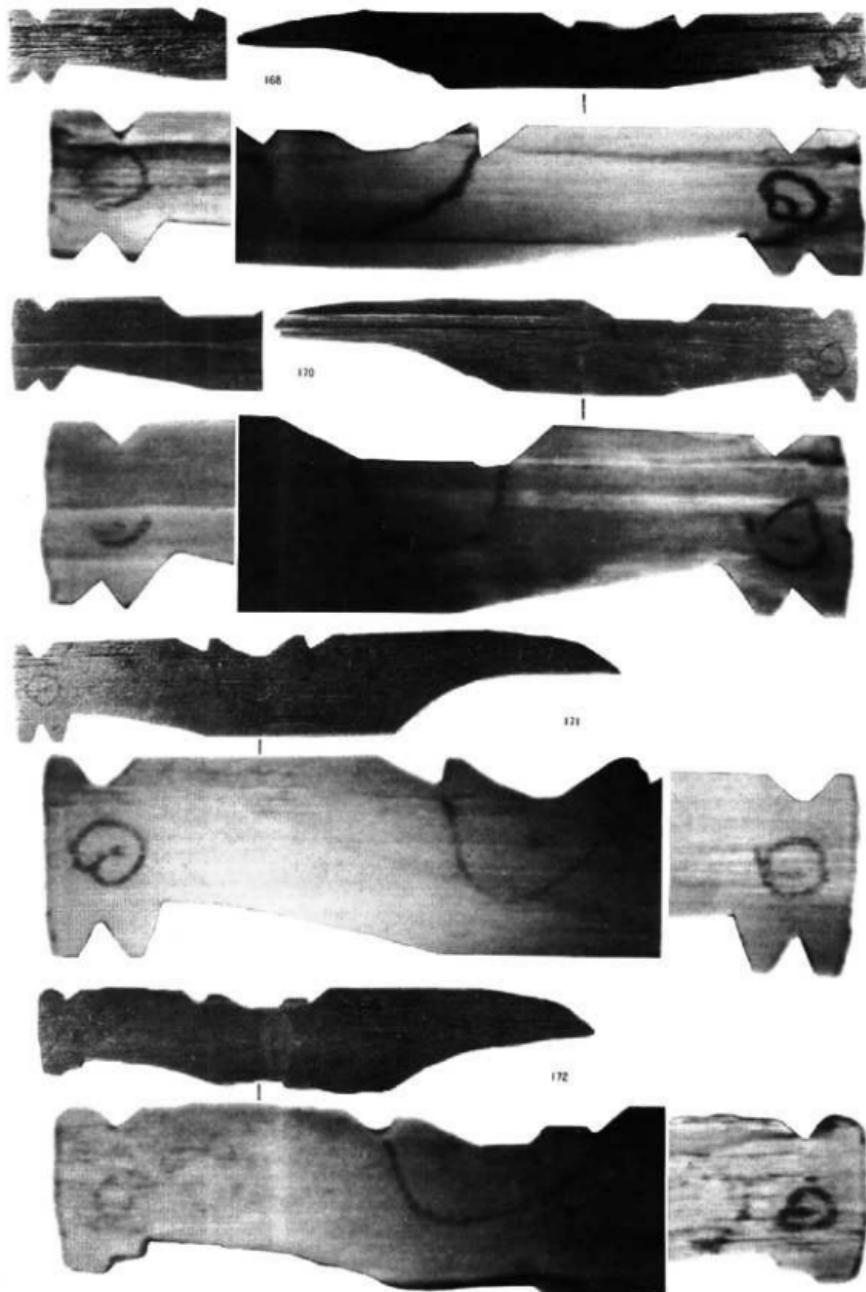
図版32 SM60出土遺物 (5) 人形 (下段赤外線テレビによる $S = 1/2$)



図版33 S M60出土遺物 (6) 人形 (下段赤外線テレビによるS=1/2)



図版34 SM60出土遺物(7) 馬形(各下段赤外線テレビによるS=1/2)



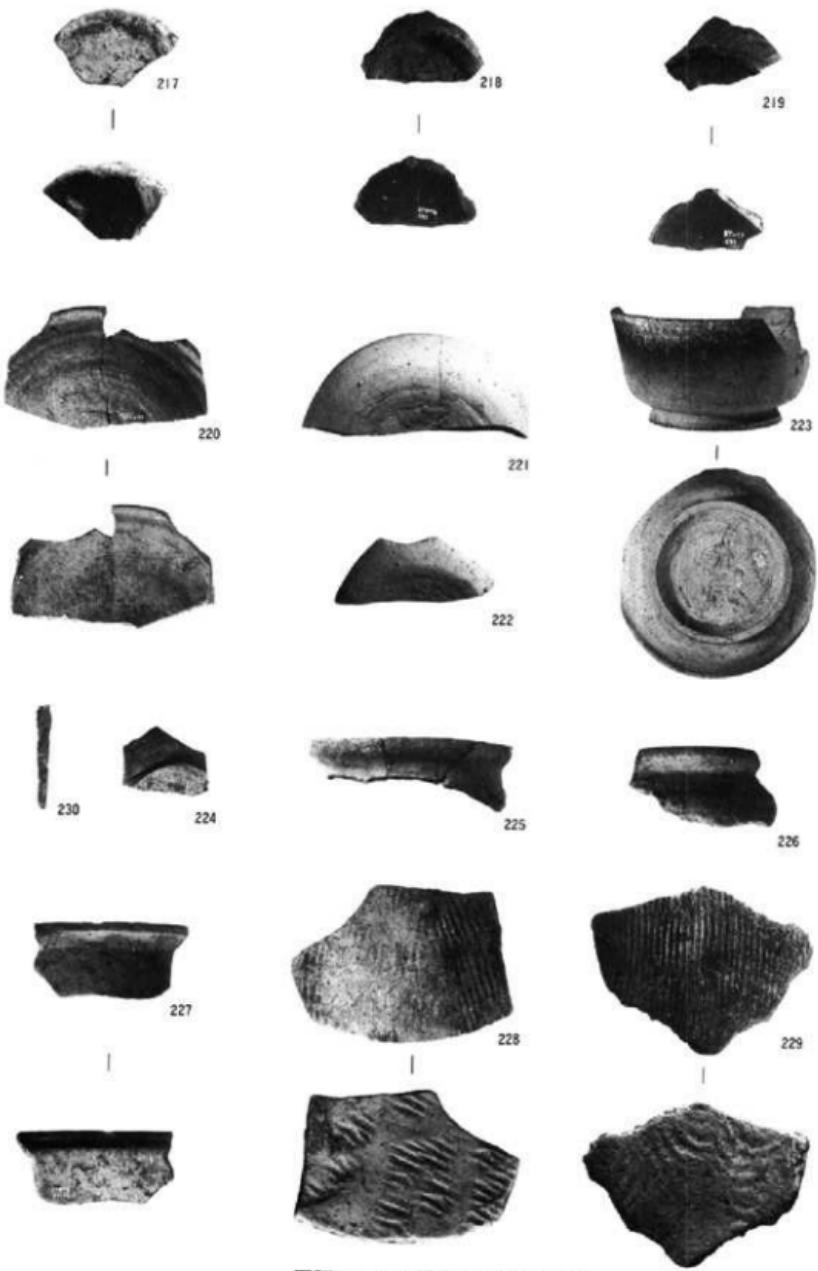
図版35 S M60出土遺物 (8) 馬形 (各下段赤外線テレビによるS=1/2)



图版36 SM60出土遗物(9) 索串



図版37 SM60出土遺物(10) 斧串・他



図版38 1次調査出土遺物（1）



231



232



234



235



233



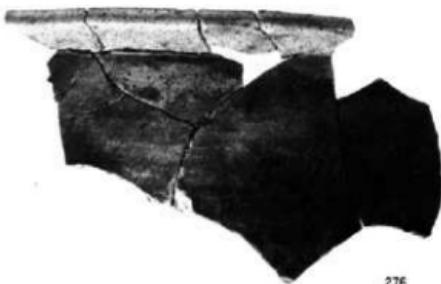
237



236



275



276

図版39 1次調査出土遺物（2）



238



239



240



241



242



243



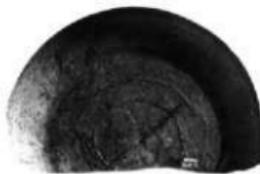
244



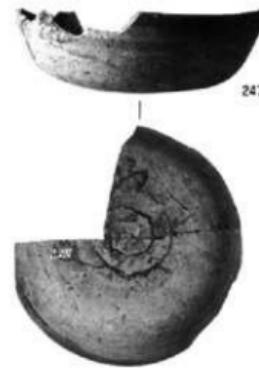
245



246



247



248



249



図版40 1次調査出土遺物（3）



250



251



252



253



254



255



256



258



259



260



図版41 1次調査出土遺物（4）



262



263



264



265



266



267



268



269



270



271



272

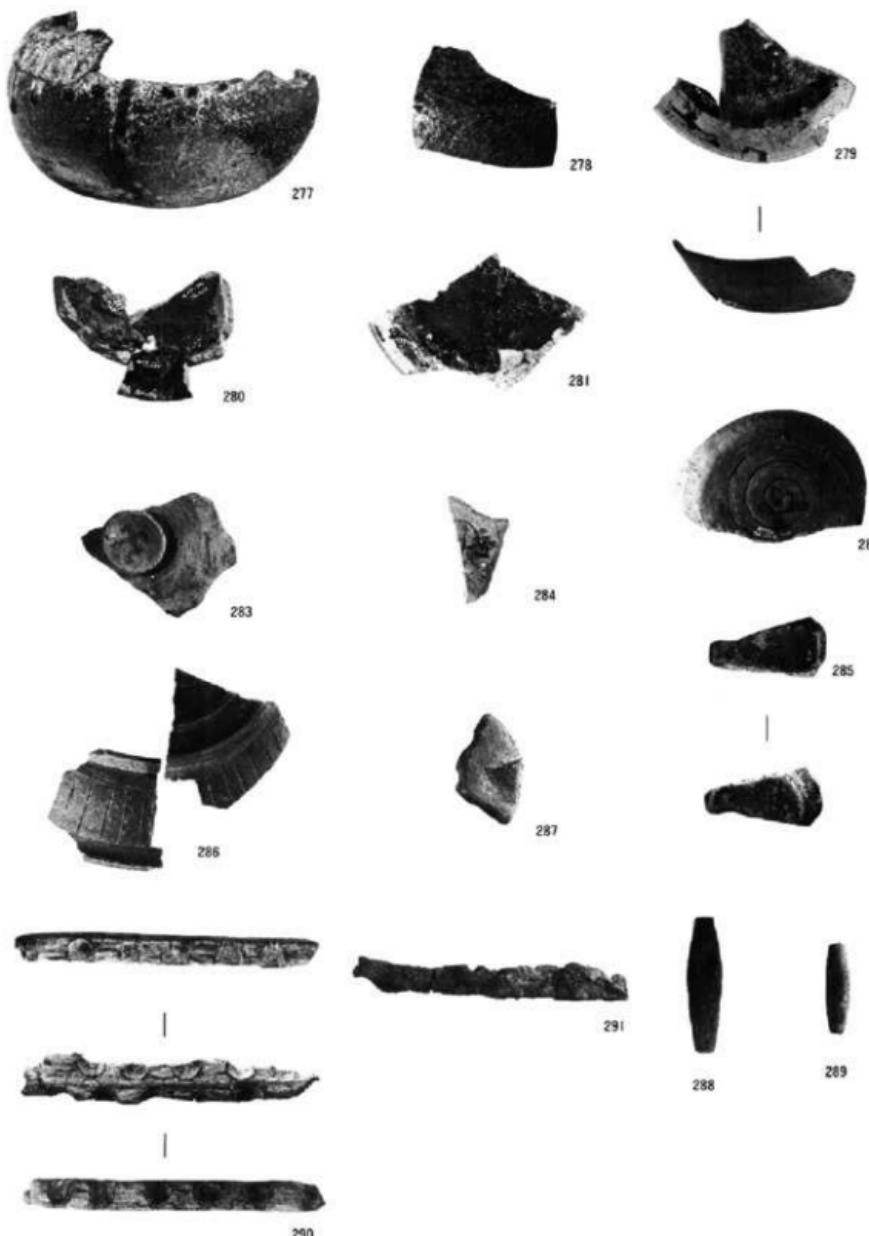


273



274

図版42 1次調査出土遺物（5）



图版43 1次調查出土遺物（6）

山形県埋蔵文化財調査報告書 第77集

俵 田 遺 跡
第 2 次 発 挖 調 査 報 告 書

昭和59年3月20日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発 行 山 形 県

山 形 県 教 育 委 員 会

印 刷 油 長 印 刷 所

酒田市日吉町2丁目3の31 ☎22-3033
